平尾墳墓群

1998年12月

香川県綾歌町教育委員会

平尾墳墓群

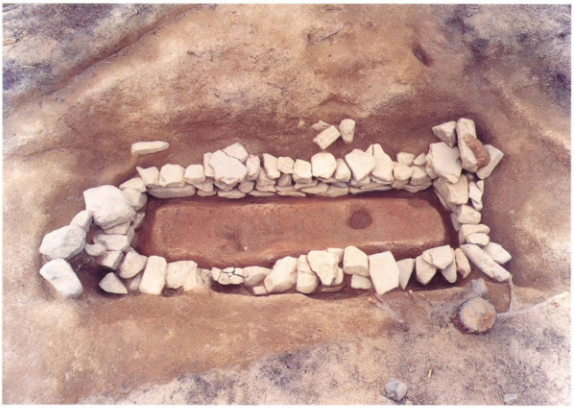
1998年12月

香川県綾歌町教育委員会

1．2号墓全景（南より）

2．2号墓第1・第2主体部（西より）

1．3号墓全景（北西より）



2．3号墓第1主体部（南より）

はじめに

昭和62年、綾歌町南部丘陵地にレジャーランド開発計画があり、分布調査及び再踏査の結果、周知の墳墓と併せ7基の墳墓を確認しました。この結果に基づき開発業者㈱レオマと協議を重ねた結果、2墓については現状保存、事業計画の変更の難しい5基の墳墓について発掘調査を行うこととなりました。

調査は、香川県教育委員会文化行政課の指導のもと、綾歌町埋蔵文化財発掘調査団を組織し、実質調査は瀬戸内考古学研究所及び岡山理科大学学生諸氏が担当し、第1次調査を昭和62年7月24日～8月13日、第2次調査を同年9月1日～9月18日に実施しました。

調査の結果、1号墳は墳墓の可能性はなくなり、2号・3号墓は弥生墳丘墓の可能性が強く、4号・5号墳は古墳時代前期の古墳であり、古墳時代形成の過程を究明する上で非常に貴重な資料と考えられます。そこで、町教育委員会は、再度㈱レオマと協議し、2号墓については現地保存とし、昭和63年1月18日～2月29日最終調査として3号墓の石室・石棺の主体部及び5号墳石棺主体部を移築復元すると共に3号墓主体部粘土床を移築保存しました。

いずれも、千数百年の昔から眠りつづけた墳墓であり、先人の偉大さを痛感した私たちは、これらの遺産を大切に保存するとともに、後世に伝えなければならないと思います。今回の調査を機に町民の埋蔵文化財に対する一層の関心と理解を得て文化財保護行政に努めたいと思います。

最後に、本調査にあたり、適切なご指導を頂いた香川県教育委員会文化行政課、献身的な調査を頂いた瀬戸内考古学研究所・岡山理科大学、ご協力ご支援いただいた㈱レオマ並びに関係者各位に厚く感謝の意を表し発刊のことばといたします。

1998年12月1日

綾歌町教育委員会

教育長　西浦廣海

例　言

1．本書は香川県綾歌郡綾歌町岡田上平尾に所在した平尾墳墓群の発掘調査報告書である。
2．調査は綾歌町教育委員会の委託を受け瀬戸内考古学研究所が調査を実施した。
3．調査は、林間総合レジャー施設（現：レオマワールド）建設に伴う事前調査である。
4．遺跡・遺構の実測図の作成および写真撮影は調査参加者全員が行った。
なお、発掘調査終了後、移築などのための最終確認調査が、香川県教育委員会の國木健司（現：香川県立香川中央高等学校）によって行われた。その調査において2号墓と3号墓の間の土壙墓群が確認された。この遺構の実測図作成および写真撮影は國木が行った。
5．遺物の整理は、岡山理科大学の亀田修一、白石　純が行った。
6．遺物の実測、製図、写真撮影は亀田、白石が行った。
7．遺構の製図は亀田、白石が行った。
8．本書の執筆は、第3章第3節を亀田、第3章第4節を國木、第5章を亀田・白石、その他を白石が担当した。
9．本書の編集は亀田・白石が行った。
10．本書に用いた方位は磁北で、高度はすべて海抜高である。
11．本書に使用した地図のうち第1図は国土地理院発行の1/50000地形図「丸亀」を複製、加筆したものである。
12．本書の作成にあたり、下記の方にお世話になった。記して謝意を表したい。
赤塚次郎、植野浩三、宇野隆夫、大久保徹也、大山真充、岡村秀典、小田富士雄、川西宏幸、蔵本晋也、近藤武司、近藤義郎、佐藤竜馬、武末純一、高田貫太、高橋護、都出比呂志、寺沢薫、中島郁夫、新居勉、西谷正、丹羽佑一、土生田純之、平井泰男、廣瀬常雄、藤田忠彦、藤好史郎、古瀬清秀、北條芳隆、正岡睦夫、松井和幸、松本敏三、真鍋昌宏、渡部明夫、香川県教育委員会（五十音順、敬称略）
13．2号墓は現在レオマワールドの敷地内に現状保存されている。また、3号墓の第1主体部、第4主体部と5号墳の第4主体部の3基は、綾歌町老人福祉センターの敷地内に移築保存されている。
そして、3号墓第1主体部の粘土床は、綾歌町役場1階ロビーに移築保存されている。

目　次

第１章　調査の経過 ……1
　第１節　調査の経過 ……1
　第２節　調査組織 ……2
第２章　遺跡の立地と歴史的環境 ……3
　第１節　遺跡の立地 ……3
　第２節　歴史的環境 ……3
第３章　発掘調査の成果 ……6
　第１節　各墳墓の位置関係 ……6
　第２節　２号墓 ……6
　　１　墳丘 ……6
　　２　埋葬施設……13
　　３　遺物……22
　　４　小結……24
　第３節　３号墓……25
　　１　墳丘……25
　　２　埋葬施設……32
　　３　その他の墳丘内の遺構……40
　　４　遺物……41
　　５　小結……43
　第４節　２号墓・３号墓間の土壙墓群……48
　第５節　４号墳……50
　　１　墳丘……50
　　２　埋葬施設……50
　　３　遺物……56
　　４　小結……56
　第６節　５号墳……57
　　１　墳丘……57
　　２　埋葬施設……57
　　３　遺物……60
　　４　小結……60
第４章　出土遺物の自然科学的分析……63
　第１節　出土土器の胎土分析……63
　第２節　墳墓群出土の赤色物質について……69
　第３節　石棺石材の産地について……72
第５章　まとめ……74

挿図目次

第1図　周辺の遺跡分布図……4
第2図　墳墓群の位置図……7
第3図　2号墓調査前墳丘測量図……8
第4図　2号墓墳丘測量図……9
第5図　2号墓墳丘断面図……10
第6図　第1主体部上面検出状況……12
第7図　第1主体部……13
第8図　第2主体部……14
第9図　第3主体部……15
第10図　第4主体部……16
第11図　第5主体部……17
第12図　第6主体部……17
第13図　第7主体部……17
第14図　第8主体部……17
第15図　第9主体部……18
第16図　第10主体部……18
第17図　第11主体部……19
第18図　第12、第13主体部……20
第19図　第14主体部……20
第20図　第15主体部……20
第21図　第16主体部……21
第22図　第17主体部……22
第23図　2号墓第2主体部内出土鉄剣……22
第24図　2号墓出土土器……23
第25図　2号墓第11主体部内出土石鏃……23
第26図　3号墓調査前墳丘測量図……26
第27図　3号墓墳丘断面図……27・28
第28図　3号墓計測点位置図……29
第29図　3号墓墳丘測量図……30
第30図　3号墓第1主体部……33
第31図　大韓民国義昌茶戸里遺跡1号墳割竹形木棺……36
第32図　3号墓第2主体部……37
第33図　3号墓第3主体部……38
第34図　3号墓第4主体部……39
第35図　3号墓意味不明土壙1……40

第36図　3号墓意味不明土壙2……41
第37図　3号墓出土遺物……42
第38図　朝鮮半島の無文土器時代の竪穴式石室と出土遺物……46
第39図　大韓民国義昌茶戸里遺跡58号墳土層断面図……47
第40図　2号墓・3号墓間土壙墓位置図……48
第41図　2号墓・3号墓間の土壙墓群……49
第42図　4号墳・5号墳調査前墳丘測量図……51
第43図　4号墳・5号墳墳丘測量図……52
第44図　4号墳・5号墳墳丘断面図……53
第45図　4号墳第1主体部……54
第46図　4号墳第2主体部……55
第47図　4号墳集石状遺構……55
第48図　5号墳第1主体部……57
第49図　5号墳第2主体部……58
第50図　5号墳第3主体部……59
第51図　5号墳第4主体部……60
第52図　4号墳・5号墳出土土器……60
第53図　K-Ca散布図　平尾墳墓群と周辺遺跡出土土器の比較……65
第54図　Sr-Rb散布図　平尾墳墓群と周辺遺跡出土土器の比較……65
第55図　K-Ca散布図　各墳墓出土土器の比較……66
第56図　Sr-Rb散布図　各墳墓出土土器の比較……66
第57図　平尾墳墓群出土土器表面の実体顕微鏡写真……68
第58図　2号墓第2主体部赤色粘土のX線回折図……70
第59図　3号墓第1主体部赤色粘土床のX線回折図……70
第60図　4号墓第1主体部出土土器表面の蛍光X線スペクトル図……71
第61図　平尾墳墓群周辺の地質図……72
第62図　サヌキトイド原産地原石と平尾墳墓群石室石材の偏光顕微鏡写真……73

表　目　次

第1表　土器観察・胎土分析表……67
第2表　赤色粘土の化学分析値……71
第3表　石室・石棺の石材および原産地原石の分析値……72

図版目次

巻首図版1－1　2号墓全景（南より）
　　2　2号墓第1・第2主体部（西より）

巻首図版２－１　３号墓全景（北西より）
　　２　３号墓第１主体部（南より）
図版１－１　平尾墳墓群遠景（北より）
　　２　２号墓調査前全景（南より）
　　３　２号墓全景（南より）
図版２－１　２号墓第１主体部上面検出状況（南より）
　　２　２号墓第１・第２主体部（南より）
　　３　２号墓第１主体部（西より）
図版３－１　２号墓第１主体部（西より）
　　２　２号墓第１主体部（東より）
　　３　２号墓第２主体部（西より）
　　４　２号墓第２主体部鉄剣出土状況
図版４－１　２号墓第３主体部（南より）
　　２　２号墓第４主体部（南より）
　　３　２号墓第４主体部（南より）
　　４　２号墓第５主体部（北より）
図版５－１　２号墓第７主体部（南より）
　　２　２号墓第８主体部（西より）
　　３　２号墓第９主体部（南西より）
　　４　２号墓第10主体部（北東より）
図版６－１　２号墓第11主体部（南西より）
　　２　２号墓第12主体部（南より）
　　３　２号墓第13主体部（西より）
　　４　２号墓第14主体部（西より）
図版７－１　２号墓第15主体部（北より）
　　２　２号墓第16主体部（東より）
　　３　２号墓第17主体部（北より）
図版８－１　３号墓全景（北西より）
　　２　３号墓突出部（南東より）
図版９－１　３号墓突出部と円丘部（北西より）
　　２　３号墓祭壇状テラス（北西より）
図版10－１　３号墓突出部側面（南より）
　　２　３号墓突出部南側（第27図ｆ）断面（南より）
　　３　３号墓突出部南側（第27図ｈ）断面（南より）
図版11－１　３号墓円丘部南側（南西より）
　　２　３号墓円丘部南西側（南西より）
　　３　３号墓円丘部西側（西より）
図版12－１　３号墓円丘部西側の石とテラス（北西より）

2　3号墓円丘部西側の石とテラス（南東より）
図版13－1　3号墓第1主体部（南より）
2　3号墓第1主体部（東より）
3　3号墓第1主体部東部（東より）
図版14－1　3号墓第1主体部西壁（東より）
2　3号墓第1主体部北壁西側（南より）
3　3号墓第1主体部北壁東側（南より）
図版15－1　3号墓第1主体部東壁（西より）
2　3号墓第1主体部南壁東側（北より）
3　3号墓第1主体部南壁西側（北より）
図版16－1　3号墓第1主体部鉄剣出土状況（南より）
2　3号墓第1主体部鉄剣出土状況（南より）
3　3号墓第1主体部解体途中（南より）
図版17－1　3号墓第1主体部解体途中東側（東より）
2　3号墓第1主体部解体途中西側（西より）
3　3号墓第1主体部石材除去後（南より）
図版18－1　3号墓第2主体部（北より）
2　3号墓第2主体部（東より）
図版19－1　3号墓第3主体部（南より）
2　3号墓第3主体部土器1出土状況（南より）
図版20－1　3号墓第4主体部（南より）
2　3号墓第4主体部（北より）
3　3号墓第4主体部石材除去後（北より）
図版21－1　3号墓意味不明土壙1（北東より）
2　3号墓意味不明土壙1溝部（北東より）
3　3号墓意味不明土壙2（北より）
図版22－1　2号墓・3号墓間土壙墓群（北東より）
2　2号墓・3号墓間土壙墓群（南西より）
3　2号墓・3号墓間土壙墓1・2（南東より）
図版23－1　2号墓・3号墓間土壙墓1（北東より）
2　2号墓・3号墓間土壙墓2（北東より）
3　2号墓・3号墓間土壙墓3（北東より
図版24－1　4号墳全景（西より）
2　4号墳・5号墳全景（南より）
3　4号墳全景（西より）
図版25－1　4号墳集石状遺構（北西より）
2　4号墳第1主体部（西より）
3　4号墳第1主体部（西より）

4　4号墳第2主体部（北東より）
図版26－1　5号墳全景（東より）
2　5号墳第1・第2主体部（東より）
図版27－1　5号墳第2主体部（東より）
2　5号墳第3主体部（東より）
3　5号墳第4主体部（南東より）
4　5号墳第4主体部（北東より）
5　5号墳第4主体部南小口部（南東より）
図版28－1　2号墓出土土器（表）
2　2号墓出土土器（裏）
図版29－1　3号墓第1主体部出土鉄剣
2　3号墓第3主体部出土土器1
3　3号墓第3主体部出土土器2
図版30－1　4号墳・5号墳出土土器（表）
2　4号墳・5号墳出土土器（裏）
3　2号墓第11主体部出土石鏃
4　2号墓第2主体部出土鉄剣
5　2号墓第2主体部出土鉄剣茎部
図版31－1　1998年春の2号墓（西より）
2　3号墓第1・第4主体部、5号墳第4主体部の移築場所
3　移築された3号墓第1主体部

第１章　調査の経過

第１節　調査の経過

平尾墳墓群は、株式会社レオマ（大阪市）が香川県綾歌郡綾歌町岡田上半尾地区に林間総合レジャー施設（現：レオマワールド）を計画し、綾歌町教育委員会がこの開発計画の予定地内に遺跡の存在が考えられることから、文化財保護委員とともに遺跡確認のための踏査を行い、３基の古墳らしき盛土を発見し確認された遺跡である。

遺跡は、当初３基の古墳が存在すると推定され、１号墳、２号墳、３号墳と命名して発掘調査に入った。しかし、発掘調査期間中に新たに２基の古墳を確認したため４号墳、５号墳と命名し、引き続き期間を延長し調査を継続することとなった。また、以下で述べるが２号墳、３号墳は調査が進行するに従い、古墳時代以前の所産であると推測され、以下２号墓、３号墓として説明する。

この結果、発掘調査は１号墳・２号墓・３号墓の調査期間として昭和62（1987）年７月24日から８月13日（１次調査）まで、４号墳・５号墳の調査は昭和62（1987）年９月１日から９月18日（２次調査）までの合計39日間行った。

１次調査は、１号墳・２号墓・３号墓の３基について実施した。

１号墳は、標高105mの谷部のやや平坦面上に立地している。調査前の地表面観察では、やや楕円形ではあるが直径約14m、高さ約１mの円墳であると予想されていた。調査は、頂部を中心に十字に畦を残し、四方を掘り下げるように調査区を設定し、その一区画を掘り下げていった。それに並行して構築状況、主体部の確認を目的として十字の畦に沿って掘り下げた。しかし、この十字トレンチでは埋葬主体が確認できず、さらに遺構追求のためこのトレンチを墳丘盛土の基底部（約１mの深さ）まで掘り下げたが、やはり遺構は確認できなかった。この結果、遺構確認トレンチの掘り下げおよびトレンチの断面観察結果からこの古墳は東側の林道新設時に残土を盛ったものではないかと推測され、古墳ではないと判断した。よって本報告書では、１号墳の説明はここだけにとどめた。

２号墓は、当初現存長約22mの前方後円墳と推測されていた。南の山から北に延びる尾根が、標高138.18m地点で一度頂部をなし、そしてこの頂部から再びゆるやかに尾根が北に下っている。墳丘は、この標高138.18mの尾根頂部に円丘部をつくり、突出部は尾根の南側に延びている。また、円丘部北側は、すでに果樹園造成の際に５分の２ほど削られていた。

調査は埋葬施設および墳丘構築状況観察のためのトレンチを円丘部から突出部にかけて設定するとともに、円丘部と突出部の中央にこのトレンチと直交するようにトレンチを設定し実施した。また、このトレンチの掘り下げと並行し、墳丘全体の表土層の掘り下げを行った。そして、表土除去作業の結果、円丘部で７基、円丘部と突出部の間および突出部で10基の埋葬主体部を確認するに至った。また、出土遺物、埋葬主体部のありかたなどの検討から当初推定していた古墳ではなく、弥生時代の前方後円形を呈した墳丘墓であることがわかった。

３号墓は、２号墓から南西方向に約110m離れた標高141.12mの尾根頂部に立地している。同墓は当初後円部が尾根頂部に位置し、この尾根が北西方向に緩やかに下る部分に前方部が延びている墳長約28mの前方後円墳と推定していた。しかし調査の結果、円丘部が不整円形を呈し、その円丘部付近

に2基、南西墳端部近くに1基の計3基の主体部が確認された。遺物は極めて少なく、はっきりしないが、一応弥生時代の墳丘墓と推測した。

続く2次調査では、4号墳・5号墳の発掘調査に着手した。発掘調査前の地形測量、地表面観察では、4号墳と5号墳が一つの古墳として、墳長約40m前方後円墳ではないかと予測して調査に入った。しかし、推定墳長約18mの前方後円墳（4号墳）と直径10mの円墳（5号墳）の2基の古墳であることが確認された。

4号墳では、後円部で1基、墳丘外で1基の埋葬施設を確認した。後円部は、古墳東側の果樹園造成の際、半分ほど削られ、主体部もほぼ半分が消失していた。そして、残り半分の主体部を調査したところ後世の盗掘、かく乱により主体部上面がある程度削平されていたが、表土下50cmほどで主体部の基底部に達した。また、平面プラン・土層断面観察などから割竹形木棺が安置されていたと推定した。

5号墳は、4号墳の西隣に位置し、墳丘中央部より2基と墳丘外で2基の計4基の主体部を検出した。墳丘部の両主体部とも東西に主軸を置き、南側の主体部を第1主体部、北側の主体部を第2主体部とした。いずれも、表土直下で主体部が検出され埋葬施設の上部がほとんど流失しており保存状態はあまり良好ではなかったものの、第1主体部では床面がU字形にくぼみ、割竹形木棺状のものが安置されていたと推測された。また、第2主体部には、箱式石棺の側壁部の一部が残存していた。そして、墳丘外では同墳の東側で1基（第3主体部）と南西側斜面で箱式石棺を1基（第4主体部）検出した。

第2節　調査組織

調査主体	平尾墳墓群発掘調査に伴う綾歌町埋蔵文化財発掘調査団
調査団長	熊谷廣信（綾歌町教育委員会教育長 昭和62年当時）
調査指導委員	内藤敏典（綾歌町文化財保護委員長）、真鍋安徳、丸野又八、竹内寅男、高木澤美、土岐道憲（以上綾歌町文化財保護委員 昭和62年当時）
調査責任者	鎌木義昌（岡山理科大学理学部、平成5年死去）
調査担当者	小林博昭（現：岡山理科大学総合情報学部社会情報学科古代地域研究室） 亀田修一（現：岡山理科大学総合情報学部生物地球システム学科人類学研究室） 白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）

調査参加者

飯島賢治、市谷年弘、井上浩一、大西貴雄、岡田　功、岡本智則（現：鳥取県倉吉市教育委員会）、金光武志、金光正行、岸本康夫、久保田優子、先田栄司、沢野雅英、下西幸典、島田朋之（現：広島県立歴史民俗資料館）、田村文重、坪井千佳（現姓：加藤）、橋本智子（現姓：宮本）、埴渕和史、林泰治（現：徳島県土成町教育委員会）、古市邦高、堀本隆晴、日野浦弘幸（現：岡山県山手村教育委員会）、山元康典（以上岡山理科大学考古学研究会）、赤瀬吉勝、塩見真康（現：岡山県山陽町教育委員会）、妹尾　渉、中山義正、浜本秀樹、山崎直亮、若林　賢（以上岡山理科大学人類学研究室）、順正短期大学考古学研究部

第２章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　遺跡の立地

平尾墳墓群は、香川県綾歌郡綾歌町岡田上平尾に所在した。

綾歌町は、香川県の東西ではほぼ中央に位置し、北は丸亀市、坂出市、飯山町と接し、南は標高400～500mの大高見峰、猫山、城山が東西に延び、これら連山が満濃町との町境となる。東部は綾南町と接しており、北東部には200m級の横山連山が南北に延びている。町内中央を中大東川が北流し、丸亀市との町境を土器川が南から北に流れている。

平尾墳墓群は、町内の南方に位置する猫山（標高467.7m）から北に多数の尾根が派生し、沖積平野と緩やかに接する手前の尾根先端部付近に位置する。同墳墓群からの眺望は、遺跡背後南側に高見峰連山がせまり、東方向は横山連山で視界が遮られるものの、北から北西方向には視界が大きく広がり、遠く丸亀平野、瀬戸内海を望むことができる。平地との比高差は、約100mである。

第２節　歴史的環境

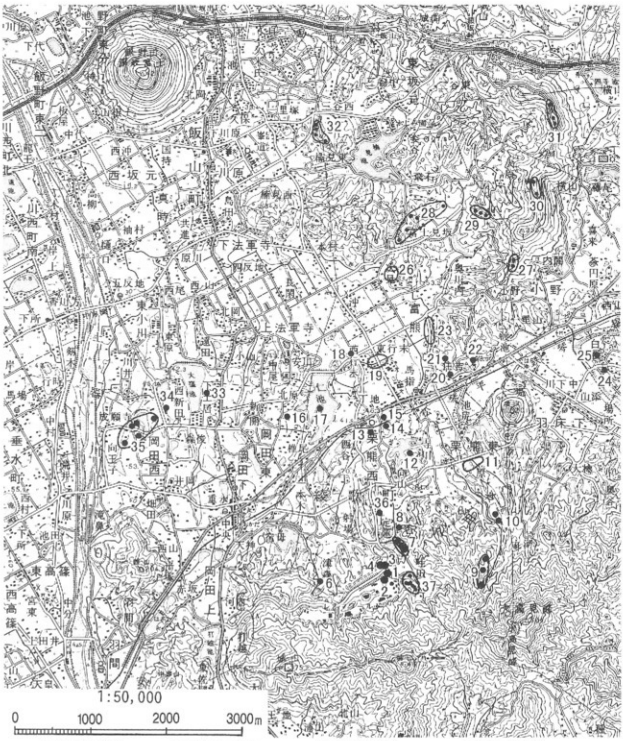
旧石器時代の遺跡は、現在までのところ町内では確認されていない。

縄文時代の遺跡では、近年の発掘調査により晩期の土器や石器が出土した行末西遺跡[1]、佐古川遺跡[2]が知られており、今後これら沖積地、台地などでより古い時代の遺跡の増加が予想される。

弥生時代前期も、縄文時代晩期と同様に沖積地や丘陵上に遺跡が点在し、次見遺跡、行末遺跡[3]、行末西遺跡が知られている。特に、国道32号線バイパス建設に先立ち調査された佐古川・窪田遺跡は丘陵の裾近くに立地し、前期後半～末の周溝墓群が検出されている[4]。中期では確認されている遺跡は少ないが、後期になると次見遺跡、行末西遺跡、佐古川遺跡、西土居遺跡、椎尾遺跡、椎尾東遺跡[5]、原遺跡[6]で住居跡などの遺構が発見され、町内の沖積地、台地、丘陵部での遺跡数の増加が顕著になる。また、佐古川・窪田遺跡では大溝が検出されており、沖積平野での水田開発が進んでいったことが伺われる[7]。そして、人口や生産力の増大・安定とともに、地域社会の階層的上下関係が現われはじめ、南方の丘陵や尾根には石塚山墳墓・古墳群[8]、平尾墳墓群、定連遺跡などのように集団墓から特定首長墓へ変化していくものがみられるようになる。

続く古墳時代に入ると、町南部や北東部の丘陵や尾根上には古墳が築かれる。前期では墳長約100mの前方後円墳である快天山古墳が著名である。中期になると町北東部に位置する陣の丸１・２号墳、横山経塚１・２号墳など、30m級の前方後円墳が相前後して築かれる。平尾墳墓群から谷を隔てて東側の尾根上には定連池東丘古墳群があり、このうちの１号墳が調査され一辺９mの方墳で葺石状の列石をもつことが確認されている[9]。また、西部の台地には岡田車塚古墳が築かれ、これ以後同台地上には初期須恵器が伴うと推定される古墳群が築かれる。また、佐古川・窪田遺跡でも竪穴住居、掘立柱建物、大溝などが検出されている[10]。後期には、南部の丘陵部に大型の横穴式石室を内部主体とする宇閇神社古墳、畦田１号墳、津森穴薬師古墳などが築かれる。

そして、７世紀～８世紀には各地で古代寺院が建立されるようになるが、町内では明確な寺院跡は



1.平尾 2 号墓
2.平尾 3 号墓
3.平尾 4 号墳
4.平尾 5 号墳
5.西長尾城跡
6.津森穴薬師古墳
7.定連池東丘古墳群
8.定連遺跡
9.休場池東丘古墳
10.原竜王山古墳
11.原遺跡
12.水橋池南遺跡
13.佐古川遺跡
14.石塚山墳墓群
15.佐古川・窪田遺跡
16.北原古墳
17.稚尾東遺跡
18.行末西遺跡
19.行末遺跡
20.快天山古墳
21.薬師山古墳
22.住吉神社古墳
23.油山遺跡
24.津頭東古墳
25.津頭西古墳
26.次見遺跡
27.奥川内古墳群
28.地神山古墳群
29.陣の丸古墳群
30.横峰古墳群
31.横山古墳群
32.城山古墳群
33.下土居遺跡
34.富野氏東古墳
35.岡田万塚古墳群
36.宇間神社古墳
37.畦田古墳群

第 1 図　周辺の遺跡分布図(1/50,000)

確認されていない。しかし、岡田西字出中で7世紀後半～8世紀のものと推測される格子目叩き文の平瓦などが採集されており、古代寺院の可能性が推測されている[11]。今後の調査が期待される。その後中世まで遺跡の分布状況は低調になるが、鎌倉時代には近衛家の荘園（栗熊庄）が設けられ、沖積地、台地上は再び活況を呈してくる。

註

(1) 近藤武司「行末西遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成7年度』 香川県教育委員会　1996.3
(2) 近藤武司「佐古川遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成7年度』 香川県教育委員会　1996.3
(3) 近藤武司「行末遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成7年度』 香川県教育委員会　1996.3
(4) 香川県埋蔵文化財調査センター『佐古川・窪田遺跡現地説明会資料』 1998.1
(5) 近藤武司「椎尾東遺跡」『綾歌町内遺跡発掘調査報告書　第2集』 綾歌町教育委員会　1998.3
(6) 近藤武司「原遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成6年度』 香川県教育委員会　1995.3
(7) 註（4）と同じ
(8) 岡木健司『石塚山古墳群』 綾歌町教育委員会　1993.3
(9) 近藤武司「定連池東丘1号墳」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成6年度』 香川県教育委員会　1995.3
(10) 註（4）と同じ
(11) 綾歌町『綾歌町史』 1976.6

第３章　発掘調査の成果

第１節　各墳墓の位置関係

１次、２次調査で確認した墳墓は、４基である。これらの墳墓群の位置関係は、南の猫山（標高467.7m）から急傾斜で下ってきた尾根が標高128.2m付近で緩やかになり鞍部となるが、また徐々に標高を増し標高141.12mで頂部となる。３号墓はこの頂部に位置し、同墓から尾根が二つに分かれ、このうち北北東に下る尾根がいったん鞍部を経てまた高くなる標高138.18mの頂部に２号墓が位置している。そして、この２号墓からまた尾根が二つに分岐し、このうちの北北西に伸びる尾根が標高128mでいったん平坦になり西に尾根が方向を変えて下っていくが、この西方向に変わる尾根上に４号墳と５号墳が存在する。

第２節　２号墓

１　墳丘

(1) 調査前の状況

２号墓は、３号墓から北東方向に尾根が下り標高130m付近で一度平坦となるが、また緩やかに標高を増した標高138.18mの頂部に立地している。３号墓からは直線距離で約110m離れている。第３図の調査前の墳丘測量図によると墳丘形態は、円丘部の南側部分に突出部がつく形で、ほぼ南北に伸びる尾根上に墳丘の主軸をそろえている。円丘部は南北にやや長い楕円形で、墳丘斜面は裾部付近でやや傾斜がきつくなるが、頂部付近にかけては緩やかであり、頂部では平坦面が認められる。また突出部の形態は封土が流失しているが、平面形は逆台形状を呈している。

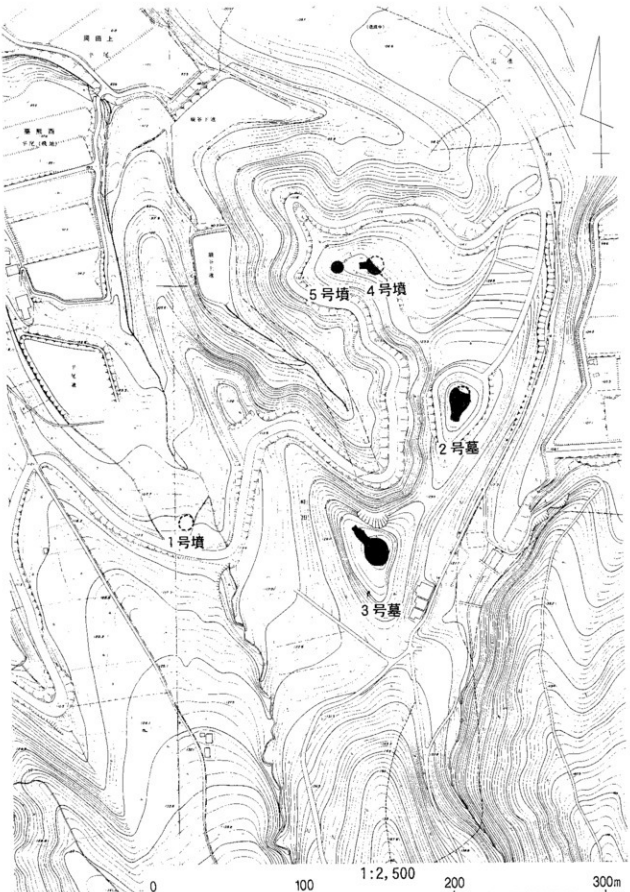
円丘部の北側は、果樹園の造成により墳頂端部から北側が大きく削られ、円丘部と突出部の境界付近に直径2.6mほどの不整形の落ち込みが認められた。

円丘部の東側の墳端は、標高136.25mの等高線が巡る高さで一様に傾斜の変換がみられ、突出部の南側に関しても標高136.25mの等高線がやや丸みを持ちながら方形に巡るが、標高136.00mの等高線になると乱れて方形を呈しない。以上の、墳丘測量の観察から、発掘調査以前の墳丘端は標高136.00～136.25mコンタが巡る部分にあると推測された。

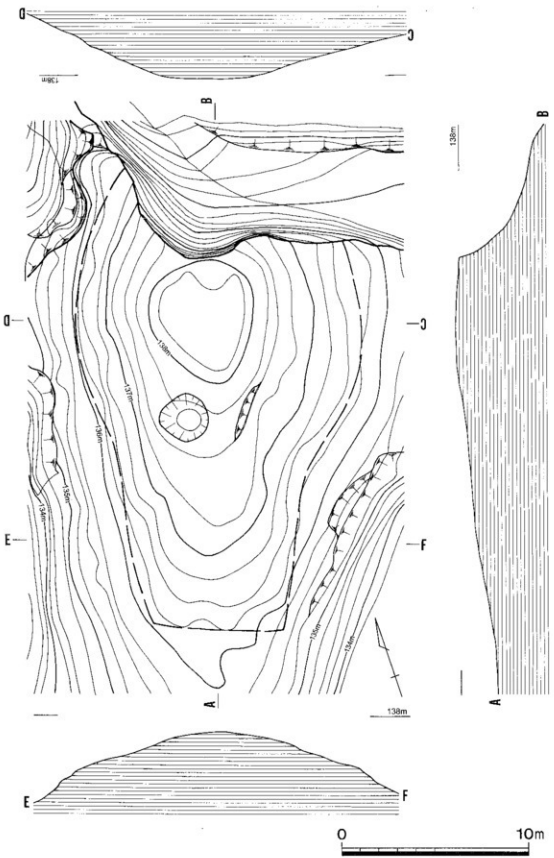
(2) 墳丘と層序

調査は、墳丘主軸に沿うように円丘部から突出部にかけて土層断面観察用のためのトレンチ（第４図ａ-ｃライン）とこれに直交するように円丘部（第４図ｄ-ｅライン）と突出部（第４図ｆ-ｇライン）にそれぞれ設定し、調査に入った。そして、これと並行して墳丘全体の表土剥ぎを実施した。

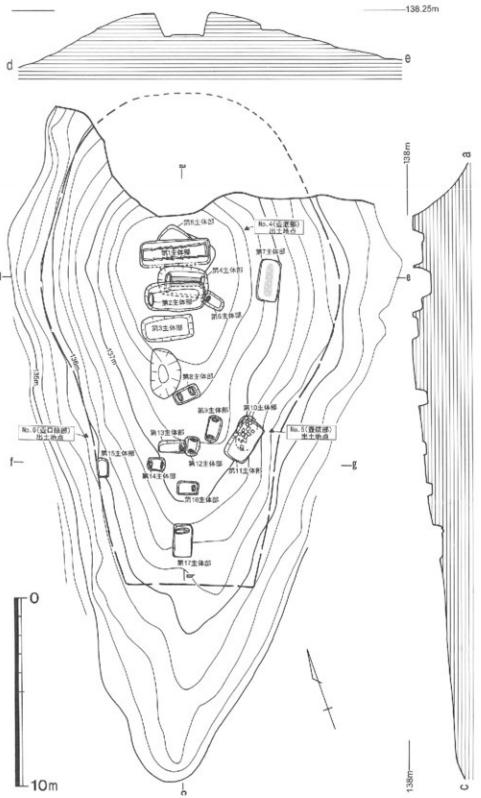
いずれの土層断面とも表土が５～10cmほど堆積し、表土直下は花崗岩バイ乱土の地山面となり、第５図の土層断面図ように明確な墳丘の盛り土などは確認できなかった。ただ、第１主体部の石棺検出の状況から円丘部の地山面より少なくとも30cm位上までは、盛り土があったと推測される。よって、



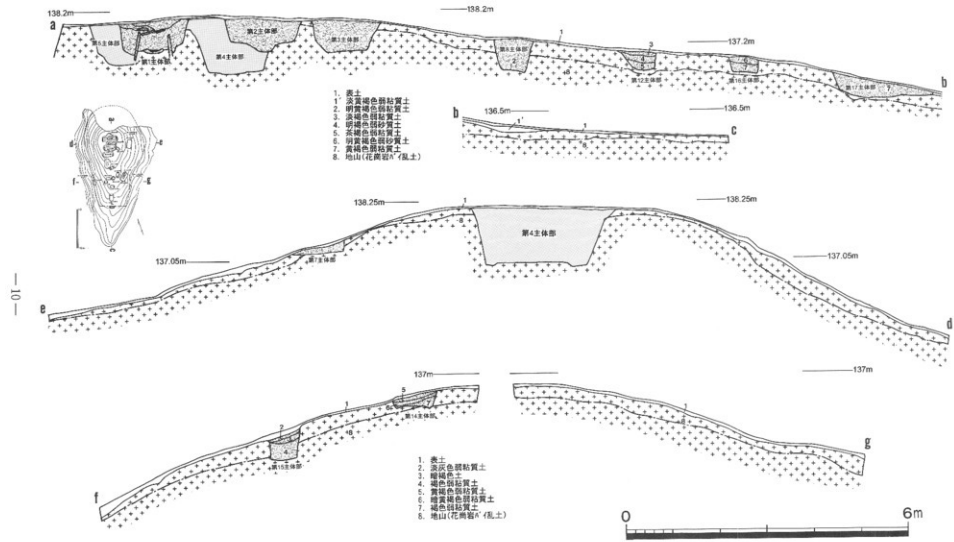
第2図　墳墓群の位置図(1/2,500)



第３図　２号墓調査前墳丘測量図(1/200)



第4図　2号墓墳丘測量図(1/200)



第5図　2号墓墳丘断面図(1/80)

墳丘はほとんど地山を成形することで形成されているが、その上に一部盛り土があったと推定される。

(3) 円丘部

標高138.18mに円丘部を配し、南方向に突出部が延びるように墳丘を配している。円丘部は正円形でなく、南北にやや長めの楕円形を呈しており、本来の地形をあまり成形せずに利用したことが伺える。墳端の平面形は、東側斜面で標高136.25mのコンタが巡るところで傾斜が緩くなり、西側斜面では標高135.75mのコンタが巡るライン上で傾斜が変化している。また、第5図のd-e土層断面図から東側斜面では、標高136.00m～136.25mのコンタが巡るところで、西側斜面では135.50m～135.75mのコンタ付近で傾斜に変化がみられることから、このコンタライン上に円丘部の墳端があると考えられる。以上の状況から円丘部の大きさは、南北の長径が20m（推定復元）、東西の短径が15m、高さ1.75mである。

墳頂部もほぼ円丘部墳端ラインと同じ平面形で、南北にやや長い楕円形を呈している。標高137.75mのコンタラインでほぼ平坦面となり、この平坦面の大きさは南北約8.3m、東西約6.4mとなる。

(4) 突出部

突出部は、円丘部の南側で尾根が緩やかに下る斜面部に築かれている。平面形は円丘部と突出部の境界は西側であまり明瞭でないが、東側ではくびれ部がみられる。また、南側の墳端は標高136.25mのコンタ付近で、コンタラインが乱れ、第5図のa-b-c土層断面図でもこの付近で傾斜が変化することから、南側の墳端はこの付近にあると思われる。

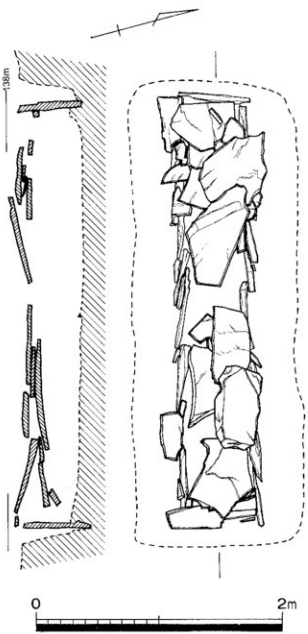
以上のことから、突出部の平面形はくびれ部での幅が10m、南端部での幅が6m、長さが10mで、くびれ部側の高さ1.3m、南側の墳端部での高さが0.5mとなり逆台形状を呈している。よって、この墳丘墓の復元墳長は28mとなる。

2 埋葬施設

主体部は、円丘部で7基、突出部で10基の合計17基を検出した。このうち2基が箱式石棺で、他は木棺と考えられる。以下、各主体部について述べる。

(1) 第1主体部（第6・7図）

円丘部中央からやや北側に位置し、墳丘主軸に直交するように主体部の主軸を置いている。表土除去後、蓋石を検出したが第6図の平面、断面図のように部分的に石棺の上に乗っている蓋石もあるが、ほとんどが重なったり小さく割れたりして石棺内に落ちていた。このような蓋石の検出状況から、盗掘を受けていると判断した。そして、石棺内部の土砂除去および石棺掘形の検出作業を行った結果、墓壙の規模は長軸（東西）375cm、短軸（南北）140cmで、安山岩製の板状石材を用いた長大な箱式石棺であることがわかった。この箱式石棺の構造は、長側壁石に最大で60cm、最小で35cmの長さ、高さ50cm前後、厚さ5cm前後の板状石材を逆八字状に並べて立てて構築しており、北側側壁には、9枚、南側側壁には10枚それぞれ使用している。また、両小口部にも同様の板状石材をそれぞれ一枚



第6図　第1主体部上面検出状況(1/30)

ずつ用いている。石棺の規模は、内法で長さ330cm、幅は東側で50cm、西側で45cm、深さ45cmを測る。棺内床面には、横断面で中央部が緩やかにくぼみ、周辺部全体が幅5～10cmほど高くなる粘土床を東西に1つずつ、計2基配している。西側の粘土床の外法の大きさは、長さ153cmで東端の幅35cm、西端の幅26cm、東側の粘土床は長さ167cmで東端幅40cm、西端幅27cmを測る。粘土床の厚さ5cm前後で、淡青灰色粘質土が使用されている。この二つの粘土床の前後関係は、断面観察から東側の粘土床が後から作られたと推測され、以上の検出状況からこの石棺内には、最初西側の遺体が埋葬されたあとに東側の遺体が埋葬されたと考えられる。

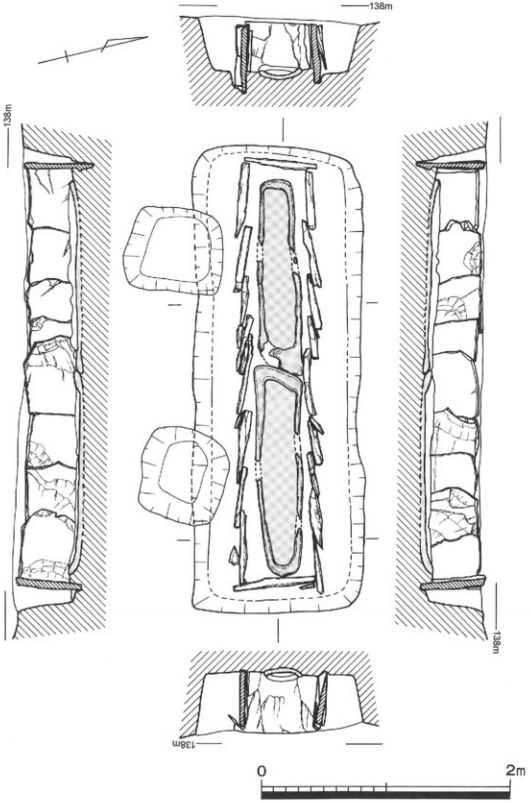
また、石棺の石材に使用されていた板状の安山岩は岩石学的な検討から斜方輝石安山岩でどこから運ばれたか産地を同定した結果、同墳墓から北北東に約5.5km離れた綾歌町大原の山塊から運び込まれたことが推定された。棺の主軸方位はN75°Wである。

遺物は全く出土していない。

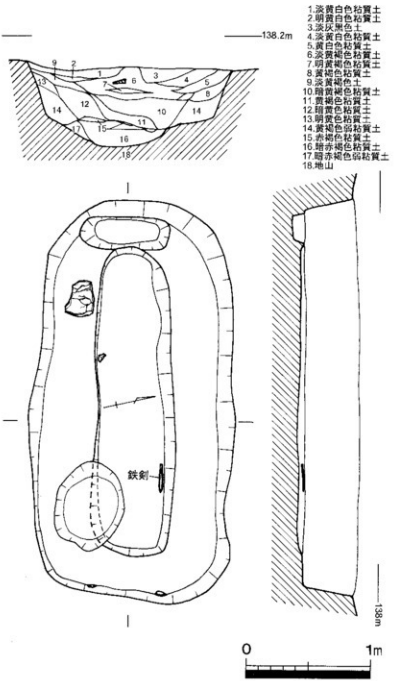
また、同墓壙の南側には一部墓壙を切り、一辺60～80cm、深さ60～70cmの隅丸方形のピットが2個検出された。遺物は出土しておらず、これらピットの時期は不明であるが、埋土などから新しいものと推測される。

(2) 第2主体部（第8図）

第2主体部は、第1主体部のすぐ南側に平行して構築されている。表土直下で墓壙の平面プランを確認し、平面形は長楕円形を呈している。規模は、長さ320cm、幅150cm、深さ65cmを測る。また、墓壙中央の基底部には、長さ250cm、幅60cm、深さ18cmの掘り込みが観察され、西側端の壁際では、長さ70cm、幅25cm、深さ10cmの小口部の溝を検出した。横断面観察によって、墓壙基底部が浅いU字状に掘り窪められており、円形の割竹形木棺とすると直径約60cmの木棺が安置されていたと想定される。棺構造は西側の小口溝しか検出されていないが、両小口部を板で棺身を挟む割竹形木棺が



第7図　第1主体部(1/30)



第８図　第２主体部(1/30)

安置されていたと推測される。このような木棺構造をした例としては、岡山県御津町みそのお遺跡の30号および47号墳墓の埋葬主体部にみられる。47号墳墓では、木棺形式に大きく２種類あり、１つは第２主体部と同じような小口板で割竹形木棺を挟むタイプで、もう１つは側板で小口板を挟むタイプである(1)。

また、第８図の断面図にみられるように、床面の上方約20cmのところで赤色粘土の層が部分的ではあるが確認でき、かつ床面のほぼ全面に赤色粘土が敷かれていた。このことから、木棺の天井の上にも赤色粘土がまかれていたことが考えられる。主軸方向はN78°W。

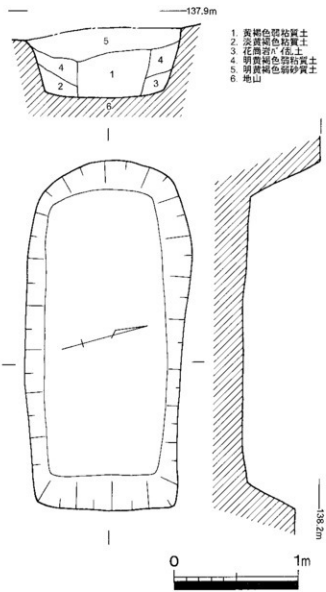
遺物は棺内の東寄りの北側床面の肩部より、切先を東に向けて鉄剣が１本出土した（第23図）。後述するように茎部に木質が一部残っていたが、調査中の出土状況では鉄剣から離れた部分では木質部は確認されなかった。

これ以外の遺構としては、墓壙南東隅で基底面まで達する意味不明のピットを１個確認した。基底面での大きさは、直径約65cmで墓壙の基底面を５cmほど掘り窪めていた。この意味不明ピットの時期であるが第１主体部の南側で検出された２個のピットとほぼ同じ間隔で掘られていることからこれらのピットと同じ時期に掘られたと考えられ、時期的には新しいものと推測される。

(3) 第3主体部（第9図）

第2主体部の南隣に平行して構築されている。墓壙の検出面での規模は、上面で長さ283cm、幅128cm、底面では長さ230cm、幅109cmで、深さ50cmを測る。平面プランで木棺痕跡、小口部の溝などは、確認されなかったが、中央断面で幅55cm、高さ40cmの木棺痕跡を確認した。床面の西側が若干高くなっていることから、西枕と思われる。主軸方向はN68°Wo

遺物は、埋土中から土器片が2点出土している（第24図）。



第9図　第3主体部(1/30)

(4) 第4主体部（第10図）

第2主体部に墓壙の南側半分を切られた状態で検出され、円丘部のほぼ中央に位置している。第2主体部がこの墓壙の上部に位置している。検出面での墓壙上面の規模は、長さ272cm、幅155cmで、底面での規模は長さ213cm、幅118cmで、深さ95cmを測る。基底面上方25cmのところで木棺痕跡を確認した。木棺の内法は長さ160cm、幅は西端で55cm、東端で45cmである。

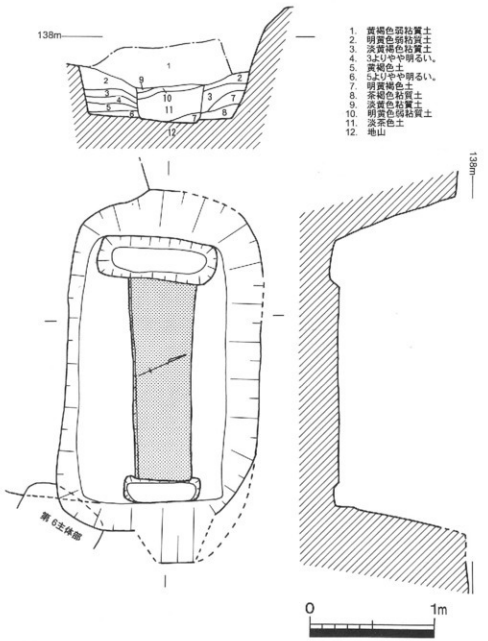
また、両小口部で小口板を差し込む溝を検出したが、西側小口溝の長さが95cm、幅35cm、東側のそれは、長さ60cm、幅20cmを測り、西側小口の溝が大きく、木棺の幅が西側の方が広いことから西枕と推測される。現表土から基底部までの深さは120cmを測る。主軸方向はN 78°Wo

遺物は、埋土内から土器片が1点出土している。小破片のため器種などは不明である。

(5) 第5主体部（第11図）

第1主体部に南半分を切られている。やや方形を呈した墓壙で、検出面での規模は、長さ167cm、幅135cm、深さ65cmを測り、主軸方向はN22°Wと推測される。

遺物は、埋土上面で土器片が少量出土している。土器片の胎土中には、2mm以下の石英、長石と0.2mm以下の火山ガラス（透明・黒色）を多量に含み、焼成がやや悪い。小片のため器種などは不明である。

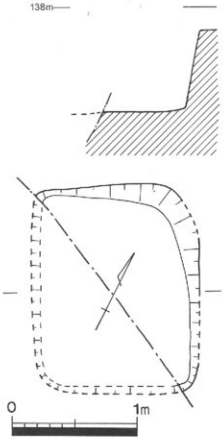


第10図　第4主体部(1/30)

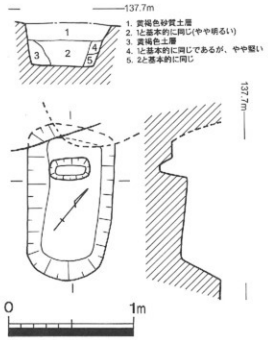
(6) 第6主体部（第12図）

第2・第4の両主体部に墓壙の北西部を切られている。検出面での墓壙の規模は、上面で長さ125cm、幅67cm、底面では長さ98cm、幅40cmで、深さ30cmを測る。北西側に小口溝を検出した。大きさは長さ32cm、幅18cm、深さ21cmである。床面が南東方向に向かって緩やかに傾斜しているため、北西頭位と考えられる。主軸方向はN26°W。

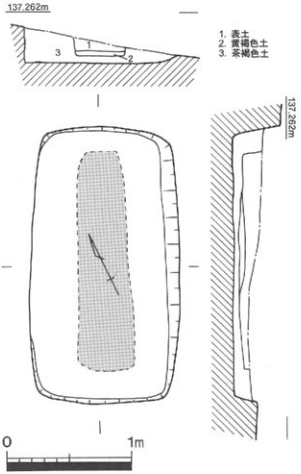
遺物は、埋土中より土器片が少量出土しているが、小片のため器種など詳細については不明である。



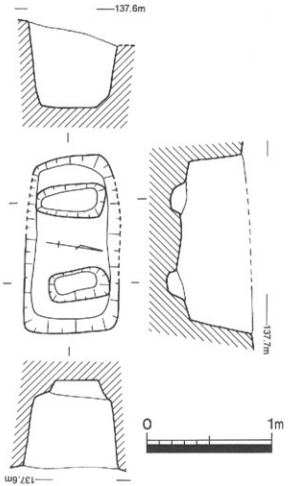
第11図　第5主体部(1/30)



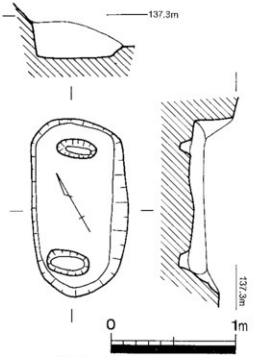
第12図　第6主体部(1/30)



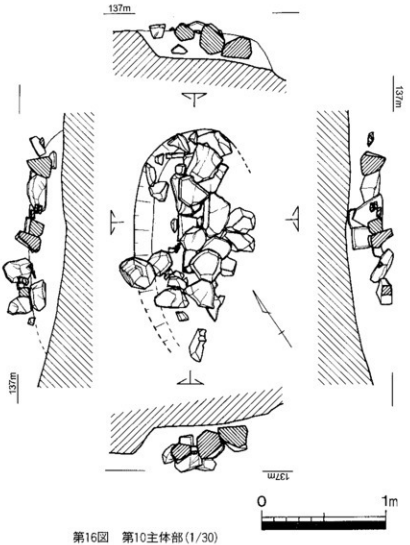
第13図　第7主体部(1/30)



第14図　第8主体部(1/30)



第15図　第９主体部(1/30)



第16図　第10主体部(1/30)

(7) 第７主体部（第13図）

第７主体部は、円丘部東斜面に位置し、第１・第２主体部から東に約４mほど離れ、主軸方向が等高線に平行になるように構築されている。検出面での墓壙の規模は、上面で長さ223cm、幅118cm。斜面に構築されているため深さは西側の深いところで30cm、東側で10cmを測る。また長さ176cm、北側の幅35cmで南側の幅が45cmと北側に向かって狭くなる木棺の痕跡を検出した。主軸方向はN22°E。

遺物は出土していない。

(8) 第８主体部（第14図）

円丘部と突出部の境界付近に位置し、第12・第13主体部から北に約2.8m離れている。墓壙の規模は、上面で長さ142cm、東端幅76cm、西端幅67cm、底面で長さ125cm、東端幅60cm、西端幅52cmを測る。検出面が傾斜しているため深さは40～65cmと幅がある。両小口部には、小口板を差し込む溝が検出された。東側小口溝は長さ50cm、幅25cm、深さ10cm、西側小口溝は長さ55cm、幅25cm、深さ10cmを測る。木棺の内法の長さは、65cmである。また、墓壙の幅が東側がやや広いことから東枕と推測される。主軸方向はN82°E。

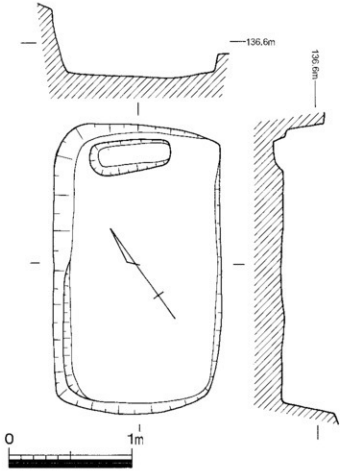
遺物は出土していない。

(9) 第９主体部（第15図）

この主体部は、第12主体部の東約1.5mのところに位置し、検出面での墓壙の規模は、上面で長さ143cm、幅75cm、底面で長さ132cm、幅60cm

を測る。深さは斜面に構築しているため一様でなく、5～30cmである。小口溝の大きさは北側小口で長さ32cm、幅15cm、深さ10cm、南側小口で34cm、幅20cm、深さ10cmを測る。また、木棺の内法の長さは、100cmである。主軸方向はN33°Eである。

遺物は出土していない。



第17図　第11主体部(1/30)

(10) 第10主体部（第16図）

第9主体部の東側約2m下った斜面部に位置し、地山面を削平して平坦面を作り、その平坦面に箱式石棺を構築していたと考えられる。検出面での墓壙掘形は、長さ約190cm、幅約100cmと推測される。斜面部構築のためか石棺の石の依存状態は悪く、石がかなり動いているようで、東側の側壁石と考えられる石が中央付近で主軸方向に平行して一列並んでいるのが確認されるが、西側壁および両小口部は明確に確認できなかった。このため石棺の内法は不明である。石棺石材に使用されたと思われる安山岩(10～30cm大の石)の広がりは、長さ約180cm、幅約80cmを測る。主軸方向はN32°E。

遺物は石棺内と考えられる位置から壺底部付近の破片が2点出土した（第24図2、3）。

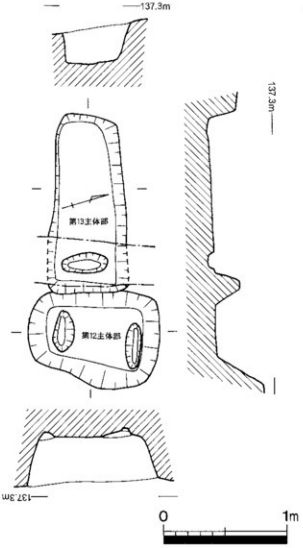
(11) 第11主体部（第17図）

第10主体部の下層で検出された主体部である。墓壙の検出面での規模は、上面で長さ232cm、幅135cm、底面で長さ218cm、幅120cmを測る。斜面部に構築しているため深さは一様でなく15cm～50cmを測る。北側小口部には小口板を差し込む溝が検出され、検出面での大きさは、長さ65cm、幅25cm、深さ9cmである。主軸方向はN46°E。

遺物は、墓壙内の埋土からサヌカイト製の石鏃が2本出土した（第25図）。

(12) 第12主体部（第18図）

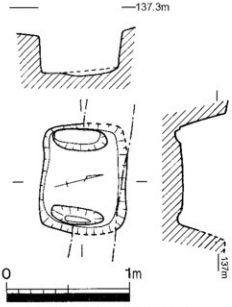
第12主体部は、第13主体部の東側に位置し、墓壙の西側壁を一部切り合っている。墓壙の規模は上面が長さ106cm、北端幅68cm、南端幅60cm、底面が長さ78cm、北端幅50cm、南端幅35cmで、深さ40cmを測る。両小口部には、小口板を差し込む溝が確認された。小口溝の大きさは、北側のものが



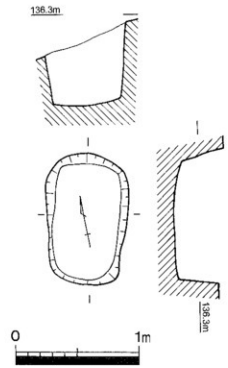
第18図　第12、第13主体部(1 /30)

長さ27cm、幅13cm、深さ5cmで、南側のものが長さ33cm、幅17cm、深さ5 cmを測る。木棺の内法の長さは、60cmである。墓壙北側の幅がやや広いことから北枕と推測される。主軸方向はN26°E。

遺物は出土していない。



第19図　第14主体部(1/30)



第20図　第15主体部(1/30)

(13) 第13主体部（第18図）

突出部の中央からやや円丘部に近いところに位置し、東端を第12主体部と一部切り合っている。墓壙の規模は、検出上面で長さ144cm、東端幅65cm、西端幅50cm、底面で長さ130cm、東端幅50cm、西端幅35cmで深さ22cmを測る。東側の小口部には、小口板を差し込む溝があり、大きさは長さ37cm、幅16cm、深さ5 cmである。木棺の内法は長さ110cmを測る。このように平面プランは西側になるほど幅が狭くなり、床面は東から西方向にやや低くなることから東枕と推測される。主軸方向は、N71°W。

遺物は出土していない。

(14) 第14主体部（第19図）

第13主体部から南西方向に約１m離れたところに位置し、墓壙の規模は、上面で長さ90cm、幅58cm、底面で長さ80cm、幅57cm、深さ35cmを測る。両端には小口部の溝が検出され、その大きさは東側が長さ43cm、幅14cm、深さ５cm、西側が長さ44cm、幅17cm、深さ６cmである。木棺の内法の長さは60cmである。床面が東から西に緩やかに傾斜していることから東枕と推測される。主軸方向はN70°Wで第３主体部とほぼ同じである。遺物は出土していない。

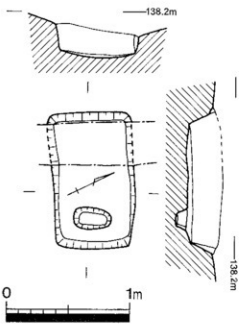
(15) 第15主体部（第20図）

第14主体部より西に約３m下がった墳端部近くに位置し、主軸方向が等高線に平行である。墓壙の検出面での規模は、上面が長さ105cm、幅54cmで、底面が長さ93cm、幅53cmを測り、傾斜面に構築しているため深さは一様でなく35～67cmである。小口部の溝は確認されなかった。主軸方向はN10°E。

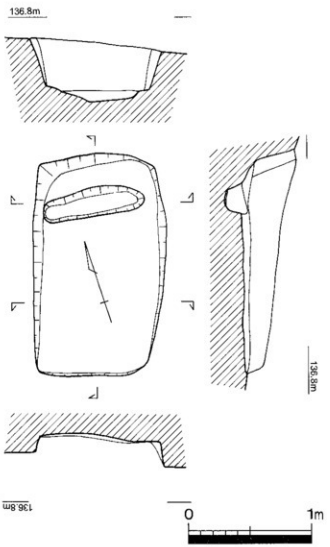
遺物は出土していない。

(16) 第16主体部（第21図）

第13主体部から南へ約2.2m離れたところで、突出部のほぼ中央に位置する。主軸方向は第13主体部とほぼ同じN72°Wである。墓壙の規模は、検出上面で長



第21図　第16主体部(1/30)



第22図　第17主体部(1/30)

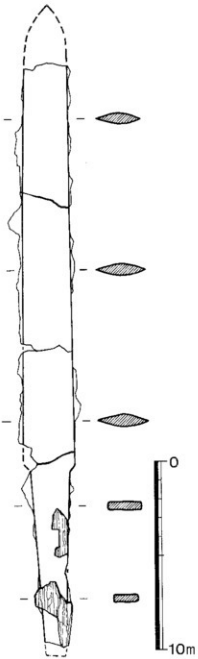
さ110cm、幅56cmで、底面では、長さ97cm、幅58cmとなり、深さ25cmを測る。また、第13主体部と同様に東側小口部に長さ30cm、幅18cm、深さ10cmの小口部の溝を検出した。木棺の内法の長さは82cmである。

埋土内より土器片が少量出土しているが、器種や時期などは不明である。

(17) 第17主体部（第22図）

突出部の南端付近の中央部に位置し、墳丘の主軸方向に平行して墓壙を構築している。規模は、上面で長さ180cm、幅109cm、底面で長さ169cm、幅93cmを測る。深さは傾斜面に掘られているため北側の高いところで46cm、南側の低いところで15cmを測る。小口部の溝は北側のみ検出し、長さ83cm、幅23cm、深さ16cmである。床面は北の高い方向に向かって緩やかに上がっているため、北枕と考えられる。主軸方向はN 17° E。

遺物は出土していない。



第23図　2号墓第2主体部内出土鉄剣(1/2)

3　遺物

(1) 第2主体部出土鉄剣（第23図）

棺内の東寄りの北側床面より、切先を東に向けて鉄剣が1本出土した。切先と茎端を欠損し、現存全長は31.0cm、現存剣身長21.1cm、幅2.6cm、厚さ0.7cmで、茎の現存長は9.9cm、幅は剣身側が2.1cm、現在の端部で1.2cmとなり、厚さは4.5cmである。刃部は直線的で、切先付近でやや身幅を減じ、断面は凸レンズ状を呈している。茎部は茎端に向かって細くなっており、茎部に部分的に木質が残存している。

(2) 第3主体部出土土器（第24図1）

埋土中から土器片が2点出土し、このうち実測可能な1点のみ掲載した。1は、内面に絞り痕があることから直口壺の肩部と考えられる。外面上端部はヨコナデでそれより下は縦方向にハケ目調整が施されていることから上端部は頸部のところで欠損していると推測される。胎土中には、2mm以下の石英、長石と0.3mm以下の雲母を含む。色調は橙色で焼成は良好である。

(3) 第10主体部出土土器（第24図2、3）

2は、壺の底部近くで屈曲し平底になると考えられる。外面はヘラミガキ調整、内面はヘラケズリで、胎土には4mm以下の石英、長石を多く含み、0.5mm前後の雲母、赤色粒を少し含む。焼成は良好である。色調は内外面とも明赤褐色を呈している。

3も壺の底部付近と推定される。内外面とも調整は不明で胎土に2mm以下の石英、長石、火山ガラス（透明・黒色）を多く含み、1mm以下の角閃石、赤色粒を少し含む。焼成は良好である。色調は内外面とも灰褐色である。

（4）第11主体部出土石鏃（第25図1、2）

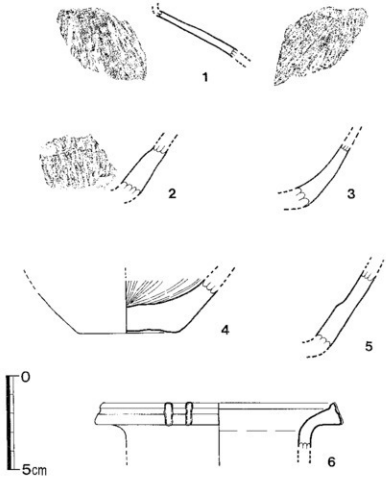
墓壙内の埋土中からサヌカイト製の石鏃が2点出土した。

1は、凹基式で二側辺にやや細かな押圧剥離痕が観察される。大きさは、長さ2.84cm、幅2.24cm、厚さ0.47cm、重さ2.2gを測る。

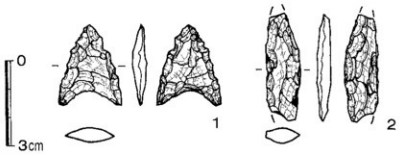
2は、先端および基部が欠損しているが凸基式に分類される。現存の長さ3.84cm、幅1.23cm、厚さ0.52cm、重さ2.5gを測る。

（5）墳丘部出土土器（第24図4～6）

墳丘上より土器片が3点出土しており、第4図の墳丘測量図に土器の出土位置をプロットしている。



第24図　2号墓出土土器(1/2)
1：第3主体部、2・3：第10主体部、4～6：墳丘部



第25図　2号墓第11主体部内出土石鏃(3/4)

4は、円丘部東側斜面の標高137.5m付近の表土下層から出土した壺の底部である。

やや上げ底気味のしっかりした平底の底部で、外面は丁寧なナデ調整、内面は幅2mmほどのやや粗いハケ目が縦方向に施され、外面底部の3分の2ほどに黒斑がみられる。胎土には2mm以下の石英、長石と0.5mm以下の火山ガラス（透明・黒色）を多量に含んでいる。色調は、外面がにぶい黄

橙色で内面と断面が黒褐色を呈し、焼成は良好である。底部径5.5cm、器厚1.5cmを測る。

5は、東側くびれ部の墳丘端部近で第10・第11主体部から1mほど下ったところの表土下部より出土した壺の底部付近の破片である。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整が施され、平底に至る屈曲部の破片と考えられる。胎土中には、3mm以下の石英、長石と0.3mm以下の雲母、角閃石を含んでいる。色調は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

6は、西側くびれ部の墳丘端部外の地山上面から出土した。第15主体部から北に約1.5m離れている。広口壺の口縁部で、ほぼ直立に立ち上がる頸部から外に直角に折れ、端部は上方に拡張する。外側端面には1条の凹線文が巡り、棒状の浮文を2本施している。内外面ともヨコナデ調整を施し、胎土中には主として3mm以下の石英、長石を多量に含み、僅かの火山ガラスが観察される。色調は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

4 小結

以上のように2号墓について述べてきたが、若干の整理を行いたい。

墳丘は、復元墳長28mの前方後円形を呈しており、円丘部は南北推定20m、東西15mの楕円形で、高さは1.75mである。突出部は逆台形となり、自然地形を利用していることが伺える。

埋葬施設は、木棺が主体部と考えられるもの15基、箱式石棺が主体部のもの2基の総数17基を検出した。このうち円丘部では7基、突出部で10基検出したが、円丘部の第1・2・3・4主体部は規模が大きく、いずれも主軸を東西に置いている。これに対して突出部では、第11・17主体部以外は、小規模の主体部である。また、主体部の主軸方向も東西と南北の二つに分かれるようである。

各主体部の築造順序、時期に関しては、まず円丘部で第1主体部が第5主体部を切り、第2主体部が第4主体部を切ってそれぞれ構築していること、第1主体部と第2主体部の主軸方向がほぼ同じで平行に並んでいることから、構築順序は第4・5主体部の後に第1・2・3主体部が築かれたと考えられる。また、突出部では主軸方向の異なる第12主体部（主軸方向は南北）と第13主体部（主軸方向は東西）が切り合っており、第10主体部は第11主体部の上部で検出され、いずれも前者が後者より新しい。これらに関しては、前後関係はわかるが、その他の主体部は重複することもなく、ほぼ等間隔に配置されていることからあまり時期差はないのかもしれない。しかし、この突出部にある主体部は主軸方向で分類すると南北の第9・10・11・12・15・17の6つの主体部と主軸方向が東西の第8・13・14・16の4つの主体部に分かれる。この埋葬頭位の差異に関しては、「集団成員の出自などの指標として重視されているとも考えられる」[2]との指摘もあり、円丘部の規模の大きい首長層の主体部はすべて東西に主軸をおいていることを加味すると、被葬者の出自の差が頭位差に現れていることは十分考えられる。また、前記したように円丘部と突出部の主体部は規模的にみると円丘部に規模の大きい主体部がみられ明らかに差があり、突出部の主体部には小規模なものが多いことから子供あるいは円丘部に比べ格差があるものが埋葬されたとも想定される。

この墳墓の築造時期であるが、埋葬主体部から明確にできる土器などの出土遺物がほぼ皆無に等しく時期を特定することは難しい。唯一時期が特定できる遺物として、墳丘くびれ部より出土した壺の口縁部があり、この土器から推定すると弥生時代後期前半を前後する時期となり、2号墓はこの頃築かれたと考えられる。

第3節　3号墓

1　墳丘（第26～29図）

(1) 立地と調査以前の状況

綾歌町の南儡の東西に横たわる山々の一つ、標高467.7mの猫山から北に延びた尾根の一つが標高150m付近で傾斜が緩くなる。その変化点からやや北に延びた標高141.12mの一度高くなったところに平尾3号墓が位置する。この一度高くなったところで尾根は北東方向と北西方向に二つに分かれる。北東方向約110m地点に平尾2号墓が位置する。北西方向では遺跡は確認されていない。

この地点は発掘調査以前は雑木林に覆われ、遺跡の有無については、その地形から古墳があるのではないかと推測される程度で、明確な墳丘などはわかっていなかった。発掘調査に先立ち、伐採を行ったが、その時点でも明確な墳丘はわからなかった。ただ、頂部を後円部、北西方向を前方部とする前方後円形の可能性が多少推測できた程度である。

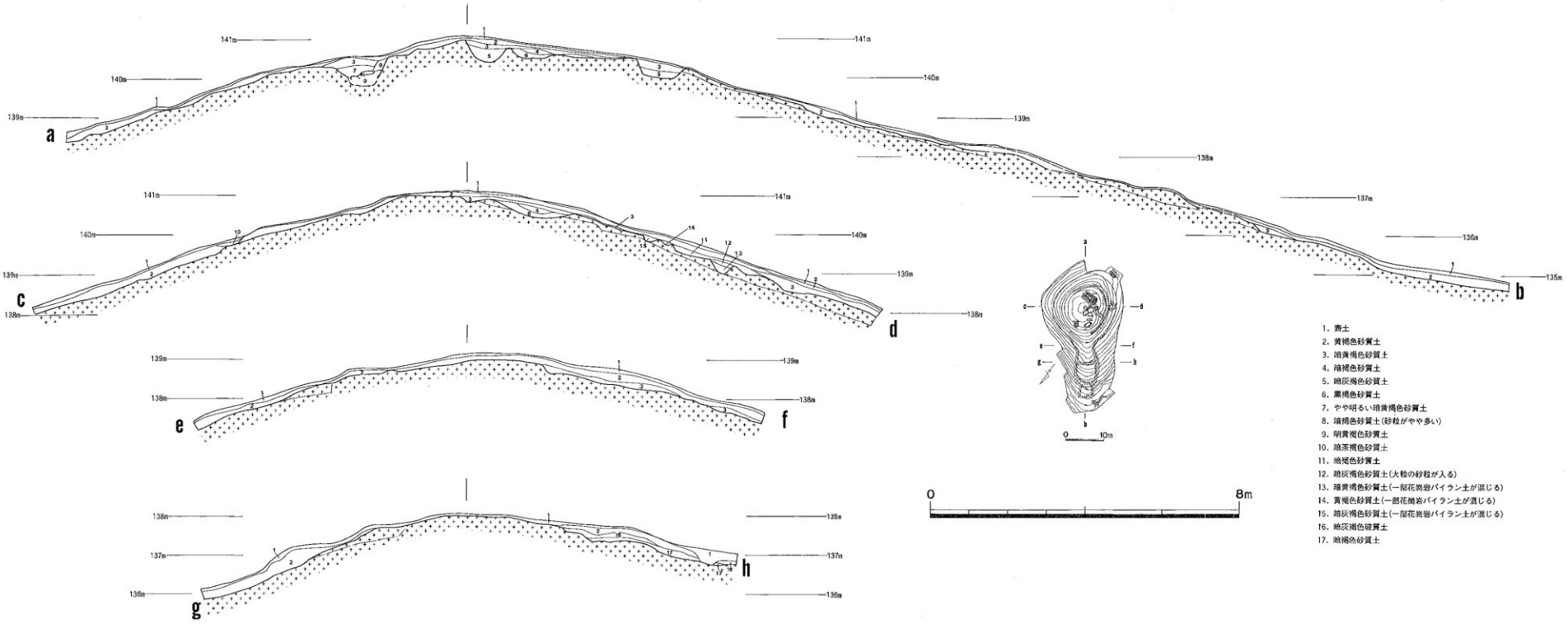
(2) 墳丘と層序

発掘調査は、伐採後の観察で推測した前方後円形の地形に沿って十字に基準線を設け、それに沿って落葉で覆われた地面を掘りはじめた。そしてスコップ半分～1杯分の深さ、約20～30cmを掘って花崗岩バイラン土の地山を検出した。浅いところでは表面の落葉とともに10cmほど土を剥いただけで地山が検出された。そしてこの地山面を基準として全面掘り下げ、墳丘の全貌、埋葬施設などを明らかにした。

墳丘を覆った土は落葉などを含んだ表土とその下の地山の風化土が流れたりしたものが基本的にセットをなしており、その流れた（？）風化土が場所によって色や粒度に違いがみられ、細分されるようである。そしてその下に地山があるが、場所によってはその地山の上面がもろくなり、その上層の風化土と区別しづらいところもあった。その下層が比較的しっかりした花崗岩のバイラン土の地山である。

墳丘の築造は基本的にはこの地山まで削り出して行われているようであるが、墳頂部などは部分的に盛り土して完成させたようである。墳丘斜面への盛り土などについては築造以後の流出も当然考えられるが、現地での観察では円丘部ではもともとほとんどなされていなかったのではないかと推測している。ただ突出部側はもう少し段が明瞭であったとすれば、多少の盛土が考えられる。

第26図　3号墓調査前墳丘測量図(1/200)



第27図　3号墓墳丘断面図(1/80)

(3) 円丘部

墳丘はいまのべた標高141.12m地点に円丘部を配し、北西方向に突出部を配したものである。円丘部は本来の地形を十分削り込まずに成形したようで、正円形ではなく、本来の地形と同じように南傾（尾根筋の高い方）がやや長めで、北東側（２号墓がある尾根筋）に少しとびだした不整長円形を呈している。その大きさはほぼ南北の長径（第28図C－R：以下ここでの記号は第28図のもの）が約17.5m、南西－北東の短径（B－Q）が約15.6mである。墳頂部もこの墳丘の形と類似しているが、北東方向へのとびだしは少ない。墳頂部は完全な平坦面ではないが、標高140.25mのコンタまでを計測すると、南北約9.7m、東西約8.3mの範囲がやや平坦である。

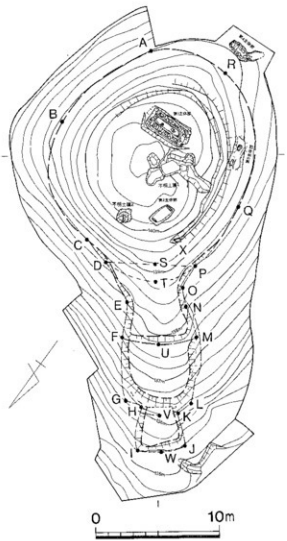
そして埋葬施設はこの墳頂部の内側の南側に竪穴式石室（第１主体部）、北西部に木棺直葬墓（第２主体部）が築かれている。中央部には明確な埋葬施設はなく、意味不明の穴があり、そこから西へ排水溝のようなものがでている。用途はわからないが、埋葬施設を作る予定であらかじめ掘られたものかもしれない。また墳頂部北側にも意味不明の土壙が一つある。

墳丘は全体に北側斜面の流出がはげしく、不鮮明な部分が多いが、円丘部は西側の標高139.50mから南側の140.00mのところに幅50cm前後のテラスが残っており、本来２段築成であったものと推測される。そして興味深いものがそのテラスの西端、つまり墳丘の主軸線から約1.5m南側のところ（X）におかれていた約50×約30cm、厚さ約20cmの石である（図版12）。これと対になる石は主軸線の反対（北）側にはなかったが、その検出された場所から、この石が円丘部中段のテラスの突出部側の起点におかれていたと考えてよいのではないかと推測される。つまりこの推測がもし正しく、墳丘主軸の反対側にも基準の石があったならば、円丘部と突出部の間に幅約３mの入り口（門）が意識されていたことになる。一つの可能性としてとても興味深い。

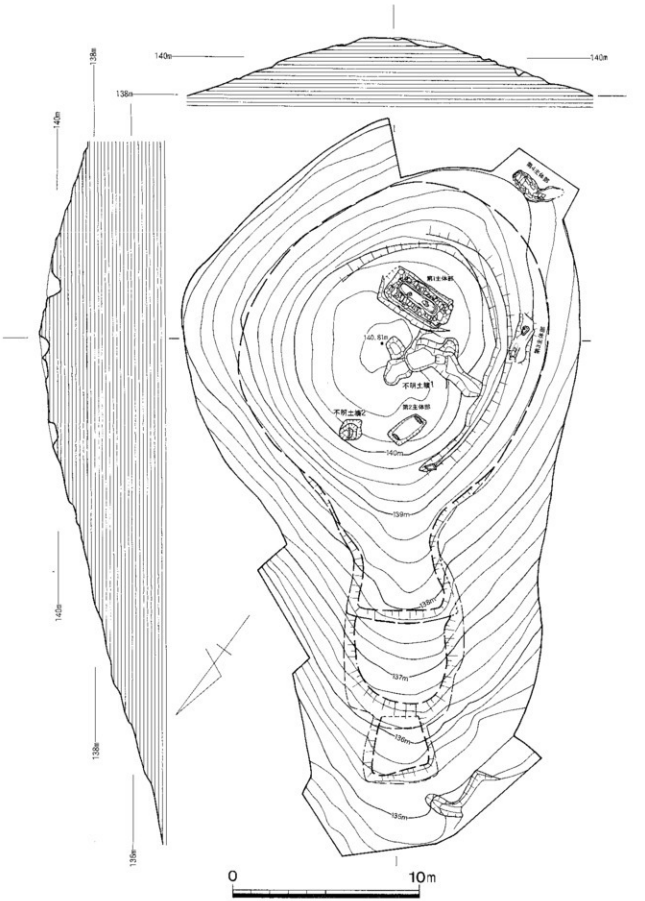
また円丘部と突出部の間には明確な境はないようであるが、標高約139m付近で30cmほどの段差がみられる。この付近は円丘部の墳端のラインが突出部へ変化する点（D－P）をそのままつなぐとちょうどこの段差のある変化点Tになる。本来の円丘部の端部であったのかもしれない。

そして円丘部の下段の南西部斜面に埋葬施設と推測される土壙（第３主体部）が掘られている。

墳丘の表面などに施された外部施設は前述



第28図　３号墓計測点位置図(1/300)



第29図　3号墳墳丘測量図(1/200)

のテラスの石以外、墳端部の境界の石、土留めの石や葺石と推測される石材などはなにもなく、また柱穴なども確認できなかった。

円丘部（下段）の大きさは長径約17.5m、短径約15.6m、高さ約2.3m、上段の大きさは長径約12.3m、短径約10.5m、高さ約1.3m、墳頂部平坦面長径約9.7m、短径約8.3mである。

(4) 突出部

突出部は円丘部の北西側、尾根の低い位置に築かれている。その平面形は第29図のように特異である。どこまでを墳丘と考えるか、意見が分かれるところであるが、ひとまず最下段のH－I－J－Kはその位置、形、大きさなどから墳丘ではなく、祭壇状のものではないかと推測している。

ではD－F－M－Pの上段までが突出部なのか、それともD－G－L－Pの上段を含んだ下段までが突出部なのか正直なところどちらとも決めがたい。墳丘自体の残存状況は円丘部のところでも述べたように北側は全般的に流出が激しく、墳端のラインが明確ではない。しかし南側は図版10にみられるように比較的明瞭なところが残っており、おおよその形は推測できる。

まず円丘部との境界は、第28図のDとPの点であると考えている。北面のD側は一度小さくふくらんでEまで行き、そこからわずかに外に開いてFに至る。南面のPはDよりは明瞭で、ここで円丘部の曲線が直線に変わり、約2m北に進み、突出部で最も狭い点（O）になる。そしてこのOから再び開いて、約1.7m直線で進み、さらにその点Nでもう一度開き、Mに至る。このMと北面のFをつなぐところで小さな段差がある。第27図の断面図ではちょうど木の根がかかり、はっきりせず、北西のコーナー（F）付近もはっきりしないが、南西側のコーナー（Mの上部）付近の上端はしっかりしている。つまりこのF－Mラインで一度切ってみると、DとPの点で突出部に変化し、EとOの点で最も幅が狭くなり、そして南面ではNからMへバチ形にひろがるのである。

この上段のD－F－M－Pの突出部の大きさは、D－Pが約7.2m、E－Oが約4.7m、F－Mが約6.0m、D－PラインからF－U－Mラインまでの長さが約6.5mである[3]。そしてこのF－U－Mラインまでが墳端であるとすると、円丘部を含めた墳長は約23.5mになる。突出部の高さは場所によって当然異なるが、比較的段差が明瞭なOやN付近で約0.4mほどである。また円丘部の表土除去後の頂部の高さは140.81mであり、突出部下端のUの高さは137.70mであるので、その円丘部頂部と突出部下端の比高差は約3.1mになる。

次いで下段のG－Lラインまでを墳端と考えた場合、途中にF－Mの小さな段差を持ち、南側のOからMまで一度バチ形に広がり、そしてLまで徐々に幅が狭くなるというやや違和感のある平面形態を取ることになる。ただ北面の墳端ラインは残存状況があまりよくないことにもよるのかもしれないが、EからGまで比較的スムーズに変化している。またG－Lラインでの平面的な墳端とその上端のラインは墳丘端部のラインとしてはあまり形のよいものではないが、レベル的には0.4mほどの段差が比較的明瞭に残っており、ここを墳端とすることに問題はないと考えられる。

この下段までを突出部と考えると、前述の上段のE－Oが最も幅の狭いくびれ部となることに変わりはなく、くびれ部（E－O）の幅は約4.7m、途中での最大幅はF－Mのやや西側で約6.5m、突出部の端での幅はG－Lで5.3m、突出部の長さは約12.1mになる。そして円丘部を含めた墳長は約28.8mになる。ちなみに突出部の長さを円丘部の円の端Tからとると10.6mになる。円丘部頂部の高さとこの下段の下端のVの高さ（136.20m）の比高差は約4.6mになる。

そして祭壇状の最下段のテラスはいま述べた突出部下段より0.4mほど低く、H－Kが約3.0m、I－Jが約3.8m、長さ（V－W）が約2.8m、高さが約0.3mで平面が台形を呈している。この祭壇状のテラスまで含めた全長は約31.8mになる。この下端W（135.20m）と円丘部の頂部の比高差は約5.6mである。

2　埋葬施設

(1) 墳丘内

①第1主体部（竪穴式石室、第30図）

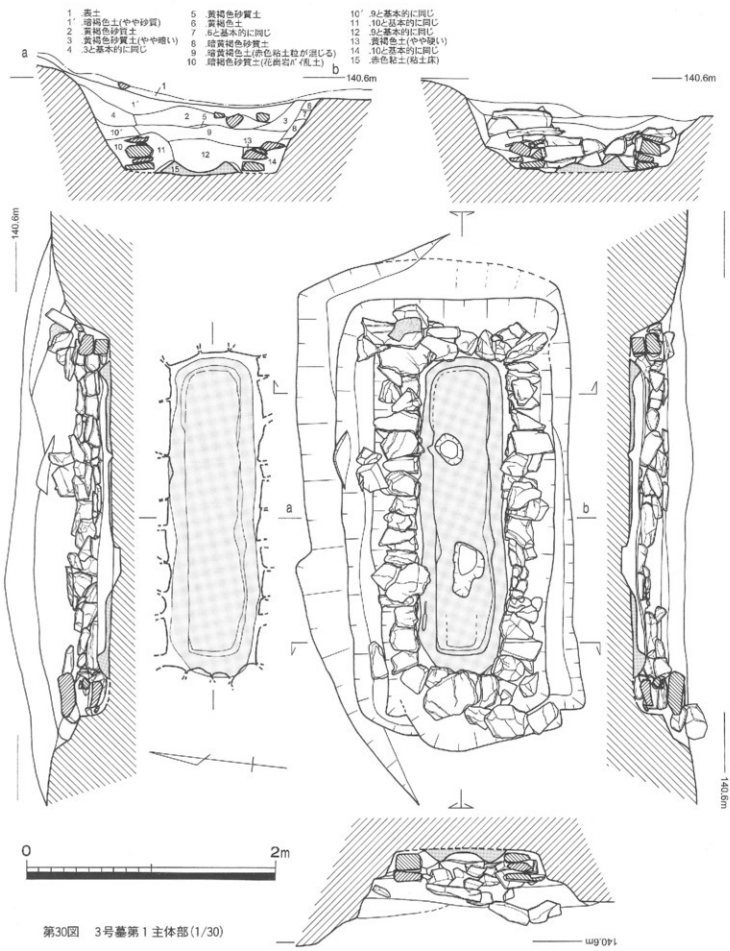
石室

円丘部の墳頂部の南寄りの部分に東西方向を主軸として竪穴式石室が築かれている。主軸の方位はN84°Eである。墓壙はまず墳頂部側である北側が東西約460cm、深さ20～30cm斜めに掘り込まれる。そしてその南側に東西350cm、南北187cm、深さ20～30cmの隅丸長方形の墓壙が掘られ、その中に東西317cm、南北145cm、深さ約20cmの同じく隅丸長方形の墓壙が掘られている。つまり上部の北側の掘り込みは墓壙を作るための最初の調整で、その中に2段になった隅丸長方形の墓壙が掘られているのである。この二段墓壙の上段と下段の間には基本的に幅10～20cmの狭いテラスがみられる。石室はこの下段の墓壙のなかに基本的に構築されている。ただ上段の墓壙の西側の一部は石室構築時なのか、それともその後（といっても新しいものではないようである。）削り広げられている。

竪穴式石室の床面の形態は両小口部がやや丸みをもち、東西の長さが258cm、南北の幅は西端付近が71cm、中央部で73cm、東端近くで70cmである。

石材は基本的には多少厚みはあるが、板状の安山岩の自然石である。石の大きさは45×30cmくらいのものが大きい方で、だいたいは30×20cm前後のものが多い。厚さは20cmを越えるものもあるが、だいたいそれ以下で、10～15cmくらいのものが多い。積み方は下段の墓壙の中に一部裏込めをもつ部分もあるが、基本的には裏込めの石を入れずに、石を積み上げている。石のおき方は1段目は長側面を内側に向け、2段目以上は小口面を中（棺側）に向けるものが多くなるようである。つまり直方体の石の場合、1段目では長い側面を石室内に向け、2段目以上では一方の狭い小口を石室内に向けて積んでいるようである。そして、壁面は基本的にまっすぐ積み上げている。石室上部の石材はのちに持ち出されたのか、または流出したのかはわからないが、調査時には多いところでも4段ほどしか残っていなかった。最も高いところで、墓壙の底から42cm、粘土床の床面からは39cmである。本来の高さは次に述べる木棺の形態、大きさなどからおおよそ現状の最も高い部分にもう一石のる程度であったのではないかと推測している。

それは石室の北東部の上段の墓壙部分に積まれた石の上にのっていた粘土（アミ部分）からも推測される。石室の石はいま述べたように基本的に下段の墓壙の中に積まれているが、北側の3ヵ所と南西部では上段の墓壙のテラス面にのるように石がみられる。このうちの北側の石の中で北西部と中央部の石はレベル的に石室の木棺に面した石の裏込めのようにみえるが、北東部の石はそれだけではなく、石の上に粘土床と類似した赤い粘土が幅10cm、長さ30cmほどみられる。そしてこの粘土はよくみると、木棺側が「¬」のようにも見える。つまり可能性の範囲であるが、石室の天井材の縁を覆った粘土ではないかと考えられないかと注目している。この粘土がみられた石の高さは標高約140.35m



第30図　3号墓第1主体部(1/30)

であり、木棺の底（粘土床）が標高139.89mであるので、これが天井材の下面の高さを示しているとすると、木棺の高さは45cmくらいまでは可能となる。ちなみにこの高さはこの石室で最も高い位置で残っている西側小口部の石に一つ石をのせた程度であり、全体的には小さな石を含めて現在残っている石室の石と同じような厚さ10～15cmの石を2段積むくらいの高さである。さらに、北東部の粘土が天井材の縁を覆ったものと考えて、天井材の大きさを推測すると、上段墓壙の南西部にある石2個はちょうど天井材の外側くらいの位置になり、レベル的にもちょうど北東部の粘土から推測した天井材の下面の高さである標高140.35m前後にあり、天井材が動かないようにした支えの石ではないかと推測されるのである。もしそうであるならば、上段墓壙がこの部分だけ西側に拡張されているのも、その時の作業に関連するのかもしれない。いずれにせよ北東部の粘土から一応天井材の位置、つまりこの竪穴式石室の本来の高さを推測することは可能かもしれない。またこのような粘土はほかにはこの石室の石材の間や上では確認できなかった。

また石室内の粘土床の上にたまった埋土の中には2～3cm大の粘土のかたまりが含まれていたが、大きな粘土塊はみられなかった。また第30図の石室埋土の断面図にみられるように本来石室を構築していた石材の一部と推測されるような大きさの石は少々みられたが、天井石、またはその一部と考えられるような石材はこの石室内、石室周辺、そして墳丘の周辺でもみることはできなかった。このような状況から石室の天井材は、石ではなく、たとえば木、つまり木蓋であったのではないかと推測している。当然石蓋の可能性を全く否定するのではないが。そして粘土床の上に石室北東部のような粘土塊がみられなかったことは、粘土による天井材の被覆が全面ではなく、木蓋の縁やすきまだけであったことによるのではないかと推測される。また天井材が石であり、全面が粘土で被覆されていた場合も、石室の石材持ち出しの時に粘土がついたまま運び出されたという可能性が当然推測されるが、もし天井石を全面粘土で覆っていたならば、もう少し粘土塊などが残っていてもいいように思われる。

一方、このような石室の石材の残存状況から、この石室状のものは一般的な竪穴式石室ではなく、木棺の支えとして木棺に沿って、たとえば下半分だけ築かれたものではないかという考えもありうるが、その場合、木棺は少なくとも粘土床の上に安置されており、副葬品の鉄剣も粘土床の上におかれている。木棺がこの粘土床の状況から後述するように割竹形木棺であるならば、直径55cmくらいのものになり、石室状の石壁との間にそれぞれ10cmほどのすきまができることになる。そうすると石室がなく、天井材がなかったとするならば、木棺全体を粘土などで覆うか、またはそのまま適当に土を被せることになる。

前者の場合、粘土で木棺が覆われていた、つまり粘土槨の外側に石室状のものがあることになる。この場合粘土槨の中の木棺が腐食すると、上を覆っていた粘土がそのまま床に落ち、大量の粘土が床の上に残ることになる。この平尾3号墓では少なくともこのような大量の粘土は見つかっておらず、粘土で覆われていたとは考えられない。

次に後者の場合、例えば最近注目を集めた国分寺町の国分寺六ツ目古墳[4]では純度の高い粘土で木棺の途中まで覆い、上部は純度は落ちるが、砂混じりの赤橙色粘土などで覆い、最後は風化礫混灰褐色土で墓壙を覆ったと考えている。また同じ綾歌町内の石塚山1号墳[5]では石室状の石壁の中に割竹形木棺をおき、そのすきまに粘土をいっぱい入れ、木棺を覆ったのち、別の土で木棺と石室状の石壁全体を覆ったと推測している。ただこの平尾3号墓では前述のように粘土床の上の埋土に特別な粘土やそれに類する土はなく、かつ石室とのすきまにも粘土などの特別な土は入れられていない。第

30図の埋土の中で北壁側に側面の支えのような土（土層番号11）がみられるが、これは暗褐色砂質土（汚れた花崗岩バイラン土）であり、パサパサである。そしてこの土は木棺を据えた場合の反対側である南側にはみられない。

つまりこのような状況から平尾３号墓の第１主体部はやはり天井材がなにもなかったと考えるより、木蓋などをのせた竪穴式石室であったと考えたい。

粘土床と木棺

石室の床面には赤色粘土を使用した粘土床が構築されている。一部石室の石の下に入り込む部分があることから、墓壙を掘ったあと、まず粘土床を築いたものと考えられる。外形は隅丸不整長方形で、東西長は257cmである。南北幅は西側のほうがやや広く約70cm、東端の部分が約60cmである。厚さは薄い木棺の中央ライン上で２～４cm、縁の厚いところで10～12cmである。

床面の東西はほぼ水平である。西端が標高139.89m、中央部分は緩くくぼみ、標高139.84m、東側は端部側の幅約13cmほどが２cmほどくぼむが、その西側は標高139.88mである。床面の横断面のカーブは比較的正円に近く、これで木棺の直径を推測すると、西端付近で55cm、中央部で52cm、東端付近で54cmである。実測時の誤差も当然あるであろうから、これらの数値も当然幅をもたせて考えなければならないが、おおよそ直径52～55cmくらいの割竹形木棺状のものが使用されたものと推測される。ただ、縦断面のラインが一直線ではなく、中央が少しくぼんでいることから、粘土床の表面に残された形状が木棺の形をある程度反映しているとするならば、その木棺の外面の中央付近が多少ふくらみをもったものであったと推測される。木棺の端部の縦断面形を示す粘土床の内側の形は、西側は角は丸いが、比較的直立気味（約70°）に上がっていく。これに対して東側は前述のように幅13cmほど一旦くぼみ、そこから緩やか（約40°）にのびていく。少なくとも一般的にイメージされている明瞭な角をもつ木棺ではないようである。木棺の長さは粘土床の底の最も短いところで212cm、粘土床の上部の、木棺が広がったところで、228cmである。いま述べたように粘土床の縦断面の端部の緩やかなカーブから推測すると、木棺の長さは230cmはこえそうである。ちなみに大韓民国の茶戸里１号墳出土の割竹形木棺も小口部分の一方は直立気味で、もう一方はかなり丸く仕上げられている[6]。

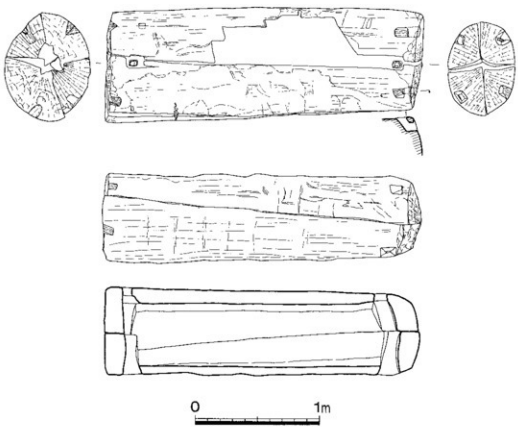
そこでこの平尾３号墓の木棺であるが、ひとまずいま述べたように断面が正円形ならば直径55cm弱の大きさのものであると考えた。この大きさの木棺を前述の石室に納めることは可能であろうか。まず横幅は石室の幅が70cmほどあるので問題はない。では高さはいかがであろうか。最も残りのよい西壁で粘土床の底から約40cmである。つまり天井材の下面まで最低で55cm必要であるから、この西壁部分で１～２段積まなければならなくなる。つまり他の残りの悪い部分では３～４段くらい積まなければならなくなる。そうすると、さきほど述べた石室の北東部の粘土がついた石の上にもさらにもう１段ほど石を積まなければならなくなる。このようにさらに石を積むということは絶対ありえないというわけではないが、そうすると、この石の上の粘土の説明が難しくなる。

ではさきほどこの北東部の粘土をもとに推測した木棺の高さ、約45cmは可能なのであろうか。まず粘土床の横断面から直径約55cmの断面が丸い木棺をそのまま推測したが、このような正円の割竹形木棺を本当に使用したのであろうか。実際に割竹形木棺を製作する場合、丸太の上下の中間部分を鉄の斧などを使用して半截し、中を刳り抜いて木棺を作るとしても、割れ口が鋸でひいたようにきれいになることは難しいと考えられる。つまりこの半截時のロスを考慮すると木棺の断面が正円形になることはまず考えづらい。ただもしうまくこのロスを処理できたとしても、やはり５cmほどのマイ

ナスは考えたほうが素直であろう。もし5cmほどのロスですんだ場合は、この平尾3号墓では推測される石室の蓋までの高さより木棺の天井部のほうが5cmほど高くなる。

では割竹形木棺といっても多少扁平なものを想定すればどうであろうか。実はさきほど例示した大韓民国の茶戸里1号墳の木棺（第31図）は広端側で幅約88cm、高さ約63cm、狭端側で幅約75cm、高さは約54cmである。このように幅と高さで20cmほどの違いがあるのである。この約20cmの差がいま述べたような半截時のロスによるのか、それともこのようなやや扁平な形の木棺を意図していたのかはわからないが、少なくとも幅と高さでこれだけの違いがある木棺が西暦紀元前1世紀後半ころに大韓民国の南東部にあったことは事実である。また山形県の漆山古墳（衛守塚2号墳）の割竹形木棺の横断面もやや扁平である[17]。

ではこれらを参考にして平尾3号墓の木棺を推測したらどうなるであろうか。例えば茶戸里1号墳の木棺と同様の比率で高さを想定すると、幅55cmに対して高さが約40cmである。この40cmであれば、さきほどの石室北東部の粘土をもとに推測した高さ約45cmでも十分可能である。ただ茶戸里1号墳と同じ比率で高さを想定することは、現実に可能であろうか。つまり内側を刳り抜く時の棺の厚さが問題となる。ちなみに茶戸里1号墳では棺身の厚さが約12cm、棺蓋の厚さが約7cmである。つまりもう少し厚みを薄くすることも可能であろうが、実際には7cmくらいの厚さ（薄さ）と考えたほうがよさそうである。つまり高さ40cmのうち蓋身それぞれ7cmの厚さを残すと、棺内の空間の高さは26cmになる。つまり棺の中に納めた人物の胸やお腹の厚さが26cmの中におさまればよいことになる。そして棺内の横幅も同様に計算すると約40cmくらいになる。これは肩幅の関係からやや窮屈



第31図　大韓民国 義昌茶戸里遺跡1号墳割竹形木棺(1/30)

な感じがするが、本来の木棺の外側の復元直径が55cmしかないのであり、木棺の高さを低く考えることとは関係なしにもともと肩幅の狭い、やや細身の人物であったか、またはむりやり押し込んだと考えざるをえない。長さに関しては、木棺の長さが粘土床の床面で212cmあり、断面のカーブから230cmほどの長さが推測され、両方の小口部分を天井などの厚さに比べて多少厚く残しても問題はない。つまり木棺の外面の幅がもともと55cmほどしかなく、むりやり遺体を押し込んだのではなければ、多少肩幅の狭い人物が想定され、棺内の高さが26cmほどしかなくとも、問題はないようである(8)。

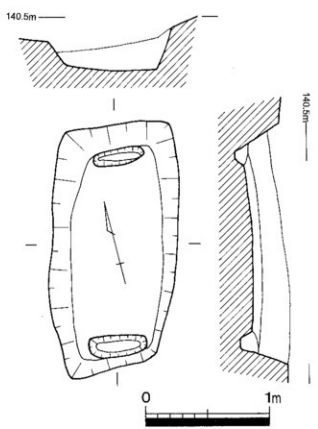
このように大韓民国の茶戸里1号墳や山形県の漆山古墳（衛守塚2号墳）の例などを参考に多少扁平な割竹形木棺を想定すれば、さきほどの石室北東部の粘土を石室天井材の縁を覆った粘土と考えて石室の高さを復元しても一応可能なようである。

最後に埋葬頭位であるが、少なくとも東西のどちらかであることは明らかであるが、木棺の東西での幅の違い、床面の高さの違いなどがほとんど見られないことからどちらとも決めがたい。ただ強いて可能性を考えるならば、粘土床の幅が西側のほうが広いことから西頭位ということも推測できなくもない(9)。もしそうであるならば、剣の切先は頭のほうを向いていたことになる。

②第2主体部（木棺墓、第32図）

墳頂部の北西部、突出部に面した標高140.3～140.5m付近にほぼ南北を主軸として築かれている。軸はN13°Eである。現状での形はややいびつであるが、長方形をなし、上面での大きさは長さ（南北）が195cm、幅（東西）が102cmである。床面には両側に小口板の痕跡が残っており、北側の小口板掘形の上端の大きさが43×14cm、下端の大きさが36×4cm、深さ約8cmであり、南側の小口板の掘形の上端の大きさが48×17cm、下端の大きさが36×6cm、深さ9cmである。この小口板の外側にそのまま長側板があったと想定すると、木棺の内法は長さ136～144cm、北幅43cm、南幅48cmになる。伸展葬ならばやや小柄な成人か子供が推測され、普通の成人であるならば、多少体を曲げて納めたのかもしれない。

現状での土壙の深さは東側が最も残りがよく42cm、西側は斜面部に近いこともあって残りが悪く約20cmである。本来の木棺の高さがどれだけあったのかはわからないが、例えば底に板を敷いて内法の高さが30cmあり、天井板の厚さまで考えると、現在の床面から45cmくらいは必要になる。つまり当時の墓壙を掘った面は少なくとも最も残りのよい東側よ



第32図　3号墓第2主体部(1/30)

りももう少し上であったと推測される。そして埋葬後に土を被せることを考えると、やはり当時の墳丘の頂上部の高さは確認された地山面よりは50cmくらいは上にあったと推測される。つまり墳頂部には少なくとも厚さ約50cm以上の盛土があったものと推測される。

埋土は2層に分かれるが、基本的に花崗岩バイラン土が風化した灰褐色系の砂質土である。

遺物はなにも出土しなかった。よって時期はわからない。

③第3主体部（土壙墓、第33図）

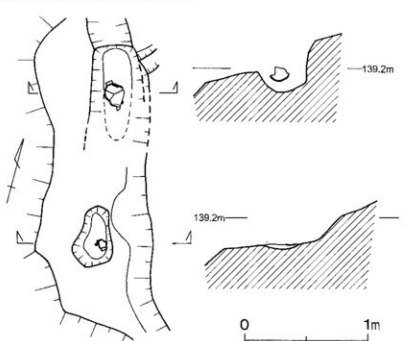
前方後円形の墳丘の2段築成の円丘部の下段の南西側斜面部、ちょうど上段と下段の間のテラスの下方で検出された。墳丘斜面にほぼ平行して築かれており、上面の標高は約139.45mである。斜面部に位置しているため、流出が激しく、本来の墓壙の形、大きさははっきりしないが、比較的残りのよい北側部分と南側の土器の位置（南側の土器が同じ墓のものであるという前提であるが）を考慮すると、主軸はN10°Wくらいになりそうである。

幅は北側の残りのよい部分の上端で42cm、下端で24cmである。深さは東側の斜面のどの付近を上端と考えるかによって異なるが、低いところで33cm、高いところで43cmになる。長さは南側の端が不明であるためわからないが、南側の土器が墓壙内にあるのであるならば、180cmはあることになる。ちなみにこの南側の土器付近の凹みの底の標高は138.96mであり、北側の土器がある付近の底の標高139.00mとほとんど差がなく、一応同じ墓壙の両端部と考えても問題はないようである。

木棺などの痕跡はなにも確認できなかった。

埋土は2層に分かれるが、基本的に花崗岩バイラン土が風化した灰褐色系の砂質土である。

遺物は墓壙の北端から30cmくらいのところに底を北、口を南に向けた状況で壺が1点、その口の部分から約1m南側で壺か甕の胴部の破片が1点出土している。これらの土器については後述するが、時期は中期末ころと推測される。



第33図　3号墓第3主体部(1/30)

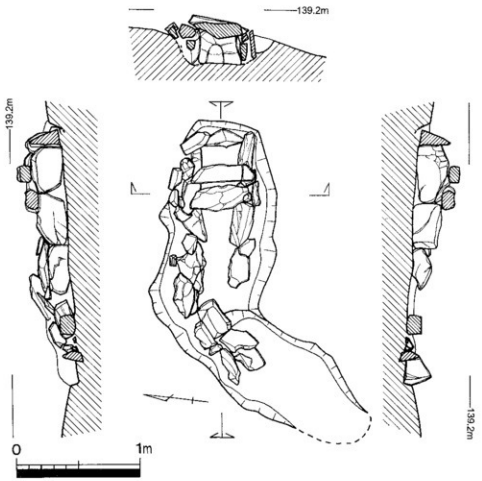
(2) 墳丘外

①第4主体部

（石棺墓、第34図）

これまで述べてきた第1～第3主体部は墳丘内にあるが、この第4主体部は墳丘の南側、墳端から約1.5m離れたところで検出された。形態は1基の石棺の西側に別の土壙状のものがついたような形をしており、1基なのか、2基なのかわからないが、ひとまず東側の石棺について述べる。

標高は139.00m付近で等高線に沿って築かれている。主軸はほぼ東西で、N82°Eで



第34図　3号墓第4主体部(1/30)

ある。西側はいま述べたように別のものが重なっているようではっきりしないが、復元すると長さ（東西）約180cm、幅（南北）約90cmの不整形な墓壙のなかに、箱式石棺が納められている。構築方法は長さ40cm前後、高さ25cm前後、厚さ20cm前後の自然の塊石を横長に1段立て並べ、高さが足りない部分は補足用の薄い石をのせて高さを揃えたのちに、その上に天井石をのせていたようである。側壁の石は墓壙の大きさと北壁の4個残っている石の状況を考えあわせると、南壁は現在3個しかないが、両面ともに4個ずつ並べて構成されていたと推測される。小口部の石は東側しか残っていなかったが、長さ38cm、高さ30cm、厚さ16cmの一つの石だけで構成されていた。西側の本来の小口部と推測される位置には約30×20cm、高さ約15cmの石があるが、これが小口部の石であるかどうかはわからない。もしそうであるならば、高さがやや不足するので、もう一つ石をのせる必要がありそうである。天井石は東側に2石残っていたが、これらは長さ約50cm、幅20cm前後、厚さ15cm前後の棒状のものである。

箱式石棺の内法の大きさは、西側の小口部を北側壁の位置から推測して復元長135cm、東幅29cm、西幅20cm、高さ26cmである。床面の標高は東端で138.78m、西端付近で138.70mで東側が高い。棺の内法の長さと幅からは、伸展葬ならばやや小柄な成人か子供と考えられる。また東側の幅が広く、かつ床面が東のほうが高いことから頭位は東の可能性が推測される。

埋土は3層に分けられるが、基本的には花崗岩バイラン土が風化したもので、暗灰色砂質土である。

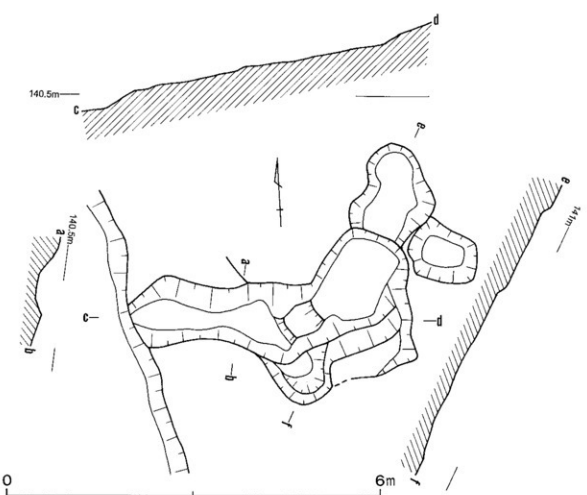
遺物はなにも出土しなかった。

またこの石棺の西側に斜めに長さ約150cm、幅約70cm、深さ約10cmの土壙がある。その北東部は第4主体部の西側と重なっており、そのためか石棺の西側は少し壊れており、その部分の石材と推測される石数個がこの土壙の北東部にある。ただ発掘調査時にはその切り合い関係などはよくわからなかった。もしこの土壙が土壙墓であるならば1基埋葬主体が増えることになる。この付近の標高は138.80m前後で、東側の第4主体部（石棺墓）より少し低い位置である。主軸はN32°Eである。遺物はなにも出土していない。

3　その他の墳丘内の遺構

(1) 意味不明土壙1（墳頂部中央付近の遺構、第35図）

前述の第1主体部（竪穴式石室）と第2主体部（木棺墓）の間、墳頂部のほぼ中央から西にかけて意味不明の土壙がある。一辺1m前後、深さ10～20cmほどの土壙が3個つながるようにあり、その南西の土壙から幅約1m、深さ20cm前後の溝状のものが3mほどのびている。そしてその先端は墳丘の中段のテラス部分で終わっている。この土壙と溝の中には石も含めて遺物はなにもなく、意味が



第35図　3号墓意味不明土壙1（1/60）

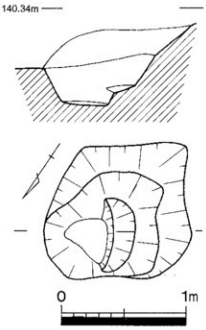
よくわからない。ただ少なくとも自然の水の流れでできたとは考えられず、人工物と判断している。最も高い土壙の上端部分での標高は140.81mで、最も低い溝の下端で139.61mである。この差は1.2mである。

この遺構の意味についてはよくわからないが、しいて可能性を考えるならば、この溝状のものを主体部の排水施設を作ろうとしたもの、つまりこれらの土壙は埋葬施設の未完成品という可能性である。当然明確な根拠があるわけではないが、墳丘の中央付近にあり、土壙と溝下端のレベル差が約1mあり、溝状の施設をもつものということで一つの可能性として述べておく。

途中で述べたように遺物はなにもなく、石などもなかった。

(2) 意味不明土壙2 (墳頂部北側の土壙、第36図)

墳頂平坦面のほぼ北端、第2主体部(木棺墓)の北東約1.4m離れたところにある。不整方形で、1.2×1.1m、深さ65cmの大きさで、上部の標高が140.28mである。底の形も整っておらず、かつ遺物はなにも出土していない。断面を見ても柱穴とはいいづらく、意味不明土壙としておく。



第36図　3号墓意味不明土壙2 (1/30)

4　遺物

(1) 第1主体部(竪穴式石室)出土鉄剣(第37図1)

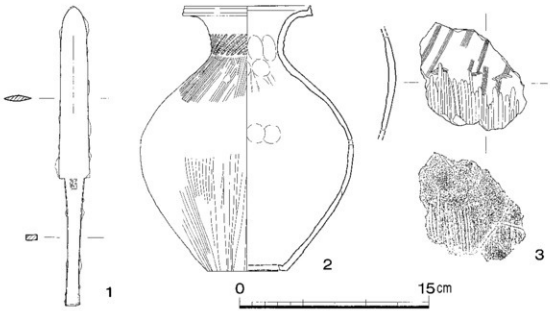
粘土床の北西部外側、切先の先端が石室の西端から28cm、北壁から7cm地点、茎の端が石室西端から52cm、北壁から9cm地点に、北壁にほぼ平行しておかれてあった。つまり切先を西、茎を東に向けて棺外の粘土床の斜面におかれていた。後述するように茎の剣身側に木質は残ってるが、現地の粘土床には木質の痕跡は確認できなかった。つまり柄の長さは現地では確認できなかった。

茎の長い剣で、鉄製品であり、さびが多少でている。全長は24.0cmである。身の長さは13.9cm、茎側の幅が2.5cm、切先付近の幅が2.0cmで、切先に向かうにつれて徐々に細くなっている。鏑ははっきりしないが、剣身の中央付近では多少確認できそうである。身の厚さは0.5cmである。後述するように茎の一部には柄の痕跡と見られる木質が残っていたが、身では確認できなかった。抜き身であったのか、鞘にいれられてはいたが、木質部が腐食して痕跡を留めていないのかはわからない。

茎の長さは10.1cmあり、幅は剣身側が1.5cm、中央付近で1.0cm、端部で1.2cmと中央部がやや細くなる形態をしている。厚さはどこも約0.5cmである。そして剣身との境目に面をもつように幅6mm、長さ9mmの木質が見られる。木目は剣身に平行しており、木製の柄の一部と推測される。そして剣身との境目に面をもっており、ここが柄の端部であったと推測される。

重量は54gである。

この鉄剣のように茎が長い例は確認した範囲では福岡県飯塚市の立岩遺跡出土例[10]が最も古く、弥生時代中期後半である。それ以後古墳時代前期にも見られることから、この鉄剣もこの範囲内に属するものと考えておく。



第37図　3号墓出土遺物(1/3)
1：第1主体部　　2，3：第3主体部

(2) 第3主体部出土土器1（第37図2）

円丘部の南西部の下段テラスの第3主体部（土壙墓）の北側で出土した。口縁部を南、底部を北にして、それぞれの底の高さが139.10mと139.07mで口縁部が少し低くなった状況で出土した。ともに土壙床面から浮いており、北側の胴部で10cm、南側のLI縁部で7cm浮いていた。このような出土状況から本来この土壙の底にすえられていたものがのちの土砂の流入でこれだけ浮いたと考えるか、棺上におかれていたものが棺の腐朽ののちに落ち込んだと考えるか、よくわからない。

土器はいま述べたような状況で検出されたが、検出時にはすでに口縁部の1／3と胴部の1／2以上がタテ方向に削られていた。そして底部は縁から幅1cm弱しか残っていなかった。

胴部が丸くふくらみ、頸部が比較的細くなった弥生土器の壷である。底部はわずかに上げ底状を呈するが、基本的には平底である。底部の内外面は指オサエされている。胴部は底部から緩やかに広がり、底から9.5cmくらいのところで最大になり、そこからまた徐々に頸部へとすぼまっていく。外面は底部から胴部径が最大になるくらいまでタテ方向のヘラミガキが比較的丁寧に施されているが、胴部中央付近は表面が痛んでおり、どこまでヘラミガキがおよんでいたかよくわからない。内面は肩部まで指オサエママとその後のタテナデがみられる。外面肩部は工具幅2.4cm以上のハケ工具でタテ方向にナデられている。ハケ目の本目は1cmに6本みられる。肩部内面下半は胴部と同じく指オサエ・ナデであるが、上半はシボリ痕跡が残っている。頸部外面はハケ工具（？）の小口の角の部分で右上がりにオサエられ、長さ約2.4cm、幅約2～3mmの斜線文が比較的密に施されている。この工具の本目は1cmに6本で、頸部外面のハケ目と同じ数である。その斜線文の上部は回転を利用してナデられており、そこから開き気味に口縁部へ至る。頸部内面は指オサエのあとゆるく回転を利用したナデが施されており、そこから口縁部までは外面同様しっかりとした回転利用のナデが施されている。口縁部は上に4mmほど立ち上がり、側面に凹線を2本めぐらせている。下への肥厚はほとんどない。

器壁の厚さは3～5mmで、だいたい4mmである。底部の端から約8cmのところで外傾接合の痕

跡がみられた。

胎土は4mm大以下の石英や長石がやや多く入り、1mm以下の赤褐色粒が少し入る。色調は基本的に暗赤褐色であるが、口縁部付近はやや明るい。胴部下半に縦9.7cm、横6.5cmの範囲の黒斑がみられる。ただ全面が黒いのではなく、縁の部分だけが馬蹄形に黒くなっている。焼成は普通である。

大きさは、口唇部径10.0cm、口縁部最大径10.45cm、頸部径5.8cm、胴部最大径17.0cm、底部径6.4cm、高さ21.3cmである。これらの数値については前述のような1／3前後の大きさから復元したものであり、多少の誤差は当然あると考えている。

時期は弥生時代中期末ころと推測される[11]。

(3) 第3主体部出土土器2（第37図3）

この土器は第3主体部（3号土壙墓）の南側の長さ50cm、幅38cm、深さ4cmの浅い土壙の上面で出土した破片である。床面から4cmほど浮いて凹面（内面）を上にして出土した。図示した大きさの破片と1cmほどの小さな破片がわずかに出土しただけである。

図示した破片は10×7cmの破片で、壺か甕の胴部の破片と推測される。下半部にタテ方向のヘラミガキ、上半部に1cmあたり12本の細かな木目をもつ工具で施されたハケ目がタテ方向（やや右上がり）に施されている。この工具の幅は不鮮明であり、図示した程度にしかはっきりしないが、1.1cm以上はある。このヘラミガキとハケ目の間に工具ははっきりしないが、列点文が施されている。内面は下部にわずかにやや左上がりのヘラケズリがみられ、その上部は指オサエ・左上がりのナデが施されている。

器壁の厚さは4～6mmである。胎土は3mm大以下の石英や長石がやや入り、1mm以下の赤褐色粒が少し入っている。また火山ガラスも含まれている。色調は赤茶色～赤褐色である。焼成は普通である。

時期は前述の壺と同じく弥生時代中期末ころであろう。

5 小結

以上3号墓について述べてきたが、以下整理して、この墓の時期などについて検討しておきたい。

まず墳丘は、墳端をどこにするか問題はあるが、一応墳長28.8mの前方後円形のもので、突出部の西側に祭壇かと推測される小さなテラスがついたものである。円丘部は17.5×15.6mの不整円形をなし、2段築成である。高さは2.3mで、上段と下段の間にはテラスがある。このテラスの突出部側の端には一辺50cmほどの石が1個おかれており、区画の起点を示しているようにもみえる。

突出部は2段になっており、上段は平面形がバチ状を呈している。ここで墳丘を切ると、墳長は23.5mになる。下段までを墳丘とすると、突出部が2段構成になり、その形は細長形になる。その墳長は28.8mになる。

埋葬施設は墳頂部に2基、墳丘斜面に1基、そして墳丘外に1基がある。つまり合計4基の埋葬施設が墳丘内外にあることになる。

墳頂部の最もしっかりした埋葬施設は墳頂部やや南よりに築かれた竪穴式石室（第1主体部）である。その概要を前述のような推測などを含めて整理すると、次のようになる。

竪穴式石室

自然安山岩板状石小口積み。ほぼ直立。天井材：木？

長さ：258cm　　幅：西71cm、中央73cm、東70cm

高さ：墓壙底～天井材下面：推定49cm、粘土床底～天井材下面：推定約45cm

粘土床

長さ：257cm　　幅：西側約70cm、東側約60cm

厚さ：床面２～４cm、縁部10～12cm

縦断面：直線的であるが、中央付近がややくぼむ。

横断面：ほぼ正円形、復元直径52～55cm

木棺（いずれも推測）

形態：やや扁平な割竹形木棺

外面：長さ：約230cm　　幅：約55cm、高さ約45cm以下

内面：長さ：両小口側の削り残しをそれぞれ20cmとすると約190cm

幅　：棺の厚さを７cmずつとすると41cm、高さ：棺の厚さを７cmずつとすると31cm以下

遺物は棺外の粘土床の上面に西に切先を向けた鉄剣１本だけであった。

次に、第２主体部は墳頂部の北西端部に位置し、小口板を墓壙に埋め込んだ木棺直葬墓である。遺物はなかった。この木棺墓の残存状況から少なくともこの墳丘はもう50cm以上は高かったであろう、つまり盛土があったであろうと推測できた。

第３主体部は墳丘斜面に位置し、残存状況はよくなかったが、弥生時代中期末ころの土器２点が出土した。

以上が墳丘内の埋葬施設であり、第４主体部は円丘部の南外に築かれた箱式石棺である。遺物は出土していない。

以上のような概要であるが、問題はこの前方後円形の墳丘をもつ平尾３号墓の時期である。遺物は第１主体部（竪穴式石室）の棺外から出土した茎の長い鉄剣と第３主体部から出土した弥生時代中期末ころの土器だけである。第１主体部の鉄剣は前述のように弥生時代中期後半から古墳時代前期にみられるもので、それ以上の追及は現状では難しいようである。

そこで第３主体部の土器が前方後円形の墳丘の築造時期と考えるのか。土器の時期は前述のように中期末ころと考えられる。つまり弥生時代中期末ころに前方後円形の墳丘、および第１主体部の竪穴式石室のようなものが築かれたと考えることができるのか。一般的にこのような墳丘形態は弥生時代後期後半の古いころからみられるものであり[12]、かつ竪穴式石室も岡山県の黒宮大塚弥生墳丘墓[13]のものが最も古くやはり弥生時代後期後半の古いころからである。つまり中期末と後期後半という時間の差はかなり大きく、単純に両者を結びつけることには躊躇される。しかし一方で、前方後円形の墳丘の円丘部の墳端近くにある土壙墓を時間差だけで簡単に「偶然」とかたづけてしまうことにもやはりためらいが残る。

では両者の関係をどのように理解するか。ここではその可能性について述べておきたい。

まず一つの考えとして、やはりこの中期末ころの土器と墳丘・石室が全く無関係であると考えることである。つまり弥生時代中期末ころに尾根の南向き斜面に土壙墓が１基作られる。そしてそののちにこの土壙墓がある斜面を含めて前方後円形の墳丘が築かれ、竪穴式石室が構築されたと考えるので

ある。つまり「偶然」両者が重なり、「偶然」前方後円形の墳丘の墳端近くに土壙墓が存在することになったという考えである。こう考えれば、少なくとも中期末ころの土器と前方後円形の墳丘形態、竪穴式石室などの問題はクリアーできそうである。

ただ両者が無関係であるとした場合、前方後円形の墳丘と竪穴式石室はいつ築かれたのであろうか。これまで述べてきたように遺物は鉄剣だけであり、それでは弥生時代中期後半から古墳時代前期の範囲内であるとしかいえない。では墳丘の形と石室の構造、そして粘土床という特徴から考えると、墳丘と石室は弥生時代後期後半の古い時期から可能である。しかし粘土床はこれまでの日本の例ではいわゆる前期古墳からであり、この平尾３号墓の竪穴式石室は古墳時代初頭以降となる。つまりこれまでの日本の中での資料からそのまま判断すると、この平尾３号墓の築造時期は古墳時代初頭以降、前期の中であると考えるのが最も無難である。

しかし定型化していない前方後円形の墳丘を考えると、弥生時代後期後半ころまで遡らせることは可能なようにも思える。つまり後述するように割竹形木棺、およびその粘土床のような形のものが紀元前の時期に朝鮮半島にあるのであるから、そこからの影響を考えれば不可能ではないように思われる。ただ一方で、定型化していない前方後円形の墳丘は古墳時代になっても各地に存在するので、この平尾３号墓の墳丘もそのように考えることは可能である。

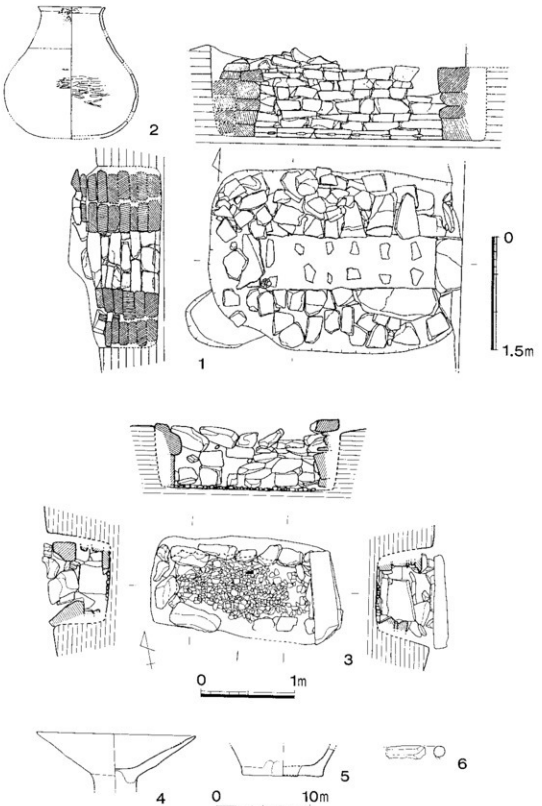
つまりこの平尾３号墓の第３主体の土壙墓以外の墳丘と竪穴式石室の構築時期については、現状では弥生時代後期後半～古墳時代前期の範囲内でしか限定できないようである。つまり前期古墳である可能性も当然あるのである。その場合、名称を平尾３号「墳」としたほうがよいのであろうが、現時点ではどちらとも決めかねるので、後述するような可能性も含めて平尾３号「墓」としておく。

次に第３主体部の土壙墓の位置から、この前方後円形の墳丘と土壙墓を別のものとみるのはやはり無理があるとして、この墳丘も弥生時代中期末～後期初めころまで遡らせうるとの考えである。ただそうすると、前述のような前方後円形の墳丘、竪穴式石室などの問題をどう説明するのかということになる。

まずたしかに確実な前方後円形の墳丘は岡山県楯築弥生墳丘墓の例が後期後半の古いころと考えられており、この時期が最も古いようである。しかし前方後方形の例ではあるが、岐阜県岐阜市瑞龍寺山山頂墳が後期中葉以前にまで遡る可能性があると考えられており[14]、また平地の例で周溝墓との関係で理解すべきで、参考例としないほうがよいのかもしれないが、兵庫県赤穂市の有年原田中遺跡[15]の例は一応後期前半にまで遡る。さらにこの平尾墳墓群のうちの前方後円形の墳丘をもつ２号墓は少なくとも出土土器から後期前半に遡る可能性が高い。このように前方後円形の墳丘は弥生時代後期前半には存在したと考えることができそうな状勢である。

次に竪穴式石室であるが、これまでの弥生時代の竪穴式石室は瀬戸内海沿岸地域の広島県、岡山県、香川県で見つかっており[16]、これらの出現は日本の中でなされたのか、それとも外来、例えば朝鮮半島などの墓制の影響でなされたのかはっきりしていなかった[17]。確かに木棺の外側に石を積み上げることから竪穴式石室が成立する可能性は十分考えられ、それが日本のこの地域でなされた可能性は考えておいてよいと思われる。

一方、朝鮮半島の影響はどうであろうか。これまで朝鮮半島で確認されている日本の竪穴式石室と類似する確実な竪穴式石室はA.D.４世紀ころ以降のものであり[18]、これらと今回のものを結びつけることはできない。ただ朝鮮半島の支石墓の埋葬施設にはその部分だけ一見すると日本の竪穴式石



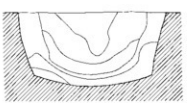
第38図　朝鮮半島の無文土器時代の竪穴式石室と出土遺物

1，2：金海内洞２号支石墓（１は1/50，２は不明）
3～6：釜山杜邸洞遺跡（３は1/40，４～６は1/4，４・５は石室内，６は石室周辺）

室とそっくりな竪穴式石室がある（第38図１）。そしてこの天井材も石と木の両方があるようである[19]。つまりこのような支石墓の埋葬施設が日本の竪穴式石室の成立に影響を与えた可能性はないのであろうか。ちなみにこれまで確認されている竪穴式石室を埋葬施設とする支石墓のなかで、例えば慶尚南道徳川里遺跡のものがB.C.４世紀ころと推測されている[20]。つまり現状ではやはり時間の差が大きすぎる。ではその間を埋めるものはないのであろうか。

そこで注目したいものが釜山市杜邱洞林石遺跡の竪穴式石室などの石室である[21]。第38図３のように確かに日本の竪穴式石室とは石の積み方などにおいて違いがあるが、基本的には竪穴式石室の構造をしている。そして興味深いのはこの石室も木蓋が推測されているのである。この石室の時期は出土した土器からB.C.２～３世紀ころと推測され、さきほどの徳川里遺跡例よりは近づいている。このほか全羅南道草浦里遺跡[22]や大谷里遺跡[23]例もほぼ同時期である。ただ現状ではこれらを直ちに平尾３号墓のものと結びつけることは難しそうである。しかし朝鮮半島での近年の発掘調査ではこれまで知られていなかった遺構や遺物が続々と発見されており、今後もう少し平尾３号墓の竪穴式石室と類似し、そして近接した時期のものが発見される可能性はあるのではないかと推測される。

さらに割竹形木棺についても慶尚南道茶戸里１号墳で紀元前１世紀後半の実例（第31図）が発見されており、同じ遺跡の58号墳では粘土床のように敷かれた粘土も見つかっている[24]（第39図）。またこの割竹形木棺も日本では弥生時代中期初めの福岡市吉武高木遺跡で使用されていたと推測されており[25]、朝鮮半島でのより古い例が発見される可能性は高いであろう。



第39図　大韓民国 義昌茶戸里遺跡
58号墳土層断面図(1/20)

つまりまだ当然不十分ではあるが、日本の平尾３号墓などのような竪穴式石室が、朝鮮半島の紀元前の遺跡において見つかる可能性は考えておいてよいのではないであろうか。そうすると割竹形木棺、粘土床もふくめて朝鮮半島の墓制の影響を受けて瀬戸内海沿岸地域で使用されはじめた可能性は考えておいてよいのではないかと思われる。

ちなみに前述の楯築弥生墳丘墓の木槨墓は朝鮮半島の墓制の影響と考えられ、同じように竪穴式石室も朝鮮半島の墓制の影響で成立したと考えることは全く無謀なこととはいえないように思われる。

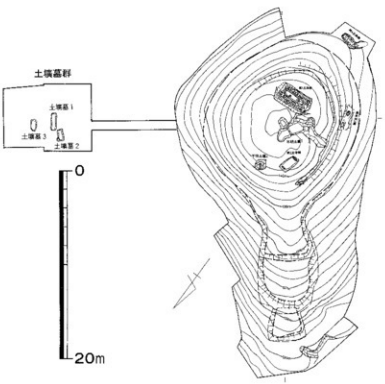
さらにこの中期末～後期初めの時期には瀬戸内海沿岸地域には中国、朝鮮半島系の資料が増加し[26]、この平尾３号墓が位置する香川県の高松市上天神遺跡においても後期前半の朝鮮系軟質土器が出土している[27]。さらに最近発掘調査され、注目を集めている岡山県上東遺跡で後期初めの海の港の波止場が検出され、貨泉や朝鮮半島の瓦質土器も出土している[28]。

つまりこのような紀元前後の朝鮮半島を対象とした瀬戸内海沿岸地域の活発な交流を考えると、平尾３号墓の墳端に位置する第３主体部の土壙墓は前方後円形の墳丘の中に含まれ、竪穴式石室などとともにこの墓の一部を構成していると考えることも可能なように思われてくる。つまりこの平尾３号墓の前方後円形の墳丘と竪穴式石室が中期末ころまで遡る可能性は捨て切れないのである[29]。

以上長々と述べたが、平尾３号墓の前方後円形の墳丘と竪穴式石室と墳端部の土壙墓は全くの「偶然」に存在したと考えることも可能であるし、同じ墓の一部であると考えることも無謀ではないと考えられる。

第4節　2号墓・3号墓間の土壙墓群

平尾墳墓群の保存協議がまとまり、香川県教育委員会の指導のもとに綾歌町教育委員会が主体となって、記録保存が決定した3号墓、4号墳、5号墳の3基について最終調査を実施することになった。その際、3号墓の中心から北東方向に2号墓に向かって延びる尾根筋に長さ約30m、幅1mのトレンチを設定して、関連遺構の確認を行った。その結果、3号墓円丘部の中心から25m前後、墳端部から約15m尾根筋を下った位置から、3基の土壙墓がまとまって発見された。標高134m付近で、3号墓の最高点から約7mほど低い場所で、2号墓が位置する標高約138mのたかまりとの間の鞍部に近いところである。3基ともに尾根筋に直交する主軸方位をとっている。



第40図　2号墓・3号墓間土壙墓群位置図(1/400)

土壙墓1（第41図1）

3基の土壙墓群の中央に位置するもので、長さは上端で182cm、下端で170cmを測り、幅は上端で52～58cm、下端で34～41cmを測る。平面形はほぼ長方形を呈する。深さは30cm前後である。主軸方位はN44°Wで、ほぼ北西方向に主軸をもつ。埋土は上下2層に分かれる。土壙掘形の横断面をみると底部は中央に向かって浅くくぼむが、木棺の痕跡は認められなかった。長軸方向については南東端から北西に向かって少しずつ深くなっており、下端の幅も南東に向かってわずかに広がっているため、南東側が頭位であった可能性がある。

土壙の保存状態は良好であったが、遺物は全く出土しておらず、時期については不明である。

土壙墓2（第41図2）

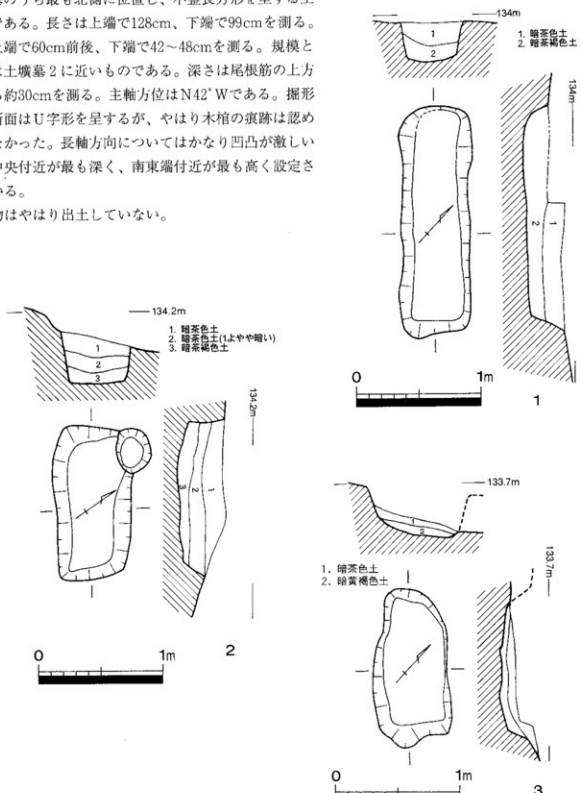
土壙墓1の西側に構築された長方形を呈する土壙墓で、北西隅部が直径60cmほどのピットによって撹乱を受けている。長さは上端で123cm、下端で101cmを測り、幅は上端で55～62cm、下端で33cm前後を測る。土壙墓1とは長さの点で大きな違いがみられる。深さは尾根の上方側から43cmを測る。主軸方位はN57°Wである。掘形の横断面はやはり中央に向かってわずかにくぼむが、木棺痕跡は認められない。長軸方向についてもやはり南東端付近を最も高い位置に設定している。埋土は3層に分けられたが、土壙墓1と同質のものであった。

遺物は皆無であった。

土壙墓３（第41図３）

３基のうち最も北側に位置し、不整長方形を呈する土壙墓である。長さは上端で128cm、下端で99cmを測る。幅は上端で60cm前後、下端で42～48cmを測る。規模としては土壙墓２に近いものである。深さは尾根筋の上方側から約30cmを測る。主軸方位はN42°Wである。掘形の横断面はU字形を呈するが、やはり木棺の痕跡は認められなかった。長軸方向についてはかなり凹凸が激しいが、中央付近が最も深く、南東端付近が最も高く設定されている。

遺物はやはり出土していない。



第41図　2号墓・3号墓間の土壙墓群(1/30)

1．土壙墓１　2．土壙墓２　3．土壙墓３

第５節　４号墳

１　墳丘（第42、43図）

４号墳は、２号墓から尾根が北北西に下り、標高128mで尾根が西に方向を変えるところに位置している。調査前の墳丘測量では、後円部が半分ほど果樹園の造成ににより削られてはいたが、墳長約40mの前方後円墳（第42図）の可能性があると予想されていた。

調査は、墳丘主軸に沿って断面観察のトレンチを、またこれに直交するように南北にもトレンチを３本設定し調査に入った。また、並行して墳丘部の表土除去作業も実施した。この結果、墳丘の主軸に沿って入れたトレンチのａ－ｂ土層断面図（第44図）では、図面右端の後円部墳頂部付近で表土層の下に淡黄褐色土が、その下に黄褐色弱粘質土がそれぞれ20～40cm堆積している。そして、その下には地山である花崗岩バイ乱土が堆積していることから、後円部の墳頂付近には盛り土があることがわかった。しかし、前方部（図面左側）に下るに従い盛り土はみられず、表土直下は花崗岩バイ乱土となる。そして、果樹園で削られている後円部から西に9.5mのところで明確な墳端が確認された。また後円部、くびれ部の墳端に関してはやや明瞭さに欠けるものの傾斜がやや緩くなるところがみられることからその部分がほぼ墳端と推測される。このように、同墳の墳端は標高126.25m～126.50mのコンタが巡るライン上になり、ややいびつな円形をした後円部に長方形の前方部が付く前方後円墳となる。以上のように削られた後円部を含め復元した墳丘の墳長は18m、後円部直径12m、高さ1.5m、前方部長さ６m、前方部幅５m、高さ0.8mとなる。墳丘主軸方位はＮ 88°Ｗ。

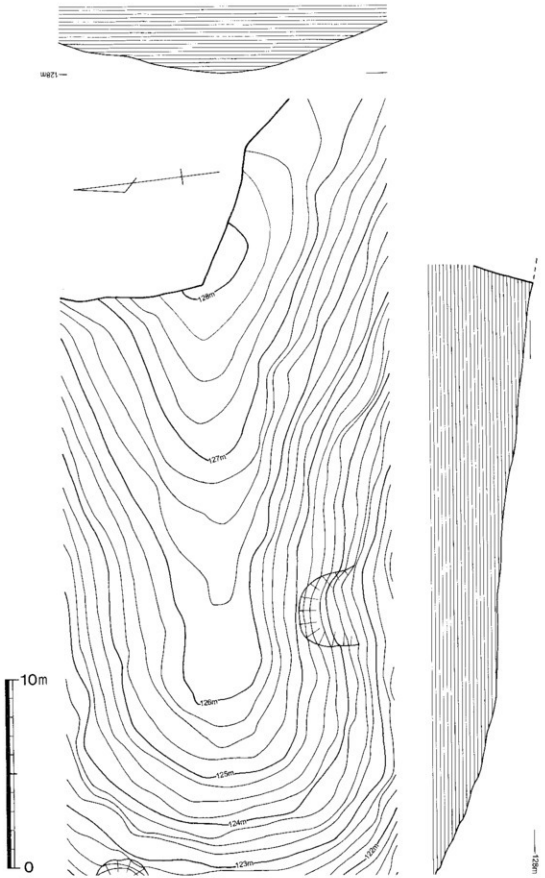
２　埋葬施設

埋葬施設は、後円部で１基と墳丘外で１基検出した。

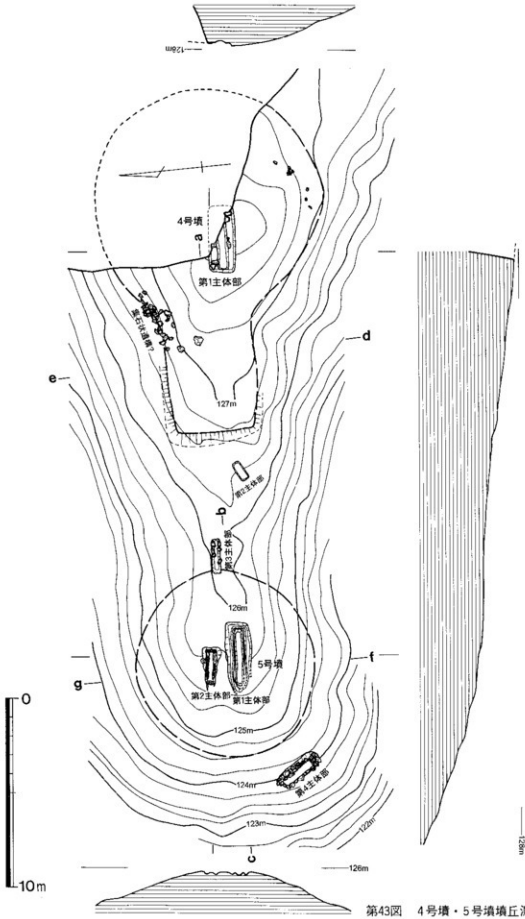
(1) 第１主体部（第45図）

この主体部は、推定復元された後円部の中央からやや南西に位置し、主体部の主軸を墳丘主軸に平行に置いている。表土を剥いだ面で、北東部が半分削平された現存長340cm、西端幅140cmの長方形プランを検出し、引き続き墓壙内埋土の掘り下げを行い、15cm程掘り下げた面の墓壙中央部で現存長255cm、幅40cmの木棺痕跡を確認した。棺底部はＵ字状を呈していることから、刳竹形木棺と推測される。検出面から棺の床面までの深さは25cmを測る。また、墓壙の土層断面図から、この棺を設置するのに際して墓壙基底面に明黄褐色土および淡黄褐色土を敷き詰め、この面をＵ字状に掘りくぼませて、棺を設置していると推測される。主軸方位は、Ｎ 83°Ｗ。

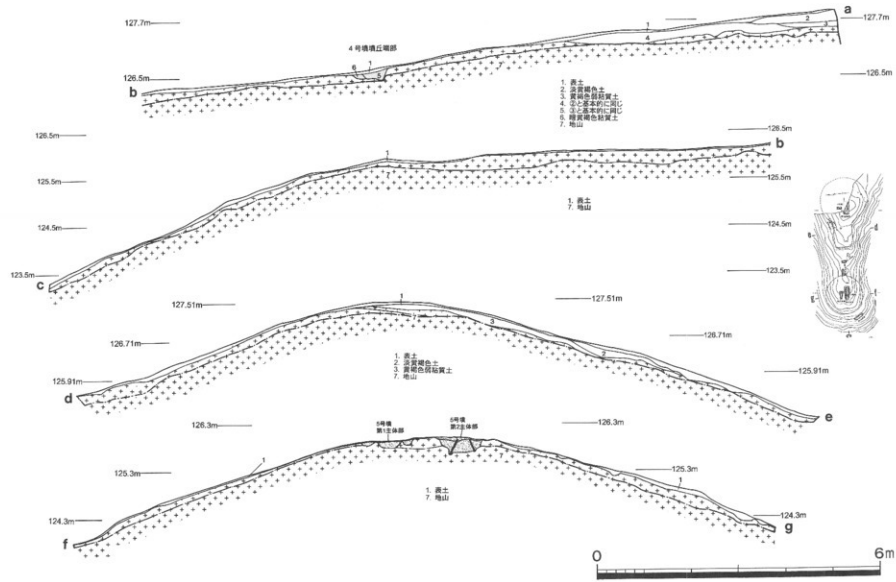
また、木棺痕跡の肩部の両側で石を検出した。検出位置は、南東端と北西端でそれぞれ２個ずつと、側面のほぼ中央部の北側の肩部で１個、南側の肩部で２個確認した。当初、これらの石は、棺を安置する時に固定用に使用された石と考えていた。しかし、北側くびれ部の墳丘端部付近で、くびれ端部に沿って30個ほどの石（大きさは20～30cm）の集石を検出した。集石は、南北約１m、東西約3.5mの規模で（第47図）、葺き石にしてはこのくびれ部にしか残存しておらず、埋葬施設の可能性も考え



第42図　4号墳・5号墳　調査前墳丘測量図(1/200)



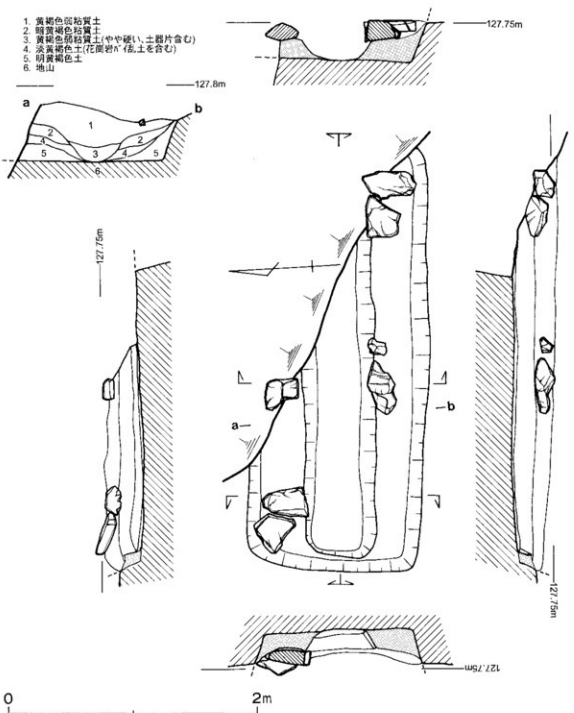
第43図　4号墳・5号墳墳丘測量図(1/200)



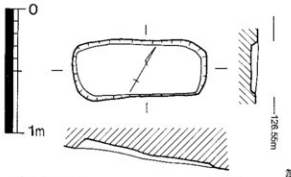
第44図　4号墳・5号墳墳丘断面図(1/80)

られたが、石の配置状況、断面観察でも表土直下で検出されたことから、盗掘その他の何らかの要因により比較的新しい時期にこの位置に置かれたのではないかと推測した。そして、これら集石はもともと主体部の石室を構築していた石ではないかと考えられた。このことより、木棺痕跡の肩部で検出された数個の石は、石室状のものの構築に使用された石の残りである可能性も考えられる。

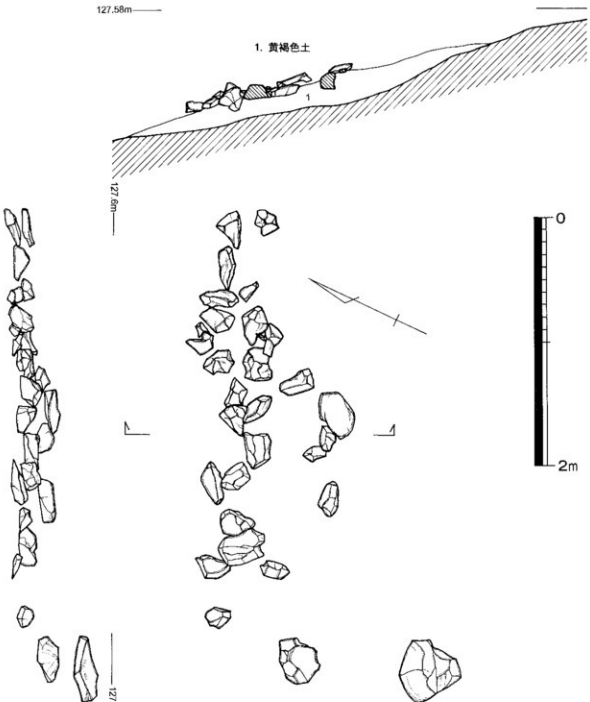
遺物は主体部の木棺内の埋土内から壺の破片が出土している。



第45図　4号墳第1主体部(1/30)



第46図　4号墳第2主体部(1/30)



第47図　4号墳集石状遺構(1/30)

(2) 第2主体部（第46図）

4号墳西側墳丘外のやや平坦面の表土層直下で検出した。主軸方向が斜面に平行で、長方形の平面形で、流出のため土壙の基底部のみ残存していた。規模は、長さ107cm、幅45cm、深さ7cmを測る。主軸方向はN61°E。遺物は出土していない。

3 遺物（第52図1）

第1主体部の木棺内埋土中から壺の胴部の破片が1点出土した。

外面に幅2mmほどのハケ目がみられ、内面はヘラケズリが施されている。器壁の厚さは5mmで、色調は内外面とも褐色を呈し、胎土中に1mm以下の角閃石と雲母を多量に含んでいる。胎土はいわゆる「下川津B類土器」[97]に類似している。小破片のため形態、技法的には時期は決定しがたいが胎土に特徴があり、この胎土から弥生時代後期終末から古墳時代前期前半頃と推測される。

また、肉眼では観察できなかったが実体顕微鏡による観察で、外面に赤色顔料が付着していることがわかった[30]。そして、第4章第2節でも述べているが分析を実施し、水銀朱であることが判明した。

4 小結

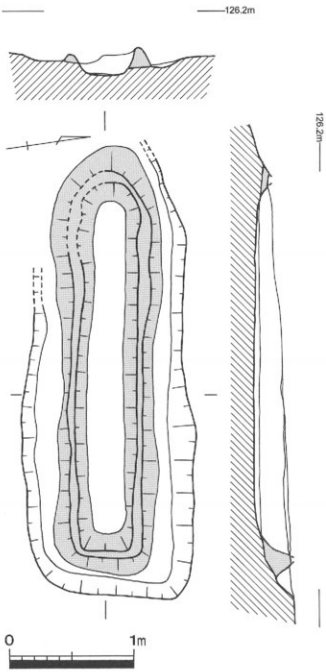
このように、後円部が半分以上削られてはいたが長方形の前方部が取り付く復元墳長18mの前方後円墳であることがわかった。そして、埋葬施設としては後円部中央からやや西よりの位置で、割竹形木棺を安置したと推定される主体部を1基（第1主体部）と、墳丘外で土壙墓を1基（第2主体部）検出した。また、この古墳に確実に伴う第1主体部は半分ほどが削られており、残存状態もあまり良くなかったが、石室の石材に使用されていたと思われる石材が北側くびれ部の墳端部で検出され（集石状遺構）、この主体部には石室が構築されていた可能性も推測される。

同墳の築造時期であるが、埋葬施設では主体部に割竹形木棺を使用しているという特徴のみで時期決定に乏しい。また、遺物はこの主体部から壺の胴部付近の破片が出土しているが、小破片のため形態、技法的には時期を決めがたい。ただ、胎土に使用されている粘土に特徴がみられる。それは胎土中に1mm以下の角閃石、金雲母の鉱物を多量に含み、色調は褐色を呈していることである。この特徴がある胎土を使用した土器は、いわゆる「下川津B類土器」に類似しており、この胎土から時期を推定すると弥生時代後期から古墳時代前期前半頃となる。しかし、検出された埋葬主体部が後円部中央に1基のみということなども絡めると同墳の築造時期は古墳時代前期前半まで下る可能性がある。

第6節　5号墳

1　墳丘（第42、43図）

5号墳は4号墳の西側に位置しており、当初の墳丘測量および地表面観察などでは4号墳と一体となった前方後円墳の前方部ではないかと推測されたものである。しかし、調査の結果、4号墳とは別の円墳であることが判明した。まず、墳丘の土層断面では表土直下で花崗岩バイ乱土の地山になり、盛り土などは確認されなかった。ただ、墳丘中央部で検出された2基の埋葬施設は表土直下で検出したが下部構造が残っているのみで、上部がほとんど削られている状態であることから、本来墳丘盛土があったものと推測される。このような残存状況から明確な墳丘端部を確認することができなかったが、第43図の墳丘測量図では標高124.5mのコンタ付近でやや傾斜が緩やかになることが判り、南北と西側の斜面での墳端は、124.5mのコンタが巡るところと考えられる。以上の状況から現状での墳丘の規模は、直径10m、高さ1mとなる。



第48図　5号墳第1主体部(1/30)

2　埋葬施設

埋葬主体部は、墳丘中央で2基と墳丘外で2基検出した。

(1) 第1主体部（第48図）

墳丘中央部の南側で検出した主体部で、頂部の表土層直下の面で墓壙の掘形およびその内側の粘土に覆われた木棺の痕跡を確認した。墓壙の掘形は、西側が尾根の斜面部になるため流出が激しく消失している。検出面での墓壙の規模は、長さ370cm、幅135cm、東端で深さ25cm、西端で12cmを測る。

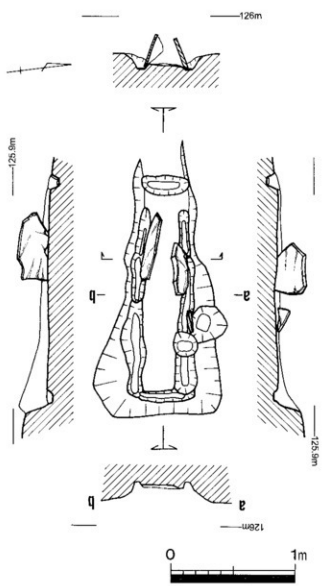
また、周辺部全体を黄白色粘土で覆われた木棺の床面は、横断面では床面中央がやや平坦な、U字形に窪んでおり、縦断面では両小口の端部が緩やかなカーブを描きながら上がっていることから、舟形木棺が安置されていた可能性が考えられる。また、主体部の上部がほとんど削られているために木棺の上部まで粘土が覆っていたかどうかは不明である。木棺の大きさは、長さ295cm、推定高さ45cmである。主軸方向はN85°Wである。

遺物は出土していない。

(2) 第2主体部（第49図）

第1主体部の北側に平行して構築された箱式石棺である。第1主体部と同様で主体部の上半部はほとんど削られていたが、中央部の一部分で、石棺の側壁石2枚がほぼ現位置を保って残存していた。墓壙は、西側に下るほど削平が激しく墓壙の基底部のみ残存している状況であった。墓壙の検出面での規模は、長さ220cm、幅100cm、東端の深さ20cmである。箱式石棺は、石棺中央部からやや西よりで安山岩製板状石材の両側壁石が残存しており、北側石の大きさは、長40cm、高さ25cm、厚さ4cm、南側は長さ55cm、高さ29cm、厚さ3cmを測る。石棺床面はほぼ平坦であるが西側に向かってやや傾斜している。その他の側壁および小口部については、板状石材を差し込む溝が検出された。これら小溝の規模は、幅10～20cm、深さ5～10cmであり、両小口部に1カ所ずつ、両側壁には3カ所ずつ確認された。この小溝の検出状況から両側壁には3～4枚、小口部には各1枚の板状石材を使用し、小口部は両側壁の石が小口石を挟む構造と考えられる。小口溝から石棺の規模を推定すると、内法で長さ170cm前後、幅は東側で40cm前後、西側で35cm前後で東側がやや広くなっている。深さは、よく残存している東壁で17cmを測る。また、前述したが石棺内床面が東側でやや高く、幅がやや広いことから東頭位と推測される。主軸方向はN84°Wである。

遺物は出土していない。

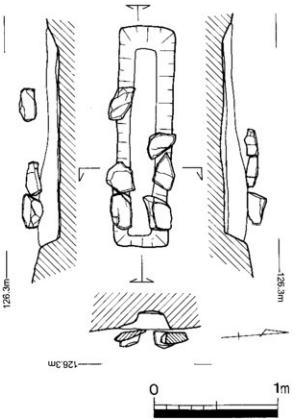


第49図　5号墳第2主体部(1/30)

(3) 第3主体部（第50図）

墳丘東側端部の外側の尾根稜線上に位置し、第1・第2主体部から東に約5m離れている。尾根と同じ東西に主軸を向けている。この主体部も削平が激しく、主体部の下部のみが残存していた。検出面での墓壙の規模は、長さ177cm、幅45cmで、東側の残存状況が良いところで深さ20cmを測る。床面や横断面がやや丸みを帯びており、墓壙のほぼ東側半分の両側壁の肩部に沿って、20～30cm大の石が3個ずつ並んでいる。このような検出状況からこれらの石は、棺材固定のためとも推測されるが、主体部のほとんどが流出しているためこれ以上の詳細については不明である。主軸方向はN88°Wである。

遺物は出土していない。



第50図　5号墳第3主体部(1/30)

(4) 第4主体部（第51図）

第1・第2主体部から南西に約7m、推定墳端部から約2m離れた墳丘外に位置する。主軸方向が等高線に平行するように構築された箱式石棺である。墓壙の掘形は、斜面上に構築しているため北東側の斜面上方の掘形のみが明瞭に残存している。規模は、長さ270cm前後、幅95cm前後を測る。石棺の側壁は、長さ20～40cm、厚さ15～25cmの石を、また両小口部に長さ24～29cm、高さ21～27cm、厚さ10～12cmほどの板状の石を立てて使用し構築している。床面は、中央部が低くなるようにやや丸くなっており、頭位部と推測される南東部の小口石の裏側には、裏込め石にしては大きな石を5個配している。また、この石の間から土器片が出土した。石棺の内法は、長さ180cm、幅35cm、深さ30cmを測る。主軸方位は、N53°Wを向いている。

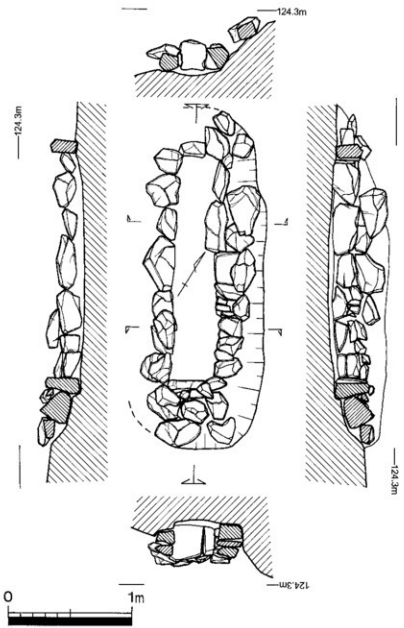
遺物は、前記したように南東側小口石の外側で壺の破片が出土している。

3　遺物（第52図2）

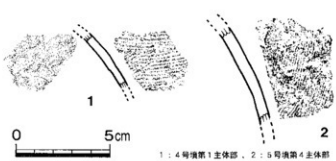
第4主体部南東側小口石の外側で出土した。壺の胴部付近の破片と考えられる。外面には幅2mm前後のハケ目が施され、内面はナデ調整がみられる。胎土中には、3mm以下の石英、長石、赤色粒を多く含み、0.2mm以下の火山ガラスと少量の雲母と角閃石を含んでいる。色調は赤褐色を呈しており、焼成は良好である。

4　小結

以上のように同墳は、直径約10mの円墳であることがわかり、埋葬施設が墳丘内で2基、墳丘外で



第51図　5号墳第4主体部(1/30)



第52図　4号墳・5号墳出土土器(1/2)

2基の計4基検出された。第1主体部、第2主体部は墳丘のほぼ中央に平行し主軸を東西に配して構築され、第1主体部では断面観察から舟形木棺を安置していたと推測される。そして、この主体部と比較的構築状況が類似していると思われるものに国分寺町六ツ目古墳[4]の第2主体部が上げられる。この主体部の墓壙の規模は、長さ3.9m、幅1.36m、深さ0.34mで、木棺の規模は長さ290cm、直径33cmに復元され、5号墳の第1主体部と規模的にもよく似ている。第2主体部は、残存状況は悪いものの板状の石材を使用した箱式石棺であった。また、墳丘外の埋葬施設では墳丘東側の第3主体部は削平が激しく主体部の下部のみが残存している状況で内部構造まではわからなかった。そして、南西側の第4主体部は塊石を使用した箱式石棺であった。

これら4基の主体部の築造順序、時期であるが、主体部の配置、主軸方向などから第1主体部、第2主体部が比較的近い時期に構築されたあと、第3主体部、第4主体部が築造されたと考えられる。また、第4主体部から土器片が若干出土しているが、壺の胴部破片のため時期を明確にしえない。しかし、第1主体部と構築構造が類似している六ツ目古墳

第2主体部の築造時期が、古墳時代前期前半頃に編年されていることや東隣の4号墳の築造時期が古墳時代前期前半頃と推測され、あまり時期差がないと思われることから同墳の築造時期も、古墳時代前期前半頃と一応推測しておく。

註

(1) 椿 真治ほか『みそのお遺跡 －県営御津工業団地造成工事に伴う発掘調査－ 』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 87 岡山県教育委員会 1993

(2) 都出比呂志「6 墳墓」『岩波講座日本考古学4 集落と祭祀』 岩波書店 1986

(3) 突出部の長さはこのように円丘部から突出部へ変化する点を結んだライン（D－P）と突出部の墳端を結んだ距離とした。ただ墳丘の設計などを考える場合、円丘部の直径を基準として、その円丘部の端Tから突出部の墳端までを突出部の長さとする場合もある。ここではひとまず前者の長さを突出部の長さとした。よって下段までを墳端とするときは、その長さはS－Vで測った。

(4) 森下英治ほか『国分寺六ツ目古墳』（四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告28） 香川県教育委員会 1997。この平尾墳墓群の報告書作成にあたり、この『国分寺六ツ目古墳』の報告書と次の『石塚山古墳群』の報告書はともに内容が濃く、とても参考になった。

(5) 國木健司『石塚山古墳群』 綾歌町教育委員会 1993

(6) 李健茂ほか「義昌茶戸里遺跡発掘進展報告(Ⅰ)」『考古学誌』1 韓国考古美術研究所 1989。粘土床の縦断面の端部の角度については、一般的に割竹形木棺の場合、直角に近いと考えられがちであるが、この茶戸里1号墳の割竹形木棺の一方の端部は丸く仕上げられている。つまり割竹形木棺でも端部が丸いものはあり、粘土床の縦断面だけでは本来の木棺の形はわかりづらいのである。

(7) 後藤守一「漆山古墳実査報告」『考古学雑誌』14－13 1924

(8) 木棺の高さは前述のように45cmくらいまで可能であるので、茶戸里1号墳のものよりやや高めで、45cmぎりぎりまで高さがあるとすると、棺内の高さは31cmまで可能となる。ちなみに小生は身長168cmで、肩幅は45cmほどであるが、寝たときに必要な高さは腹部で24cmほどである。

(9) 香川県の前期古墳の頭位を検討した玉城一枝氏によると、東西主軸が多く、西頭位が多いとのことである。玉城一枝「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」『末永先生米寿記念献呈論文集』 1985

(10) 立岩遺蹟調査委員会『立岩遺蹟』 河出書房新社 1977

(11) この土器についてはいろいろな方に御教示いただいたが、おもに正岡睦夫氏、寺沢薫氏、大久保徹也氏などのお考えによった。御教示いただいた方々に記して謝意を表したい。

(12) 確実なものでは岡山県楯築弥生墳丘墓が最も古いようである。近藤義郎ほか『楯築弥生墳丘墓の研究』1992

(13) 間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』13 1977

(14) 赤塚次郎「環龍寺山山頂墳と山中様式」『弥生文化博物館研究報告』1 1992。このことについては寺沢薫氏に御教示いただき、赤塚次郎氏にお世話になった。記して謝意を表したい。

(15) 赤穂市教育委員会『有年原・田中遺跡』 1991

(16) 広島県西願寺遺跡［広島県教育委員会『西願寺遺跡群』1974］、岡山県金敷寺裏山墳丘墓［間壁忠彦・間壁葭子「岡山県井原市金敷寺裏山古墳」『倉敷考古館研究集報』5 1968］、黒宮大塚墳丘墓［註(13)文献］、宮山墳丘墓［高橋護ほか「宮山墳墓群」『総社市史』考古資料編 1987］、鋳物師谷1号墳丘墓［春成秀爾ほか「備中清音村鋳物師谷1号墳墓調査報告」『古代吉備』6 1969］、都月坂2号墳丘墓［近藤義郎「都月坂2号弥生墳丘墓」『岡山県史』考古資

料 1986]、香川県典10、11号墓［古瀬清秀「原始・古代の寒川町」『香川県大川郡寒川町史』1985］など。

(17) 広島市西願寺遺跡の鉄製品には朝鮮半島からの舶載品が比較的多く含まれていると考えられている。松井和幸氏の御教示による。記して謝意を表したい。

(18) 釜山華明洞5号墳が4世紀中葉ころと考えられている。このほか金海七山洞古墳群にも4世紀後半の竪穴式石室がある。釜山大学校博物館『釜山華明洞古墳群』1979。慶星大学校博物館『金海七山洞古墳群』1989。

(19) 鄭澄元「5 墓制［1］韓国」『日韓交渉の考古学－弥生時代篇』 六興出版 1991。大韓民国の竪穴式石室については武末純一氏にいろいろと御教示いただいた。記して謝意を表したい。

(20) 李相吉（武末純一：訳）「韓国・昌原徳川里遺跡発掘調査概報」『古文化談叢』32 1994。また河仁秀（甲元真之：訳）「嶺南地方支石墓の型式と構造」『古文化談叢』32 1994 に支石墓の内部主体としての竪穴式石室が比較的多く掲載されている。

(21) 釜山直轄市立博物館『釜山杜邱洞林石遺蹟』 1990

(22) 李餔茂・徐聲勲『咸平草浦里遺跡』 国立光州博物館 1988

(23) 趙由典「企南和順青銅遺物一括出土遺跡」『尹武炳博士回甲紀念論叢』 1984

(24) 李餔茂ほか『義昌茶戸里遺跡発掘進展報告（Ⅳ）』『考古学誌』 7 1995

(25) 福岡市教育委員会『吉武高木』 1986。この遺跡については武末純一氏にいろいろと御教示いただいた。記して謝意を表したい。

(26) 寺沢薫「弥生時代舶載製品の東方流入」森浩一編『考古学と移住・移動』 同志社大学考古学シリーズ 1985
亀田修一「舶載品の流入」『岡山県史２－原始・古代１』 岡山県史編纂委員会 1991

(27) 大久保徹也ほか『上天神遺跡』（高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告６） 香川県教育委員会 1995

(28) 下澤公明「弥生時代の“波止場”の跡か－倉敷市・上東遺跡－」『所報吉備』24 1998。1998年４月24日付け山陽新聞記事。

(29) もし平尾３号墓の築造開始が第３主体部の土壙墓の土器の年代である弥生時代中期末ころまで遡るとすると、前方後円形の墳丘はやはりこの時期にある程度意識されていたと考えたほうがよいであろう。しかし竪穴式石室がいつ構築されたかを推測することは難しい。つまり第３主体部の土壙墓が墳丘築造当初であったとしても、竪穴式石室が例えば、その数年後に築かれることもあるであろうし、20～30年のちに築かれることもあるであろう。つまりこの平尾３号墓の築造開始時期が弥生時代中期末であったとしても、竪穴式石室の構築時期が中期末であるとは当然言えないのである。後期初頭の可能性も当然ありうるのである。ただ本文の中で述べたような朝鮮半島でのその時期の墓の状況をみると、中期末まで遡る可能性はあると考えているが。

(30) 胎土分析の表面観察の際に確認されたもので、高橋護氏に御教示いただいた。

引用挿図（いずれも一部改変引用）

第31図：註（6）

第38図１、２：註（20）河仁秀文献

第38図３～６：註（21）

第39図：註（24）図版14から作成

第４章　出土遺物の自然科学的分析

第１節　出土土器の胎土分析

１　はじめに

この胎土分析では、蛍光Ｘ線分析法および実体顕微鏡観察の二つの分析方法により各墳墓出土土器の胎土が似ているか、似ているとすればどのようなグループをなすかをまず検討した。そして次に高松平野部の上天神遺跡[1]、空港跡地遺跡[2]、国分寺六ツ目古墳[3]、善通寺市旧練兵場遺跡[4]の各遺跡から出土した弥生時代後期から古墳時代前期前半の土器との比較を行い、差異について検討した。

分析に使用した装置は、波長分散型蛍光Ｘ線分析装置（リガク）である。

２　分析結果

分析方法は、前記した蛍光Ｘ線分析法により含有元素の量を測定し、実体顕微鏡観察では土器の表面にみられる岩石、鉱物などの有無、大きさ、量を調べることで胎土の差異を検討した。

分析試料は平尾２号墓、３号墓、４号墳、５号墳の埋葬施設、墳丘部から出土した14点の土器で、分析した土器試料の一覧表を第１表に示している。

まず、蛍光Ｘ線による分析では、K、Ca、Sr、Rbの４元素に顕著な差があることから、第53図K-Ca、第54図Sr-Rbの各散布図で検討した。この結果、第53図K-Caでは試料番号１、２、５、７、８、９、11、12のグループ、試料番号３、４、６、10のグループ、試料番号13と試料番号14の４つに分かれる。また、第54図のSr-Rb散布図では、１、３、５、６、７、８、９、11、12のグループと２、４、10のグループと13と14の４つのグループに分かれた。この二つの散布図で共通して分かれる試料は１、５、７、８、９、11、12と４、10と13と14の試料である。

次に、周辺の遺跡から出土した土器と平尾墳墓群の土器との比較では第55図K-Caの散布図から、試料番号13が高松市上天神遺跡（下川津Ｂ類土器）の分布範囲に近接するが、他の土器は高松市空港跡地遺跡出土の１類土器[5]や国分寺六ツ目古墳出土のカ類土器[6]の分布範囲に入っている。また、第56図Sr-Rb散布図でもほぼ同様な結果となった。

次に、実体顕微鏡による土器表面の観察では、第１表に示した胎土観察表のようになった。この観察表から14点の土器は鉱物の有無により大きく３つに分類が可能である。

ａ類……４mm以下の石英、長石粒を多く含み、0.5mm以下の雲母、角閃石、赤色粒のどれかを少し含む土器。

ｂ類……ａ類の胎土に0.5mm以下の火山ガラス（透明・黒色）含む土器。

ｃ類……１mm以下の角閃石、金雲母を多量に含む土器。

このように分類したものと、蛍光Ｘ線分析法で分かれたものとを比較すると、ａ類とｂ類が混在して分布しているが、なかにはまとまるものもみられた。

3 まとめ

以上、平尾墳墓群出土土器を蛍光X線分析法と実体顕微鏡観察による胎土分析の結果を整理すると、（1）蛍光X線分析法による胎土分析では分析値の差異で4つのグループに分かれる。

Aグループ　試料番号1、5、7、8、9、11、12

Bグループ　試料番号4、10

Cグループ　試料番号13

Dグループ　試料番号14

そして、実体顕微鏡による観察では、大きく3つに分類でき、蛍光X線分析法で分類されたものと対比すると、A、B、Dグループがａ、ｂ類に対応し、4mm以下の石英、長石を多く含み、0.5mm以下の雲母、角閃石、火山ガラスを含む胎土である。また、Cグループはｃ類に対応し、胎土中に1mm以下の角閃石、雲母を多量に含む土器である。

このように、蛍光X線分析でA、B、Dグループに分かれた胎土が実体顕微鏡観察では、ａ類、ｂ類の2つの胎土になり岩石、鉱物の観察による分類では明確に分かれなかった。

（2）平尾墳墓群と周辺遺跡から出土した土器との比較では、4号墳の第1主体部の埋土から出土した試料番号13の壺の破片が蛍光X線分析で高松市上天神遺跡の胎土に類似していることがわかった。

また、その他の土器は、空港跡地遺跡および国分寺六ツ目古墳の在地で生産された土器の胎土の分布範囲に入った。

以上のように、13の土器は特徴ある胎土で（下川津B類）、胎土を構成する粘土が高松市石清尾山丘陵南端付近を中心とする地域の素地土を用いていることなどから搬入土器であることが推測される[7]。その他の火山ガラスや雲母、角閃石、赤色粒を少量含む土器は、各遺跡周辺の素地土に含まれており普遍的であるようで、在地で生産された土器と考えられる[8]。

註

(1) 大久保徹也ほか「上天神遺跡」高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6冊　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1995.12

(2) 蔵本晋也ほか「空港跡地遺跡」空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1997.9

(3) 森下英治ほか「国分寺六ツ目古墳」四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二八冊　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1997.8

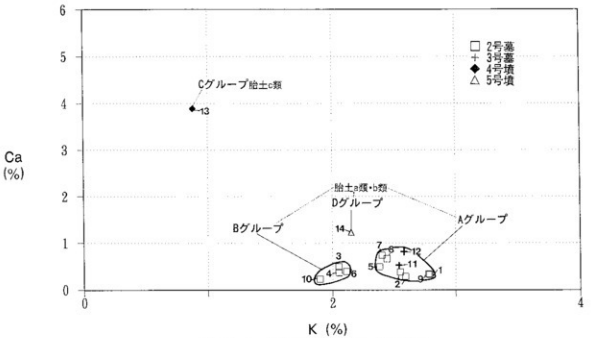
(4) 森下英治「旧練兵場遺跡」平成5年度国立善通寺病院内発掘調査報告　香川県教育委員会　1994.3

(5) 空港跡地遺跡の1類土器は、遺跡近在に粘土の採土地があることが述べられており、在地産の土器である。

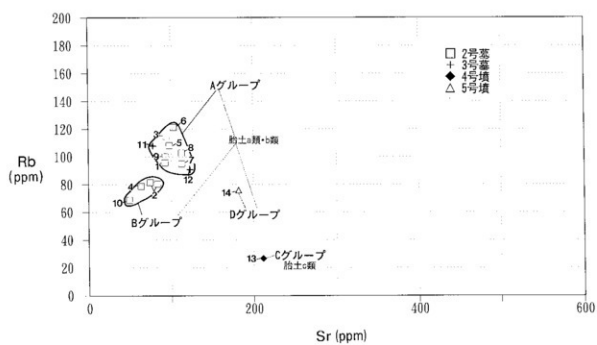
(6) 国分寺六ツ目古墳のカ類土器は、同遺跡出土の弥生土器に胎土が比較的似ており、国分寺地域の在地産胎土の特徴を示している可能性がある。

(7) 註（1）と同じ

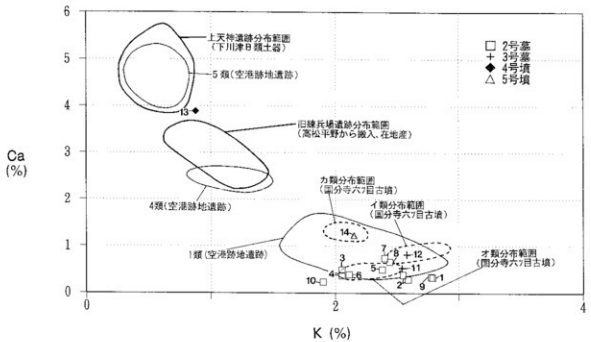
(8) 平尾墳墓群の出土土器には、胎土中に火山ガラスを含む土器が目立つが、讃岐地方のこの時期の土器には普遍的に入っており、この胎土から生産地を特定する指標にはならないことを蔵本晋也氏から御教示いただいた。



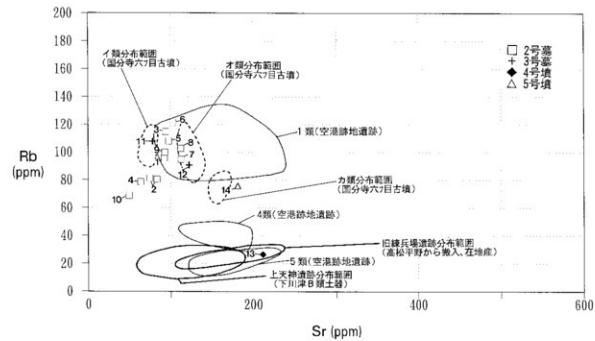
第53図　K-Ca散布図　各墳墓出土土器の比較



第54図　Sr-Rb散布図　各墳墓出土土器の比較



第55図　K-Ca散布図　平尾墳墓群と周辺遺跡出土土器の比較

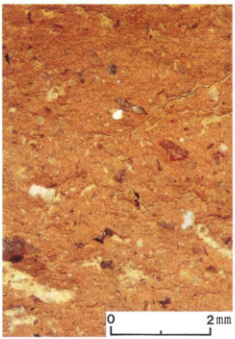


第56図　Sr-Rb散布図　平尾墳墓群と周辺遺跡出土土器の比較

第１表　土器観察・胎土分析表(%)　ただし、Sr・Rbはppm.

番号	図面番号	出土地区	器種	形態・技法	調整	胎土	色調	胎土分類	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb
1	第24図2	2号墓第10主体部	壺	胴部と底部との屈曲部で平底	外ーヘラミガキ 内ーヘラケズリ	4mm以下の石英、長石を多く含む 0.5mm前後の黒色、赤色粒を少し含む	外ー明赤褐色 内ー明赤褐色	a類	2.79	6.15	69.50	1.03	15.73	0.33	92	96
2-1	第24図3	2号墓第10主体部	壺	底部付近で平底と思われる。	2mm以下の石英、長石を多く含む。 1mm以下の火山ガラス、角閃石、赤色粒を少し含む。	2mm以下の石英、長石を多く含む。 1mm以下の火山ガラス、角閃石、赤色粒を少し含む。	外ー灰褐色 内ー灰褐色	b類	2.55	7.03	68.43	1.06	14.73	0.38	83	80
2-2		2号墓第10主体部	壺						2.59	5.97	65.59	0.94	17.34	0.29	74	81
3		2号墓第4主体部	壺	胴部付近？		2mm以下の石英、長石を多く含む。	外ー淡黄褐色 内ー黄褐色	a類	2.05	6.93	65.93	0.98	16.54	0.49	84	115
4	第24図1	2号墓第3主体部	直口壺	直口壺の胴部	外ー縦方向のハケ調整 内ー絞り痕跡	2mm以下の石英、長石および0.3mm以下の雲母を含む。	外ー橙色 内ー橙色	a類	2.05	12.68	52.75	1.83	17.02	0.37	63	79
5		2号墓第3主体部	壺	胴部	外ーナデ 内ーヘラケズリ	1mm前後の石英、長石を多く含む。 0.2mm以下の火山ガラス(透明、黒色)、赤色粒を少し含む。	外ー灰黒色 内ー明茶褐色	b類	2.38	9.57	60.83	1.56	15.35	0.49	98	108
6		2号墓第6主体部	壺？	胴部？		2mm以下の石英、長石を多く含む。雲母を少し含む。 0.3mm以下の角閃石を少し含む。	外ー明橙色 内ー茶褐色	a類	2.11	6.53	66.13	0.90	16.61	0.39	103	121
7		2号墓第5主体部	壺？	胴部？		2mm以下の石英、長石を多く含む。 0.2mm以下の火山ガラス(透明、黒色)を多く含む。	外ー明茶褐色 内ー暗灰色	b類	2.40	7.43	66.95	1.07	13.75	0.74	113	95
8	第24図4	2号墓円丘部東側面	壺	やや上げ底気味の底部	外ー丁寧なナデ 内ー粗いハケ調整	2mm以下の石英、長石を多く含む。 0.5mm以下の火山ガラス(透明、黒色)を多く含む。	外ー黄橙色 内ー黒褐色	b類	2.44	7.11	63.37	1.02	15.28	0.66	112	103
9	第24図5	2号墓東側くびれ部端部	壺	平底の底部付近	外ーヘラミガキ 内ーヘラケズリ	3mm以下の石英、長石を含む。 0.3mm以下の雲母、角閃石を含む。	外ー明赤褐色 内ー明赤褐色	a類	2.78	6.03	65.35	0.96	16.72	0.33	93	100
10	第24図6	2号墓西側くびれ部端部外	壺	直口壺の口縁部で頸部からほぼ直立に立ち上がり、直角に折れ端部は上方に拡張する。	外ーヨコナデ 内ーヨコナデ	3mm以下の石英、長石を多く含み。 僅かの火山ガラスを含む。	外ー明赤褐色 内ー明赤褐色	b類	1.90	6.43	67.98	1.15	16.72	0.23	49	89
11	第37図1	3号墓第3主体部北側	壺	球状単分、胴部中央に最大径(17cm)を持ち、口縁部はゆるやかに屈曲し、端部は上方からやや内側に拡張。復元高21.3cm、口径10cm	外ー頸部はヘラ描き斜線文下は、ヘラミガキ調整。 内ー指押さえのあとナデ調整。口縁部は回転ナデ。	4mm以下の石英、長石を多く含む。	外ー暗赤褐色 内ー暗赤褐色	a類	2.54	8.22	59.24	1.18	17.33	0.53	76	108
12	第37図2	3号墓第3主体部南側	壺	胴部破片。	外ー縦ハケ、ヘラミガキ 内ー指押さえのあとナデ。 ヘラケズリ	3mm以下の石英、長石を多く含む。 0.5mm以下の火山ガラス(透明・黒色)を多く含む。 0.5mm以下の赤色粒、角閃石を少し含む。	外ー暗赤褐色 内ー暗赤褐色	b類	2.58	9.95	56.00	1.12	15.91	0.81	123	91
13	第52図1	4号墳第1主体部	壺	胴部破片。 胎土は「下川津B類土器」に類似外面に赤色顔料付着	外ーハケ調整 内ーヘラケズリ	1mm以下の角閃石、雲母を多量に含む。	外ー褐色 内ー褐色	c類	0.88	16.64	46.19	2.05	14.63	3.88	211	26
14	第52図2	5号墳第4主体部	壺	胴部破片。	外ーハケ調整。 内ーナデ調整。	3mm以下の石英、長石、赤色粒を多く含む。 0.2mm以下の火山ガラス(透明、黒色)、雲母、角閃石を含む。	外ー赤褐色 内ー赤褐色	b類	2.15	14.47	51.57	1.29	13.80	1.23	182	76

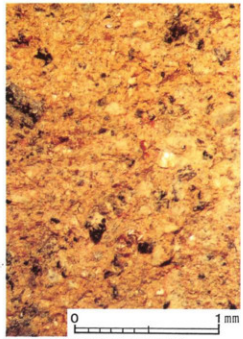
胎土分類は実体顕微鏡観察により、a類・b類・c類に分類した。



1．2号墓第10主体部 胎土a類

2．2号墓第3主体部 胎土b類

3．4号墳第1主体部 胎土c類



4．4号墳第1主体部出土土器
外表面赤色物質付着状況

第57図　平尾墳墓群出土土器表面の実体顕微鏡写真

第2節　赤色物質について

1　はじめに

以下の平尾墳墓群の各遺構から出土した赤色物質、赤色粘土の由来について検討した。

(1) 2号墓第2主体部出土の赤色物質

(2) 3号墓第1主体部の粘土床の赤色粘土

(3) 4号墳第1主体部内から出土した壺の破片の表面に付着していた赤色物質

2　分析結果

赤色物質の分析は、分析試料の状態により蛍光X線分析法、X線回折分析法、実体顕微鏡観察の3つの方法を用いて分析した。

(1) 2号墓第2主体部木棺内の赤色物質について

この赤色物質の試料を粉末にし、蛍光X線分析法、X線回折分析法で分析した。

蛍光X線分析法の分析結果を第2表に示す。この分析値から普通の土器などに使用されている粘土の成分とほとんど変わらず、鉄分の量も普通の粘土と変わらない含有量であることがわかった。また、水銀も全く検出されず、X線回折分析法による鉱物同定も実施したが、第58図の回折図のように赤鉄鉱（ベンガラ）、辰砂（朱）のピークは検出されず、石英、斜長石、カオリナイトなどの鉱物のピークがみられた。

(2) 3号墓第1主体部粘土床の赤色粘土について

粉末にした赤色粘土を蛍光X線分析・X線回折分析装置で分析した。この結果、蛍光X線分析法では第2表のように2号墓第2主体部の赤色物質と同様で、鉄分の量が特別多いわけでなく、水銀も検出されていない。また、X線回折分析法でも同様であった（第59図）。

(3) 4号墳第1主体部内から出土した壺破片の外面に付着していた赤色物質について

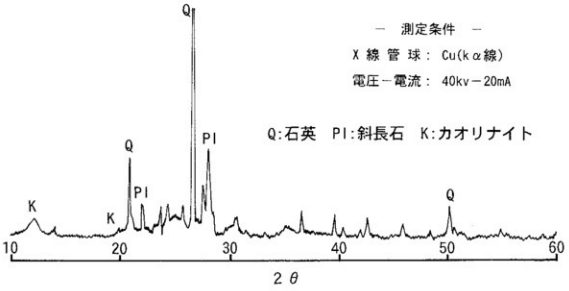
土器表面の胎土観察中に確認されたもので、壺の外表面に微量に付着していた赤色物質である（第57図4）。土器が小破片で、そのうえ付着している赤色物質が微量のため蛍光X線分析法で付着物の表面を非破壊で分析した。その結果、第60図のX線スペクトル図のように水銀（Hg）のピークが検出された。

3　まとめ

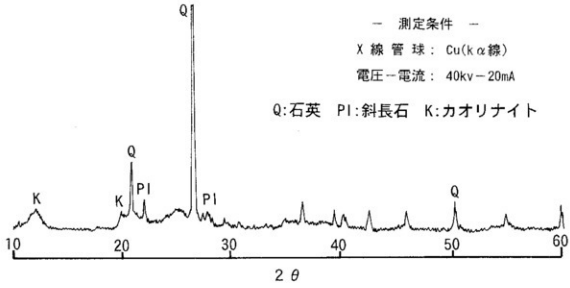
以上、3つの赤色物質の由来について検討し、2号墓第2主体部と3号墓第1主体部の赤色物質は、前述したように、朱（水銀）・ベンガラ（赤鉄鉱）などの成分が検出されなかったことや鉱物組成、化学成分から赤色の粘土と考えられる[1]。また、4号墳第1主体部出土の壺の表面に付着していた赤色物質は、朱（水銀）と考えられる。

註

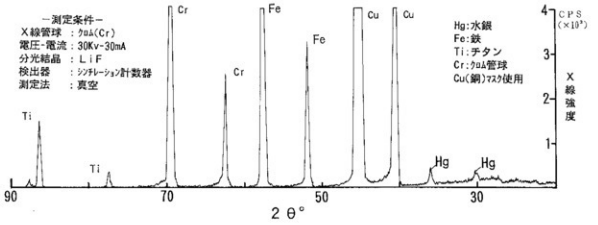
(1) 国分寺六ツ目古墳の1号主体部、2号主体部にも同様の赤色粘土が使用されていたようで同古墳の赤色粘土の分析では、花崗岩の風化によってできた赤色粘土であることが推測されており、平尾墳墓群の赤色粘土も同様のものと考えられる。



第58図　2号墓第2主体部赤色粘土のX線回折図



第59図　3号墓第1主体部赤色粘土床のX線回折図



第60図　4号墳第１主体部出土土器表面の蛍光Ｘ線スペクトル図

第２表　赤色粘土の化学分析値(%)

試料 / 元素	２号墓第２主体部棺床面赤色粘土	３号墓第１主体部赤色粘土床
SiO_2	65.05	61.07
TiO_2	0.73	1.34
Al_2O_3	20.77	22.94
Fe_2O_3	6.27	10.49
MnO	0.04	0.06
MgO	1.58	1.58
CaO	0.41	0.36
Na_2O	1.80	0.64
K_2O	3.27	1.43
P_2O_5	0.02	—

第３節　石棺石材の産地について

１　はじめに

ここでは２号墓第１主体部の石棺石材、３号墓第１主体部の竪穴式石室石材、５号墳第４主体部の石棺石材を偏光顕微鏡観察と蛍光Ｘ線分析法で分析し、これらの石材の産出地について検討した。

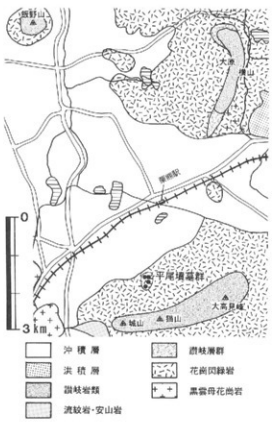
２　分析結果

(1)　２号墓第１主体部箱式石棺の板状石材

板状石材の化学組成（第３表）と偏光顕微鏡写真（第62図）を示す。この結果、この石材は斜方輝石安山岩で、讃岐岩類に属する岩石である。この火山岩が産出する産地でもっとも近いものは墳墓群の南に東西に連なる城山（標高375.2m）、猫山（467.7m）、大高見峰（504m）の山頂付近と、同墳墓群から北北東に約5.5km離れた綾歌町大原（標高255m）の西斜面である。そして、これらの原石の産地と比較したところ、顕微鏡観察では0.2mm前後の自形の斜方輝石を含み、大原に類似する組織が観察された。また蛍光Ｘ線分析の分析値でも大原の原石と各成分が似ている。

(2)　３号墓第１主体部の竪穴式石室石材と５号墳第４主体部の石棺石材について

３号墓第１主体部と５号墳第４主体部の塊状の安山岩石材の分析では、顕微鏡観察、蛍光Ｘ線の両方の分析とも大原および大高見峰の原産地原石と一致せず、この石棺石材の産地を明確にすることができなかった。



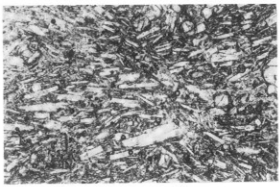
第61図　平尾墳墓群周辺の地質図(1/100,000)

３　まとめ

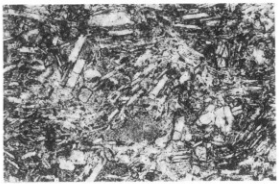
以上のように、各主体部の石材について検討したが、２号墓第１主体部の板状安山岩は綾歌町大原山塊の原石を使用していることがわかった。また、３号墓第１主体部と５号墳第４主体部の両方に使用されている石材は同じ原産地の原石をを使用しているが、今回の比較した原産地原石（大原、大高見峰）とは一致しなかった。しかしながら、使用されている石材が塊状で風化の状態などから大高見峰、猫山山塊で産出する安山岩と推測され、これら原産地の原石を蓄積し再検討する必要がある。

第3表　石室・石棺の石材および原産地原石の分析値（%）

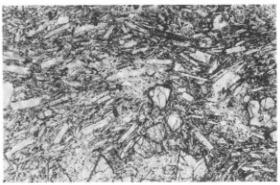
試料 / 元素	坂出市五色台	綾歌町大原	2号墓第1主体部	3号墓第1主体部	5号墳第4主体部
SiO_2	61.87	59.94	59.01	57.47	56.93
TiO_2	0.52	0.59	0.62	0.91	0.90
Al_2O_3	17.32	15.79	15.25	17.59	17.16
Fe_2O_3	5.48	5.85	6.02	6.93	7.28
CaO	3.99	4.86	4.64	6.86	6.99
K_2O	1.66	1.71	1.72	1.32	1.28



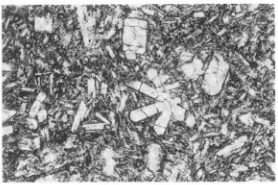
1．綾歌町大原原産地原石



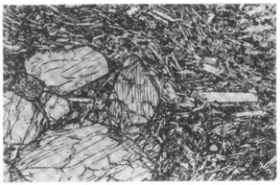
2．綾歌町大原原産地原石



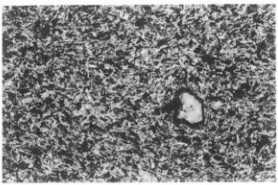
3．2号墓第1主体部石棺石材



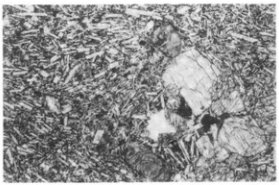
4．2号墓第1主体部石棺石材



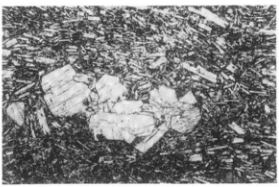
5．3号墓第1主体部石室石材



6．3号墓第1主体部石室石材



7．5号墳第4主体部石棺石材



8．5号墳第4主体部石棺石材

0　1mm

第62図　サヌキトイド原産地原石と平尾墳墓群石室石材の偏光顕微鏡写真

第5章　まとめ

平尾墳墓群は香川県のほぼ中央部、綾歌郡綾歌町に位置する弥生時代から古墳時代にかけての墳墓群である。これまで述べてきたようにこの遺跡はこの時期の墓制を考える上で極めて重要である。以下これまでの内容を簡単に整理し、そしてその意義について簡単にふれ、まとめとしたい。

2号墓

2号墓は標高138mの尾根の頂部に円丘部を設け、その南に延びる尾根上に突出部をもつ復元墳長約28mの前方後円形を呈する墳丘墓である。埋葬施設は円丘部に7基、突出部に10基の計17基が検出された。その種類は箱式石棺2基、割竹形木棺直葬1基、箱形木棺12基、土壙墓（？）2基である。このうち円丘部の頂部に並行して構築された第1主体部（箱式石棺）と第2主体部（割竹形木棺直葬）はこの17基のうちで最も大きく、棺自体もしっかりしている。これらを含めて円丘部には規模の大きい主体部がみられ、突出部の主体部とは明らかに格差がある。また、突出部の主体部には小規模なものが多く、成人と考えづらいものが多いことから、円丘部に埋葬された首長たちに関係した子供たち（？）を埋葬したというような想像も可能なのであろうか。

主体部の主軸方向をみると、円丘部の主体部では墳丘斜面の第7主体部を除いて主軸がほぼ東西であり、突出部では東西と南北の2つのグループに大きく分けることができる。主体部の主軸方向の違いは被葬者の出自、グループ内での立場の違いなどを示しているのかもしれない。

この墳丘墓の築造時期は、埋葬主体部から時期のわかる遺物がほとんど出土していないため、確定はできない。しかし墳丘のくびれ部から出土した壺の口縁部は時期を推測できるものである。この土器は弥生時代後期前半を前後する時期のものであり、他の主体部内や墳丘斜面で出土した土器の小破片を合わせ考えると、弥生時代後期前半には築造されたものと推測される。そして後期中葉から後半ころまで使用された可能性も考えておきたい。

3号墓

3号墓は前方後円形の墳丘墓で、円丘部は地形を反映した形で不整円形を呈し、墳丘中段にテラスをもつ2段築成である。墳丘は基本的に地山削り出しで構築し、墳頂部に多少の盛土をしていたようである。葺石、墳端部の石などなにもないが、墳丘中段テラスの北西部、西側の突出部側に区画の起点を示すような石がおかれていた。突出部は2段になっており、上段は平面形がバチ状を呈している。ここで墳丘を切ると、墳長は23.5mになる。下段まで墳丘とすると、突出部が2段に構成されることになり、その形は細長形になる。この場合の墳長は28.8mである。いずれにしても珍しい形態の例である。そしてさらにその北西部に一辺3mほどの台形のテラスがついている。これはその形、位置などから祭壇状の施設と考えた。つまりこの平尾3号墓の墳形は突出部の先に祭壇状のテラスをもつ、いびつな円丘部と2段になった特異な突出部がつく前方後円形の弥生墳丘墓と考えた。

埋葬施設は墳頂部に2基、墳丘斜面に1基、そして墳丘外に1基、合計4基確認された。これらの中で最もしっかりした埋葬施設は墳頂部やや南寄りに築かれた第1主体部の竪穴式石室である。自然板状石をほぼ直立に小口積みし、天井は木で覆われていた可能性を考えた。床面には赤い粘土を使っ

た立派な粘土床が残っていた。その形および石室の推定の高さなどから木棺はやや扁平な割竹形木棺と推測された。遺物は棺外の粘土床の上面に西に切先を向けた鉄剣1本だけであった。

第2主体部は墳頂部の北西端部に位置し、小口板を墓壙に埋め込んだ木棺直葬墓である。遺物はなかった。この木棺墓の残存状況から少なくともこの墳丘はもう50cm以上は高かったであろう、つまり盛土があったであろうと推測できた。

第3主体部は墳丘斜面に位置する土壙墓で、残存状況はよくなかったが、弥生時代中期末ころの土器2点が出土した。

そして、第4主体部が円丘部の南側外に築かれた箱式石棺である。遺物は出土していない。

以上のような概要であるが、問題は時期である。遺物は第1主体部（竪穴式石室）の棺外から出土した茎の長い鉄剣と第3主体部から出土した弥生時代中期末ころの土器だけである。このような鉄剣は弥生時代中期後半から古墳時代前期にみられるもので、それ以上の追及は現状では難しいようである。そこで第3主体部の弥生時代中期末の土器であるが、この墳丘形態や竪穴式石室は一般的に弥生時代後期後半の古いころからみられるものであり、両者をそのまま結びつけるには躊躇される。つまりこの土器と墳丘を全く別のもの、つまり偶然、中期末ころに作られた土壙墓の上に後期後半以降に前方後円形の墳丘墓が築かれたという考えがまずうかぶ。そして一方で第3主体部（土壙墓）の位置などからやはり両者が多少の時間幅があっても同じ墳丘内のものであるという考えも成立しうる。つまり前方後円形の墳丘、竪穴式石室なども中期末ころから後期初めころに作られたという考えである。

そしていろいろ検討した結果、後者の考えも全く否定はできないという可能性があることを提示した。つまり筆者自身どちらが正しいのかはよくわからない。しかし朝鮮半島でのこれまでの調査成果、今後の展開の可能性、そして西日本各地でのこの時期の墳墓の調査・研究の進展によって後者の可能性、つまり前方後円形の墳丘、竪穴式石室、割竹形木棺の粘土床などが弥生時代中期末ころまで遡る可能性は提示しておきたい。

4号墳

4号墳は長方形の前方部がとりつく復元墳長約18mの前方後円墳である。この古墳に確実に伴うとみられる主体部は、後円部の中央付近で確認された割竹形木棺を直葬した墓壙1基のみである。墓壙の東側半分ほどが削られており、あまり残存状況はよくなかったが、墓壙内には割竹形木棺を支えたと推測される石が数個残っていた。また、北くびれ部の石材の集まりがもし主体部に使用されていたものであるならば、割竹形木棺の外側に竪穴式石室状のものがあった可能性も考えられる。主軸方位はN88°Wとほぼ東西である。

遺物は主体部の木棺部分の埋土の中から出土した壺の胴部の破片だけである。4号墳の築造時期はこの土器によらざるをえないが、形態的には年代判定は難しい。ただこの土器の胎土はいわゆる「下川津B類土器」に類似しており、そうであるならば、弥生時代後期から古墳時代前期前半（一部前期いっぱいあるようであるが）の時期が推測できる。

またこの古墳の前方部墳端の西側約1.5m離れたところで土壙墓1基を確認している。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

4号墳の築造時期については明確な根拠はないが、内部主体の状況などから（弥生時代末～）古墳時代前期前半の可能性を考えている。

5号墳

5号墳は盛土がほとんど流出しており、本来の大きさはよくわからないが、直径は約10mと判断された。主体部は墳丘中央部に2基、墳丘外で2基検出した。墳丘内の2基は、主軸を東西にして並行して構築されていた。南側の第1主体部は舟形木棺を粘土で被覆していたと推測されるもので、北側の第2主体部は箱式石棺である。この第1主体部の舟形木棺を直葬したものと類似したものはこの付近では国分寺町の六ツ口古墳の第2主体部がある。墓壙の大きさも、木棺の長さもよく似ている。

遺物は墳丘外の第4主体部で壺の胴部の破片が出土しているだけで、時期は判別できない。

この5号墳の築造時期については明確な根拠はないが、古墳時代初頭と推測されている国分寺六ツ目古墳などとの比較からひとまず古墳時代前期のものと推測しておく。

平尾墳墓群の築造順序

以上4基の墳墓・古墳の概要を述べたが、次にこれらの関連を述べておきたい。まず3号墓が弥生時代中期末（～後期初）に築造されたものであるならば、次いで北東約110mに2号墓が後期前半に築造される。これは17基もの多数の埋葬施設があり、その使用年数はかなり長いと推測される。次いでそこから北西約100mに4号墳が築かれる。遺物が壺の胴部の破片1個であり、当然明確な年代は推測しづらいが、だいたい弥生時代末～古墳時代前期のものであり、そのように推測した。そして最後に遺物は出土していないが、5号が古墳時代前期？に築かれたと推測した。一応このように考えると、3号（標高約141m）→2号（標高約138m）→4号（標高約128m）→5号（標高約125m）と地形に沿って、高いところから徐々に下がりながら築かれたと推測される。しかしこのように考えれば地形的にはうまくいくが、3号と2号では墳形、主な埋葬施設の形態、埋葬施設の数などにおいてその先後関係がやはり気になる。しかし弥生時代中期末から後期末の時期はいまだ墓制において不安定で、多様な時期であり、あながちおかしいともいいきれない。

一方、3号が2号の次に築かれたとすると、墳形、埋葬施設の形態、埋葬施設の数などではスムーズに変遷することになるが、立地的には標高138m（2号）から141m（3号）に上がり、そして再び128m（4号）→125m（5号）と下がっていくことになる。ただこれも墓の築造が高さによらなければならないわけではないので、立地の変遷としてはスムーズではないが、当然可能な変遷である。

つまり立地上の変遷はいずれにも解釈できるのである。

割竹形木棺

またこれら4基の墳墓・古墳の埋葬施設で主たるものとして割竹形木棺がある。割竹形木棺は前述のようにすでに弥生時代中期初ころから日本で使用されていたようであるが、それでも弥生時代において一般的なものではないようである。そのなかでこの香川県地域では床の横断面が丸くなった、割竹形木棺またはそれに類するものを安置したのではないかと推測される例が、東の大川郡寒川町奥11号墓？、大川郡長尾町丸井古墳、高松市鶴尾神社4号墳？など、弥生時代終末期に比較的みることができ、今回の平尾墳墓群の例も古墳時代以前の貴重な例として加えることができそうである。つまり香川県では他地域にさきがけて割竹形木棺が比較的広く使用されていたのであろうか。今後の資料の増加に注目したい。

埋葬施設の方位

次に埋葬主体の方向に関しては、磁北による計測で、2号墓第1主体部N75°W、同第2主体部N78°W、第4主体部N78°W、3号墓第1主体部N84°E、4号墳第1主体部N88°W、5号墳第1主体部N85°Wである。現在の磁北は真北から西へ約6°偏っている。よってこれを真北に修正すると、2号墓第1主体部N81°W、同第2主体部N84°W、第4主体部N84°W、3号墓第1主体部N78°E、4号墳第1主体部N86°E、5号墳第1主体部N89°Eとなる。つまりそれぞれの墓の主たる埋葬施設の主軸方向はいずれも東西方向であり、東西軸から最大で12°しか違いがなくなる。当時、東西の方向は太陽の日の出と日の入りで判断したと推測されるので、太陽の方向がかなり意識されていた可能性が推測される。

いずれにせよ平尾墳墓群の中心的な埋葬主体はこれまで知られている香川県の古墳時代前期の主軸方向と一致している。そして3号墓が中期末であるならばこのような香川県地域における東西指向がその時期まで遡ることになるし、少なくとも2号墓の第4主体部は後期前半である可能性が高く、多少の振れはあるが、1年間での日の出の方位のズレは冬至と夏至でそれぞれ北と南に23.4°であるのでこの範囲内には入っており、この時期から東西指向があった可能性を示しているといえよう。

周辺の遺跡との関係

最後にこの綾歌町周辺の他の関連遺跡との関わりにふれたい。この平尾墳墓群の北北東約0.5kmに弥生時代終末期の墳丘墓を含む定連遺跡がある。さらに北約1.7kmに弥生時代終末期から古墳時代前期の石塚山墳墓・古墳群がある。この2号墓は弥生時代終末期と考えられているが、第1主体部は珍しい石積み墓壙をもつ。古墳時代初期と考えられている1号墳第1主体部は割竹形木棺を納めたやや特異な石室状の施設をもつが、木棺の上は天井石もなく、かつ粘土槨でもなくそのまま土で覆われたと推測される珍しいものである。さらに東の国分寺町六ツ目古墳の埋葬施設も古墳時代初期の例であるが、石塚山1号墳のものと似ており、木棺の上に天井石がなく、かつ粘土槨でもなく、砂混じりの粘土でそのまま覆われたと推測されている。被覆に関してはよくわからないが、平尾4号墳の第1主体部の構造とよく似ている。

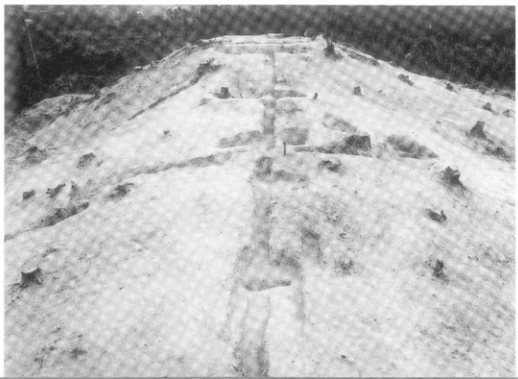
このように平尾墳墓群を含めたこれらのある面で定型化していない埋葬施設のあり方は香川県全体にも通じるようであり、香川県全域の地域性なのか、それとも瀬戸内海沿岸地域を通しての弥生時代後期から古墳時代初頭の時期的な特徴なのか今後検討していかなければならないであろう。

またこの綾歌郡地域では弥生時代後期から古墳時代初頭の墳墓と古墳群が比較的まとまっている。生産基盤など今後検討しなければならない点も多いが、香川県地域における弥生時代から古墳時代へ移り変わる時期の極めて重要な地域であり、さらに瀬戸内海沿岸地域も含めて、平尾墳墓群の意義は極めて大きいと考えている。

図　版

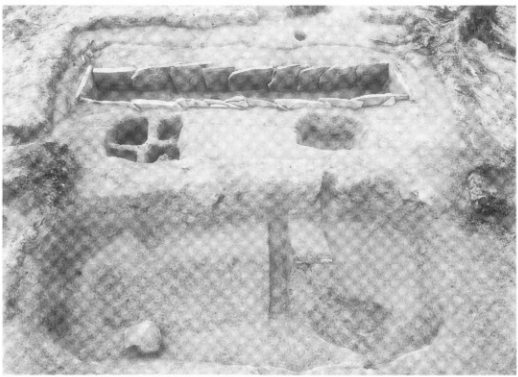
1．平尾墳墓群遠景
（北より）

2．2号墓調査前全景
（南より）

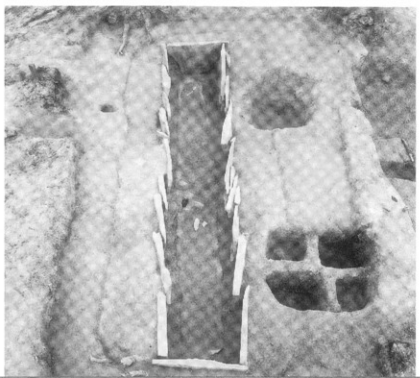


3．2号墓全景（南より）

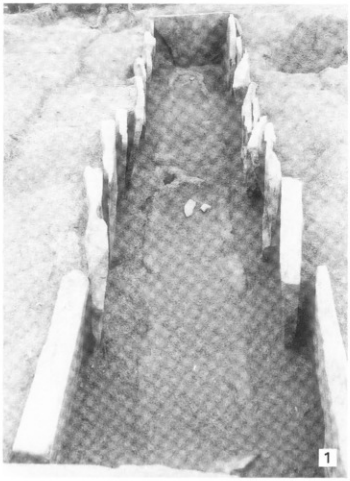
1．2号墓第1主体部
上面検出状況（南より）

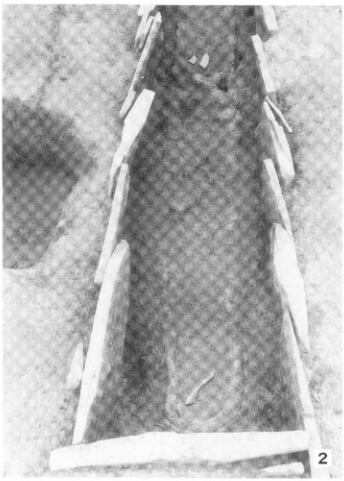


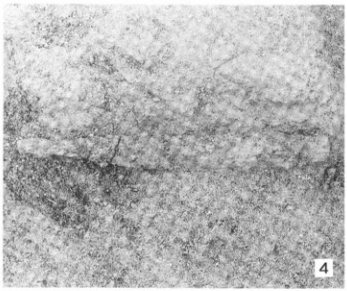
2．2号墓第1・第2主体部
（南より）



3．2号墓第1主体部（西より）





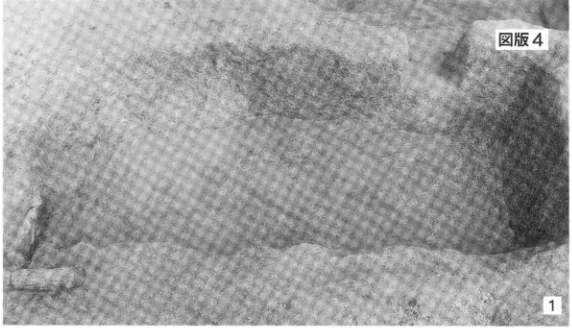


1．2号墓第1主体部（西より）

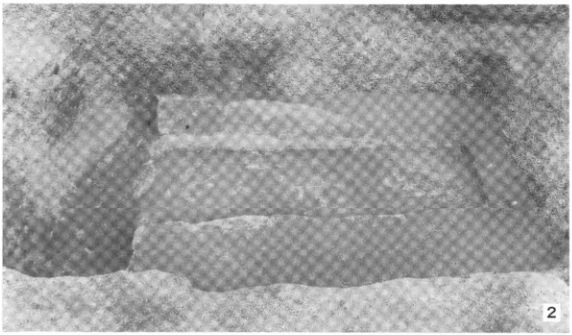
2．2号墓第1主体部（東より）

3．2号墓第2主体部（西より）

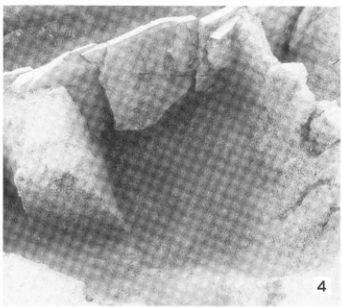
4．2号墓第2主体部鉄剣出土状況



1．2号墓第3主体部
（南より）



2．2号墓第4主体部
（南より）



3．2号墓第4主体部（南より）

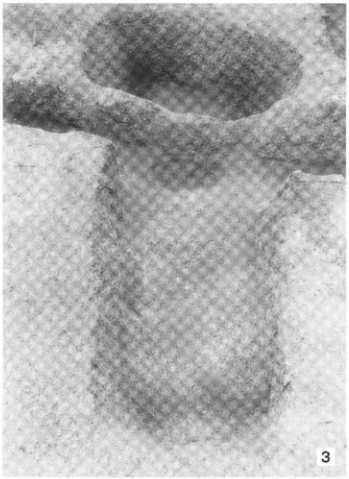
4．2号墓第5主体部（北より）

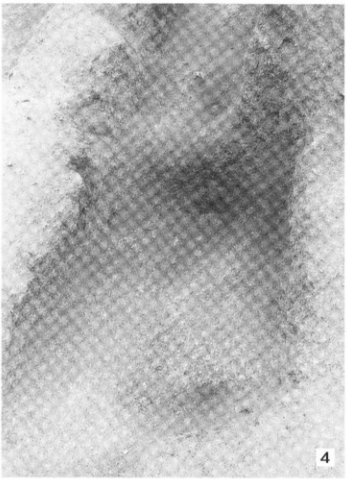
1．2号墓第7主体部（南より）

2．2号墓第8主体部（西より）

3．2号墓第9主体部（南西より）

4．2号墓第10主体部（北東より）



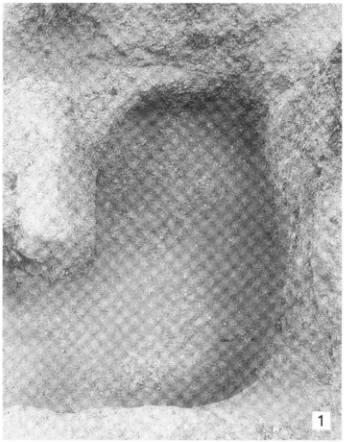


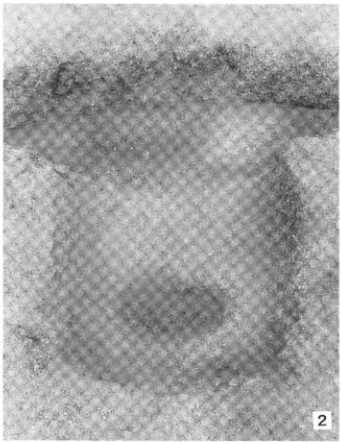
1．2号墓第11主体部（南西より）

2．2号墓第12主体部（南より）

3．2号墓第13主体部（西より）

4．2号墓第14主体部（西より）

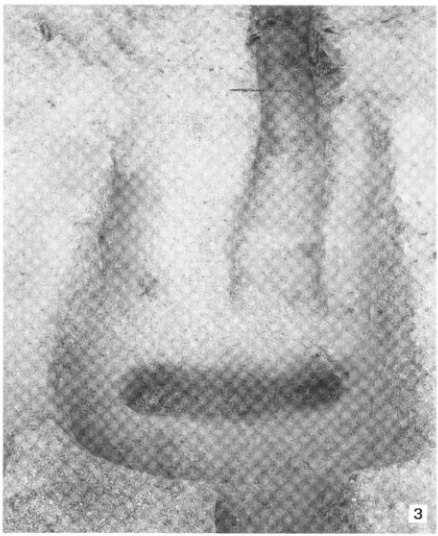

1

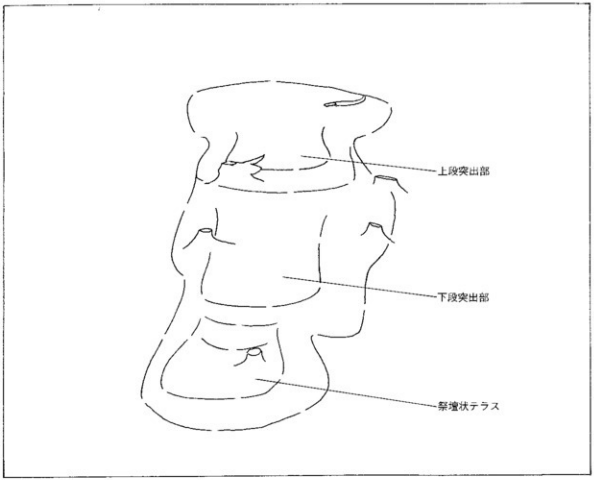

2

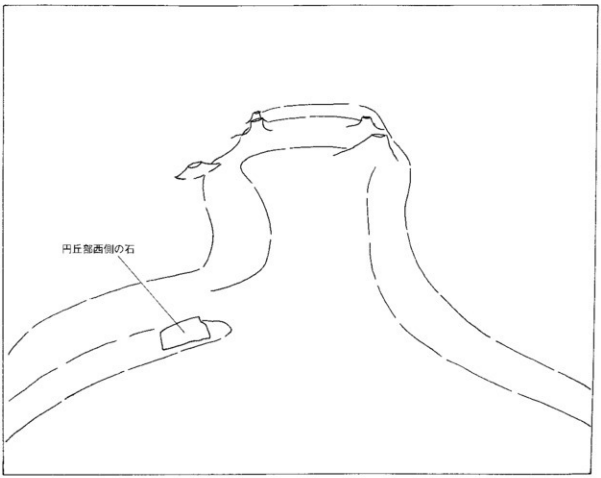
1．2号墓第15主体部（北より）

2．2号墓第16主体部（東より）

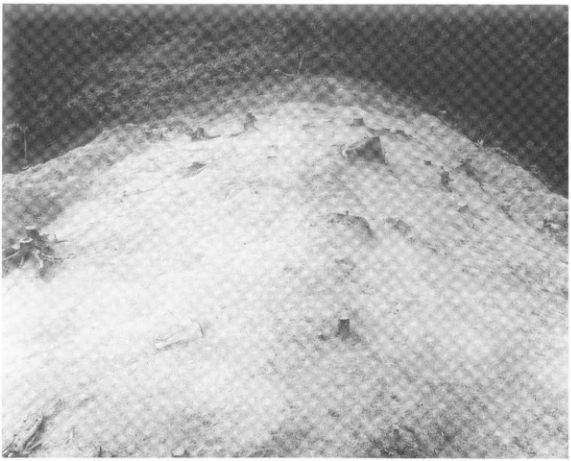
3．2号墓第17主体部（北より）


3

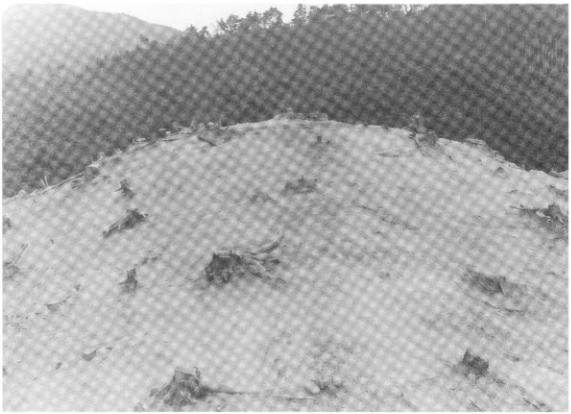

上段突出部
下段突出部
墓壇状テラス


円丘墓西側の石

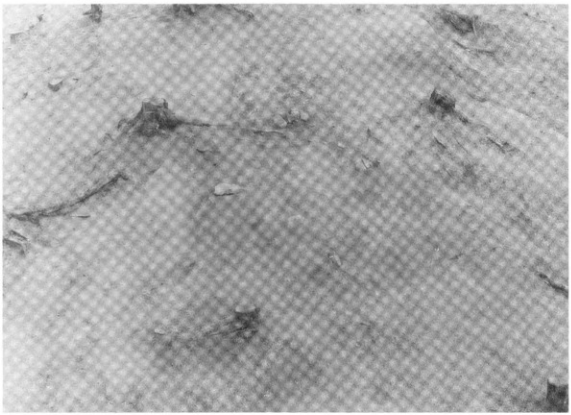
1．3号墓全景
（北西より）



2．3号墓突出部
（南東より）



1．3号墓突出部と
円丘部
（北西より）



2．3号墓祭壇状テラス
（北西より）